

現代ソ連における

ロシア・フォークロア学の動向とその問題点

坂内 徳明

目次

はじめに

I 主要な研究機関ならびに活動

II 全体的動向と理論的問題

1、理論的模索 2、地域研究ならびに隣接領域の動向

III ジャンル別動向

1、多岐のジャンルにわたるもの 2、散文ジャンル 3、謠・謎謎 4、歌謡ジャンル 5、民衆劇 6、子供のフォークロア 7、労働のフォークロア 8、フォークロアの言語学的研究 9、文学とフォークロア 10、民俗(族)学研究史 11、方法論・書誌・教科書

IV 新たな視点から

1、儀礼・神話研究 2、都市の民族学 3、トータルな農民生活誌

V 民衆文化史像の再構築にむけて

はじめに

すでに筆者は拙稿〔559〕において、最近の、より具体的には一九六〇年代後半以降のソ連邦におけるロシア・フォークロアの研究動向にきわめて注目すべき点が多いことを指摘した。こうした傾向はここ数年にあっても確実に発展しつつおあり、価値ある成果が多数発表されている。しかもこの現象は、たんに民俗学・民族学の枠内における研究成果の出版や報告といった学域内部での状況だけではおそらく説明できぬものであろう。諸関連分野、例えば歴史学、言語学、地理学、中世文学研究、演劇史研究、心理学などの動向を視野にいれることが、その説明にとって不可欠であろう。そしてさらには、これら関連分野も含めた最近にいたるロシア民俗・民衆文化研究の展開を支えるものとして、伝統的な民俗文化、あるいは「ロシア的なもの」「ナシヨナルなもの」「フォークロア的なもの」に対する強固な関心の顕在化（ただしこれが欧米研究者がしばしば指摘する「伝統への回帰」¹）と明確に異なることは強調しておく必要がある）をその意味とともに視野に収めておくべきであると思われる。

民俗文化に対する関心の高まりの例としては、民衆版画（ルボーク）、民家、衣裳や装飾、民芸品や玩具といった対象が多くの注目を集めていることをあげることができる。そしてさらには中世ロシア文学者И・С・リハチョーフのエッセー集『ロシア的なものについての覚書』（一九八二年）〔233〕、ロシア北部ヴォーログダ在住の作家・B・И・ペローフの作品『調和』（一九八二年）〔57〕といった仕事をあげることができよう。このうち後者について若干のコメントを加えるならば、これはヨーロッパ・ロシア北部地方（セーヴェル）の農民生活の全体像をルポルタージュ

(ロシア語で言う「オーチェルク」)風に再構成したものである。ペローフは、ロシア農民の過去・現在の生活に対しその根幹となる労働、道徳、記憶と伝統といった側面からのアプローチを試みる。より具体的には、四季、職人、女性の労働、家内工業、村の構造、通過・歳時儀礼、家屋・屋敷、衣裳、遊戯、口承文芸などを手がかりとして彼は農民生活の全体像と彼らの世界観を鮮明に描き出しているのである。

われわれは、民族(俗)学的には多少なりとも不満の残るその叙述の中に、ロシア革命以前からの伝統的なロシア民衆の生活と民俗文化がある意味での「変形」と「再創造」というプロセスを経験しつつも、現在もなおはっきりと継承されていることを認識する。しかもそれはばかりでなく、ここでは伝統的農民世界がたんに過去憧憬や伝統回帰として描かれているのではなく、現在の民衆文化のあり様とあるべき様(ペローフの言う「民衆の美学」)として描出されていることに大きな驚きを感じざるをえないのである。

本稿のねらいは、こうしたロシア民衆文化への広範な関心を底流に置いた最近のソ連におけるロシア民俗学の活発なる動きを紹介することにある。紹介にはいる前に、その前提となる条件をいくつか記しておくならば、まず第一に、すでに筆者は一九七六、七年時点までの段階における動向を「ソ連民俗学の現在」(一九七八年)〔559〕として発表している。本稿ではそれ以後の一九七七、八年から一九八三年ないし一九八四年前半期までを対象とする。ただし関連する範囲ではそれ以前の時期の仕事にも言及することとした。

第二に、本稿で使用される「フォークロア」ならびに「民俗学」というタームは、ソ連において主流である口承文芸のみを指すという考え方とは異なっており、可能な限り広く民俗文化に関わるものである。「フォークロア」というタームの問題は、ひとつは関連分野との関わりの問題として(特に民俗学と民族学)、またターム自体の意味内容の問題として論じられるべきであろう(一般に「民俗学・口承文芸学」を意味するものとしては、最も一般的な「民衆の

詩的創造」のほか、最近再び使われるようになった「民衆の詩的口承創造」がある。また「民衆認識」といったタームの利用なども考慮すべきであろう⁽³⁾。

第三に、本稿で対象とする地域は主としてヨーロッパ・ロシア地域であるが、それ以外にもソ連邦内の各地、例えばシベリアやバルトなどに住むロシア民族のフォークロアも対象とすることは当然である。

最後に、筆者は一九八一年一〇月より一〇ヶ月間にわたりモスクワ、レニングラードにおいて資料調査ならびに研究者との情報交換を行う機会を得た（モスクワのソ連邦科学アカデミー付属ミクルーホリマクラーイ名称民族学研究所内のフォークロア・グループで五ヶ月間、レニングラードでは同研究所支部の東スラヴ部門、ならびにソ連邦科学アカデミー付属ロシア文学研究所（プーシキン館）のロシア民衆詩創造部門に五ヶ月間、それぞれにあって研究員として勤務した）。したがって本稿を著わすにあたって、その折の調査により前稿での不明の点ないし不充分的点を補ない、正確を期すこととした。

I 主要な研究機関ならびに活動

ソ連邦内でロシア・フォークロアに関する研究を行う主要な機関は以下のとおりである。なお（ ）内は機関の所在地、一九八二年半ばの時点での各部門代表者、そして同時点でのおおよその研究員の数である。

ソ連邦科学アカデミーに付属するものとして、

(一) H・H・ミクルーホリマクラーイ名称民族学研究所

(a) フォークロア・グループ（モスクワ、B・K・ソコロヴァを主任として合計七名の研究員⁽⁴⁾）

- (b) 東スラヴ部門（モスクワ、(c) の K・B・チストーフを東スラヴ部門全体の主任とするが、モスクワで M・Γ・ラビノーヴィチが代行、一四名前後）
 - (c) レニングラード支部東スラヴ部門（チストーフ、一名前後）
 - (d) このほかモスクワ、レニングラードとも、民族学理論、一般民族学、社会調査などの部門にロシア民俗（族）学を対象とする研究者が分散して所属している。
 - (二) ロシア文学研究所（プーシキン館）のロシア民衆詩創造部門（レニングラード、A・A・ゴレーロフを主任として一三名、このほかに B・B・コルグザローフを主任とする録音部がある）
 - (三) スラヴ学・バルカン学研究所（モスクワ、レニングラード支部、フォークロア部門は M・M・シエプトゥノーフ、スラヴ言語部門は H・H・トルストイ、構造タイボロジ部門は B・B・イヴァノフがそれぞれトップ）
 - (四) M・ゴーリキイ名称世界文学研究所内のフォークロア部門（モスクワ）
 - (五) 科学アカデミー学術学議フォークロア部門（モスクワ、B・M・ガツァク）
 - (六) シベリア支部の歴史・文献学・哲学研究所（ノヴォシビルスク）、さらに同支部ブリヤート分局のブリヤート社会科学研究所（ウラーンロウデー、Л・E・エリアソフ）
 - ソ連邦科学アカデミーには所属していないが、
 - (七) 国立演劇・音楽・映画研究所内のフォークロア部門（レニングラード、B・A・ラービン）
 - (八) ソ連邦諸民族民族学博物館（レニングラード、ロシア部門は H・H・シャングナー）
- 大学としては、
- (九) モスクワ大学内のロシア民衆詩創造講座（B・П・アニーキン）

レニングラード大学にはフォークロアの講座がないが、И・М・コレスニーツカヤが研究活動の中心となっている。また、モスクワ大学、レニングラード大学とも言語学・民族学部門が特に近年目ざましい成果を発表している。このほか、フォークロアの講座はトビリシ、ダゲスタインの大学に、文学とフォークロアという形の講座がタルトゥー大学に存在する。さらに注目すべきものとして、С・Г・ラズーチンを中心としたヴォローネシ大学、Т・М・アキーモヴァを中心とするサラートフ大学、И・Г・バーラグのバシキール大学、В・Н・モローヒンの指導するゴリーキイ大学、ほかにウラル(В・П・クルグリヤシヨヴァ)、ペトロザヴォーツクの大学ならびにノヴォシビルスク、オームスク、モスクワその他の教育大学でもフォークロア資料収集と研究が行われている〔105〕。

このほかモスクワ、レニングラードにある音楽院も独自に資料収集、研究活動を行っている。

以上の諸研究機関が発行している定期刊行物・雑誌、また最近の注目すべき活動とその成果、論文集などについて述べておこう。

(一)は一九八三年に創立五〇周年を迎えたが、基本的な定期刊行物として『民族学研究所紀要、新シリーズ』(一九四七年発刊)〔472〕、雑誌は年六回発行の「ソビエト民族学」(一九二六年に「民族学」として創刊され、一九三一年より「ソビエト民族学」となる。⁶⁾現在の編集長はK・B・チストーフ)〔437〕、各年度のソ連国内だけでなく海外の調査活動を年刊として報ずる『民族学研究所フィールドワーク』(最新のものは一九八三年に刊行された一九七九年度分)〔333〕。またレニングラード支部はクンストカメラと呼ばれ、博物館として独自の活動を行っているが、この博物館の定期発行物は『人類学・民族学博物館論集』(一九〇〇年創刊)〔407〕。この論集の最近の注目すべきテーマは「人類学・民族学博物館の収集」(第三五巻、一九八〇年、この巻は一九七九年にこの博物館が創立百周年を迎えたことと記念に捧げられている)、「物質文化と神話学」(三七巻、一九八一年)、「ヨーロッパとソ連ヨーロッパ地域諸民

族の文化遺産」(三八卷、一九八二年)がある。また、上述の『民族学研究所紀要』の一部はシリーズ「ロシア民族学・民俗学・人類学の歴史概説」(一九五六年から刊)〔315〕にあてられ、現在まで第九冊(一九八二年)を数える。このシリーズの責任編集を行っているのは、モスクワの民族学研究所の最古参のひとりであるP・C・リーベツである。また、一九〇〇年から一九六二年までの当研究所刊行物、論文の文献目録〔70〕が公刊されている。さらにクンストカーメラのガイドブックは英語版を含め二種類が出版されている(一九七〇、七九年)〔549・529〕。

(二)は、一九三九年にそれまで民族学研究所内にあったフォークロア・コミッションが文学研究所へ移行して成立した。フォークロア部門の概史と主要な活動についてはB・H・バスカーコフ(一九八〇年)〔49〕によって知ることができる。また、この部門がほぼ年一回の形で刊行しているのは『ロシア・フォークロア——資料と研究』(一九五六年に第一巻)〔388〕、最近の各巻テーマは以下のとおりである。第一七巻「ロシア・フォークロア集成の諸問題」(一九七七年)、一八巻「スラヴ文学とフォークロア」(一九七八年)、一九巻「ロシア・フォークロア理論の諸問題」(一九七九年)、二〇巻「フォークロアと歴史的現実」(一九八一年)、二一卷「ロシア・フォークロアのポエチカ」(一九八一年)、一九八四年に刊行予定の二二巻は「フィールド・ワーク」をテーマとする。博士候補資格ないし博士論文の審査結果、民俗調査活動については『プーシキン館——論文・資料・書誌』(一九八二年)〔358〕に詳しい。一九八一年に五〇周年を迎えた録音部の活動も無視できない。また、同研究所の中世ロシア文学部門発行の『紀要』(一九三四年創刊、一九八三年に第三七巻)〔473〕、年四回刊行の「ロシア文学」誌(一九五八年創刊)〔369〕にもロシア・フォークロアに関連した文献を見出すことができる。

(三)は一九四七年に発足した新しい研究所で、機関誌は『ソビエトのスラヴ学』(一九六五年創刊、年六回)〔439〕である。一九六二年以降現在まで継続して精力的に行われている活動としてポレーシエ地域に対する言語学・民族学調

査がある。その成果としてこれまで公刊されているものは、『ボレーシエ』（一九六八年）〔335〕、論文集として『スラヴ・バルカンのフォークロア』シリーズ（一九七二、七八、八一年）〔425・426・427〕、また一九八三年刊行の『ボレーシエ民族・言語学論集』（334）がある。特に最後のものは、一九七四年から八一年までのフィールド調査の総括として多くの重要な論文を収めている。ボレーシエ地域を対象とした調査活動の全貌と、主要な成果（博士候補資格ならびに博士論文も含めた）については、そこに収録されたA・B・グーラの報告〔127〕によって詳しく知ることができ。なお、研究所全体の概観、一九七七年までの活動と出版物についての紹介が『スラヴ学・バルト学研究所、一九四七—一九七七年』（一九七七年）〔176〕で行われている。

(四)の主たる研究テーマはソ連邦諸民族の叙事詩・口承文承のテキスト刊行と比較研究であるが、継続する論文集としては『フォークロア——叙事詩の出版』『フォークロア——詩的体系』（ともに一九七七年）〔486・487〕、『ソ連邦諸民族フォークロアのタイポロジーと相互関連』（一九八〇年）〔461〕、『フォークロア——ポエチカと伝統』（一九八二年）〔488〕がある。

(五)は独自の刊行物を持たぬが、『ソ連邦科学アカデミー通報、文学と言語のシリーズ』（一九四〇年創刊）〔175〕にフォークロアに関連した論文が掲載されることがある。

(六)の活動として目につくのは、「古文献学」と「歴史資料学」を中心テーマとするシリーズ形式の論集を相次いで発表していることである。最近の論文集のテーマは次のとおりである。『シベリアの歴史資料学と古文献学』（一九七七年）〔178・415〕、『シベリアの古文献学と歴史資料学』（一九七九年）〔413〕、『中世ロシア手稿本とシベリアにおけるその存在』（一九八二年）〔146〕、『封建時代の文化と階級闘争に関する資料』（一九八二年）〔177〕、『ロシア東部一六一—一九世紀の手稿伝統』（一九八三年）〔368〕である。またブリヤート分局から発行されている論文集は『現代シ

ペリアのロシア・フォークロア』(一九七九年)〔40〕、ほかに『シベリアのロシア・フォークロア』(一九七四、八一一年)〔394・395〕。

(七)は定期刊行物を持たないが、最近の動向を反映するのは論文集『現代民俗学の焦眉の問題』(一九八〇年)〔11〕であり、そこには一九七二―七九年の時期におけるフォークロア部門の活動報告も収録されている。また同部門では、一九七二年からП・Г・ボガトウイリョーフを記念した研究報告会が開催されているが、第五回(一九七六年)以降のテーマは「フォークロアの文体論」(七六年)、第六回「フォークロアにおける創造のプロセス」(七七年)、第七回「スラヴ・フォークロアの諸問題」(七八年)、第八回「民俗学的方法論的問題」(七九年)である。

(八)の編集になる論文集は、一九六六年に第一冊が刊行されたシリーズ「言語芸術としてのフォークロア」〔492〕であり、第四冊は「ロシア民衆創造における形容辞」(一九八〇年)、第五冊は「ロシア民衆詩創造の芸術的手法、シンボル、メタフォア、パラレリズム」(一九八一年)といった特集テーマに捧げられている。編集責任者は一九八〇年にH・И・クラフツォーフが死去したあと、アニーキン教授である。紀要にあたる「モスクワ大学通報、文献学シリーズ」〔91〕にも研究成果が掲載される。また、中部・北部ロシア地域を中心とした民俗調査が学生を指導する形で毎年実施されている。このフォークロア講座が行ってきた民俗調査活動の歴史は、H・И・サーヴシキナ、A・B・クラীগナの論文(一九七七年)〔404〕で報告されている。

このほかに注目すべき論文集としては、バシキール大学を中心として発行されている『ロシア共和国諸民族のフォークロア』〔493〕があるが、これは一九七四年の第一冊より現在まで第九冊(一九八二年)を数えている。ここにはロシア共和国内の各地の研究者による論文が掲載され、ロシア共和国内の他民族の中のロシア・フォークロア、他民族のフォークロアとの関連などがそれら論文の主要なテーマとなっている。ヴォローネシでは、『文学とフォークロ

アのポエチカの諸問題』(一九七六、七七年)〔99〕と『文学とフォークロアのポエチカ』(一九七九、八〇年)〔34〕、ウラルでは『ウラルのフォークロア』(一九七六、七八年)〔496〕と『ウラルのフォークロアと文学』(一九七一年以降七七年に第四冊)〔489〕が刊行されている。また、最近特に目ざましい活動を行っているシベリア各地の教育大学におけるロシア・フォークロア採集と研究に関しては、B・B・ミトロファーノヴァの丹念な文献調査にもとづくレポート(一九八〇年)〔272〕が詳しく教えてくれる。

II 全体的動向と理論的問題

1、理論的模索

ソビエトにおけるロシア民俗学が全体として、現在どこに関心を置き、いかなる理論的方向を内包しているか、民俗学の全体的動向を概観しておこう。

一九七二年にグルジアのトビリシにおいて「フォークロア理論の諸問題」をテーマとする第一回全ソ連邦会議が開催されたことは前稿に記したとおりである。これがその後継続された様子はなく、またこの会議に匹敵するような大規模な会議も開催されていないのが現状である。このことは、特にここ数年来、ソ連における民俗学研究がきわめて多様化し、混沌とした状態にあることと決して無縁ではないであろう。かつて一九二〇、三〇年代におけるユーライ・ソコロフ、一九二〇―五〇年代にM・K・アザドーフスキイといったソビエト民俗学の第一世代の研究者が担わない、そして彼らに続いてH・И・クラフツォーフ、П・Γ・ボガトウイリョーフ、B・Я・プロップといった第二世代の研究者が果たした「中心的」役割を担う者は、今のところ明確な形では登場していない。言わば「中心の不

在」「中心の拡散化」といった現象が現出していると言えよう。かつて筆者は、一九七〇年にプロップが死去、翌七一年にボガトウイリョーフ、A・M・アスターホヴァが死亡したことをあげて、一九七〇年代にソ連のロシア民俗学研究が第二世代研究者の到達点を踏まえつつ、大きな転換期にはいつていることを指摘したが、この指摘は現在にあってもあてはまると言ってもよい。個別研究がきわめて活発に行われ、多数の成果が生まれている一方で、かつてプロップやボガトウイリョーフが行った個別研究の統合化・理論化の方向は、現在までのところ、明瞭なる形では生まれていないのである。

もっともそうした統合化・理論化の試みがまったくなされていないわけではない。K・B・チストーフの提唱するフォークロア研究に対するコミュニケーション理論の適用とインバリアント論〔515・517・519・522〕、B・H・プチーロフによる比較・歴史タイポロジー研究〔354〕、B・E・グーセフによって唱えられた「複合的研究」〔132〕をはじめとしていくつかの試みがフォークロアの一般理論と方法をめぐって行われつつある。このチストーフ、プチーロフ、グーセフ以外にも、B・K・ソコロヴァによって推進されつつある「儀礼フォークロア」研究、H・И・トルストリーの民族・言語学的研究、さらに若手研究者を中心として急速に展開しつつある記号論的民俗学研究などが成果をあげている。そしてまた、B・M・ガツァクのソ連邦諸民族間の交流・影響に重点を置いた口承文芸学〔106〕、B・П・アニーキンの「伝統的」ソ連口承文芸研究〔21〕、C・Г・ラズーチンのフォークロアの詩学論的研究〔23〕、さらにはクラフツォーフやアニーキンと同じく新「歴史主義」の立場に立って、先のプチーロフに代表される「非リアリズム」を批判するИ・И・エメリヤノフ〔149〕なども見逃がすわけにはいかない。そしてまた、後述するように、民俗(族)学と隣接する諸領域との境界上で行われつつある多くの模索もまた、ソ連民俗(族)学の全体的方向と理論的関心を考える上で逸することができないものであろう。しかしながらこうした多くの試みはいずれも「主流」と

はなりえず、全体としてはきわめて混沌とした状況にあると言わざるをえない。

しかしながら、こうした一種の混乱状態それ自体がソ連のロシア民俗学の重層化・複眼化ならびに柔軟化を示すものであり、それはある意味できわめて好ましい現象として考えることもできる。民俗学の理論と一般化をめぐる豊富な試みと活発な討論は、自由な知的雰囲気存在の証明であり、それらの試み相互の葛藤の中から多くのすぐれた成果が生まれるはずだからである。

先に筆者は、民俗学理論の探求を目的とした全ソ規模での会議が最近にあっては開催されていないと記した。しかしながら、理論面を別にすればいくつかの大規模な会議が開催され、それによって現代のソ連民俗学研究の関心の所在の一端を知ることができることも事実である。そのような例としては、一九八二年九月に開かれた音楽学者・民俗学者第一回全ソ会議があり、さらに一九七九年一〇月にレニングラードで開かれた「ロシア・フォークロアの収集と文書保管との協力に関する全ソ会議」があげられよう。特に後者はこうしたテーマの会議としては最初の試みとして注目され、九〇以上の都市の研究者が集まり、合計一五〇の報告が行われた。セクションとしては「現代ロシア・フォークロアのジャンル構成」「地域別フォークロア研究」「他言語集団内のロシア・フォークロア」「大学におけるフォークロア実習」「フォークロアの文書保管」の五つが設けられた。⁽⁶⁾

この会議の開催によっても知ることのできる民俗(族)学研究のための資料保管・整理に対する大きな関心は民族学の分野でもはっきりと認められ、特に博物館の運営・発展と拡大をめぐる議論として具体化されている。『民族学と博物館』(一九七八年)〔448〕の著者でクンストカーメラに働くT・B・スタニューロヴィチはいわゆる博物館学の一環としての民族学博物館に関する問題に長年携わってきた第一人者だが、彼女とK・B・チストーフ共著の論文「民族学と民族学博物館発展の焦眉の問題」(一九八一年)〔449〕はまさしく現段階における問題の所在を明らかにし

ている。ソ連邦で最大の規模を持つクンストカーメラの資料コレクションとその整理・カタログ化に関しては、『博物館論集』三八卷（一九八二年）〔185〕に詳しい。さらに、ソ連邦諸民族民族学博物館のコレクションについては、これまでのところウクライナ部門のみのカタログが刊行されており（一九八三年）〔186〕、同博物館の展示については、И・И・バラノヴァの論文（一九八一年）〔48〕がある。また、トームスク大学付属シベリア考古学・民族学博物館に収蔵された民族学関係の資料コレクションについてのカタログ全二冊が公刊された（一九七九、八〇年）〔187〕。しかし資料整理の分野において何と言っても特筆せねばならないのは、ロシア文学研究所のフォークロア部門によって提唱された「ロシア・フォークロア集成」の出版事業の計画であろう。同部門刊行の『ロシア・フォークロア』第一七卷（一九七七年）は全巻をこの「集成」の問題にあてており、集成刊行の際のジャンル分類、各ジャンル内の分類、テキストの選択・配置その他多くの問題を扱っている。計画によれば、その内容は以下にあげる一八のシリーズから構成される。

(一) 歳時儀礼歌謡 (二) 家族儀礼歌謡 (出産儀礼、子守歌、婚礼、泣き歌) (三) 呪術歌謡 (呪文) (四) 謎謎 (五) 昔話 (累積話、動物昔話、魔法昔話、伝奇昔話、世態昔話、プイリーナの昔話風改作、パロディ話) (六) 昔話以外の散文 (宗教伝説、妖怪譚、歴史伝説、世間話、アネクドット) (七) プイリーナ (八) 巡礼歌 (外典にもとづくもの、その他) (九) バラード (一〇) 歴史歌謡 (一一) 儀礼以外の抒情歌謡 (一二) チャストウシカ (一三) アフォリズム的フォークロア (一四) 諺、成句、地口 (一五) 子兆 (一六) 民衆劇 (一七) 子供のフォークロア (一八) 楽器によるフォークロア (一九) 民俗舞踊

(一)と(二)といった儀礼歌謡が重視されていること、(三)(四)(六)が大きなセクションを形成していること、(一〇)(一六)が目新しいことなど、全体の分類の点でもいくつかの新たな側面がうかがえる。しかも分量は全体で百巻を越えるもので、ここにはこれまで刊行された資料はもちろん、未公刊のテキストをも収録する予定という。もっともこの「集成」刊行の計画

はこれまでも一九三〇年代、五〇年代の二回立てられたことがあり、今回は三回目にあたる。今回の計画が生まれた背景にはこうした二度の計画とその失敗があると言えるが、それと同時にロシア以外のソ連邦内諸民族のフォークロア集成の事業が各共和国で行われていることも忘れてはなるまい。白ロシアに関しては一九六七年以降全三〇巻にわたる白ロシア・フォークロア集成が刊行中であり、ウクライナでは六二巻の計画で一九六九年以後テキスト刊行が行われている。このほか、グルジア、タジク、アルメニア（昔話のみ、全一〇巻）、モルダビア、ウズベク（全一〇巻以上）で同種の集成が刊行を開始し、ラトビアでも刊行の準備中であるという〔114〕。

ロシア・フォークロア「集成」が文字通り世紀を越えた大事業となることは言うまでもないであろう。刊行はブリーナのシリーズ（全二五巻、本文二〇、付録二、索引三）から始まる予定で、出版に向けての協議会が一九七八年一二月に開催された。現在、第一巻のテキスト選択が終了した段階である。

ところで先にあげたチストーフ、ブチーロフその他研究者の仕事に見られる民俗学理論の模索の動きはまた、ロシア・ソビエト民俗（族）学の古典的著作の復刊、民俗（族）学者の仕事の再評価の中にも明確に示されている。革命前の民俗学者、例えばA・H・アフナーシエフ、A・A・ポチエブニャーその他の著作が復刊〔34・343〕されたが、このことも含め革命前の民俗学に対する最近の研究動向については後述する。一方、ソビエト期にはいつてからの研究者とその仕事としては、まずアザドーフスキイに対する関心があげられよう。

M・K・アザドーフスキイ（一八八八—一九五四年）は今世紀初頭から精力的な収集・研究を行い、特に昔話研究、文学とフォークロアの関連、ロシア民俗学史、またシベリア民俗（族）学に関するすぐれた業績を多数残した。しかも、一九二〇、三〇年代にロシア文学研究所のフォークロア部門ならびにクンストカーメラのロシア・スラヴ部門の創設と発展に絶大なる貢献をし、加えて多数の研究者の教育・育成にも大きな影響を持った研究者である。一九七八

年一二月にはアザドーフスキイ生誕九〇周年記念の会議がソ連各地で開催されたが、この九〇周年に合わせてこれまでに未公開の資料が『M・アザドーフスキイ、論文と書簡』（一九七八年）〔3〕と題されて出版された。ここにはK・クローンの注文に依じて「FFC」のために書かれ、ドイツ語で発表された「シベリアの語り手H・O・ヴィノクーロヴァ」といったすぐれた語り手論のほか、シベリア研究者にあてた多くの書簡が収録されている。本書後書きによれば、レーニン図書館にはアザドーフスキイに対する多数の人々の手紙三五〇〇通が、またその他の場所に彼の手紙七七〇通が保管されており、これらはきわめて貴重な時代資料である。最近そのごく一部が発表されているが〔173・174〕、本格的な調査は今後の課題であり、それはアザドーフスキイ自身の活動だけでなく一九二〇年代から五〇年代にかけての知識人の精神史を考える上で不可欠な作業となるはずである。また本書の最後を締めくくっているJ・B・アザドーフスカヤの論文〔1〕は、アザドーフスキイの研究活動に対応する形で「フォークロアと民族学」「文芸学」「デカブリスト」「書誌」に分けて、ソビエト民俗学初期の巨人の学問的関心の範囲を忠実に跡づけ、彼の仕事の意義と研究史上の位置を適切に記した力作である。現在第一線で活躍する研究者の大部分が彼の教えを受けたと言われており、その意味で彼の仕事の見直しが行なわれるのは当然であるが、同時にまたこのことは一九二〇、三〇年代のソ連のロシア民俗（族）学研究の意味をとらえ直そうとする動きとも通じるものである。このことは次にあげるゼレーニンについてもあてはまることである。

アザドーフスキイとほぼ同期時に活躍をしたJ・K・ゼレーニン（一八七八—一九五四年）は民俗（族）学のみならず方言学にも多くの仕事を残したが、彼の生誕一〇〇年を記念して刊行された論文集『スラヴ民族学の諸問題』（一九七九年）〔347〕は、これまで意外なほどに軽視されてきたゼレーニンの仕事の全面的再評価と復権を意味するものである。論文集は、J・M・サブローヴァ「民族学者ゼレーニン」、H・B・ノヴィコフ「民俗学者ゼレーニン」、トル

ストーイ夫妻「方言学者ゼレーニン」などの第一部、ゼレーニンの仕事によせて若手研究者を中心とする一四人の研究論文からなる第二部、そしてゼレーニンの著作目録から構成されており、「一九世紀ロシア学の最良の伝統と現代の学問との結びつきの生きた体现者」(チストーフ)であったゼレーニンの仕事が現代にあっても価値を失っていないことを明確に示すものとなっている。ゼレーニンの代表作として名高い『ロシア(東スラヴ)民族学』(一九二七年、ドイツ語で出版)〔551〕も近くそのロシア語訳が出版される予定である。また同じくゼレーニンの他の著作も「民族学文庫」シリーズの一冊として刊行されるという。

こうしたソビエト初期民俗(族)学者の仕事の見直しという動きと並行して、例えばプロップ、ボガトウイリョーフ、またミクルーホリマクラーイらを記念し、彼らの仕事の現代的意義を論ずることを主な目的とした研究会が定期的に行われていることも忘れてはならない。プロップ記念会議は一九八一年二月、一九八二年五月に、ボガトウイリョーフについてはすでに記したとおり一九七九年一月に第八回が、ミクルーホリマクラーイについては一九八四年四月に第六回の研究会が開かれ、それぞれにおいて多くの研究報告が行なわれてその一部は論文集として公刊されている(例えば、プロップ記念研究会の報告集は〔491〕)。

また、先に述べた第二世代に属する研究者の中で、H・И・クラフツォーフ(一九〇六年生まれ)とЭ・В・ポメラーンツェヴァ(一八九九年生まれ)が一九八〇年に、B・Γ・バザーノフ(一九一一年生まれ)が一九八一年に死去した。

ところで、先述したゼレーニンの著作の復刊を予定している「民族学文庫」シリーズは、ロシア・ソビエトだけでなく、欧米の民族学の成果の翻訳・出版を目的として企画された。こうした外国の研究の翻訳紹介も近年際立って見られるようになったが、こうした現象も民俗(族)学理論の摸索とそれをめぐる活気を反映するものであろう。同シ

リーズはL・G・モーガンの『イロコワ族の連盟』のロシア語訳を第一冊として開始し、一九八三年にはC・レヴィ
 リストロース『構造人類学』のロシア語訳〔226〕が刊行された。後者には付録としてB・B・イヴァーノフ、H・
 A・ブチーノフ、E・M・メレチンスキイの三人のそれぞれによる論文が添えられている。今後このシリーズでは
 シベリア民族学者B・B・ラドロフ、Л・Я・シュテールンベルグの著作が刊行される予定である。

また、一九六九年以降多くの注目すべき仕事を刊行してきた「東方のフォークロア・神話研究」のシリーズでも、
 J・デュメジル『オセツト叙事詩と神話』のロシア語訳（一九七六年）〔148〕、V・ターナー『象徴と儀礼』のロシア
 語訳（一九八三年）〔478〕のほか、同じくデュメジル『インド・ヨーロッパ人の上級神格』や論文集『フォークロア
 記号論に関する国外の研究』、M・ヘルハート『語りの芸術（「千夜一夜」の文学的研究）』などが近刊予定となっ
 ている。さらにはJ・J・フレイザー『金枝篇』のロシア語訳（一九八〇年）〔499〕も、一九二八年にきわめて不完全
 な形のロシア語訳が出版されて以来、半世紀以上にもわたる空白のあとでようやく世に出ることとなったし、同じく
 フレイザーの『旧約聖書の中のフォークロア』も近く出版されることになっている。

このような欧米の研究動向の積極的紹介、ならびに古典的著作の翻訳・再版はここ数年で特に目立つ現象であると
 言ってよく、今後この傾向はますます強まるものと思われる。ひと昔以前のソビエトの民俗（族）学が欧米の同時代
 の研究にほとんど注目を向けず、いわば孤立的・硬直的に研究を行ってきた状況は、ごくわずかな例外を除いて今や
 まったく姿を変えてしまった。そしてこのことは、ヨーロッパをはじめとする諸外国の研究者との学術交流の活発化
 によって示される。例えば、一九八二年一〇月にモスクワ、スズダリで開催されたヨーロッパ民族学・民俗学国際協
 会第二回大会がそれであり、または、ソ連、東欧の民族学研究者によって企画されている『スラヴ民族学』全三巻の
 刊行などもそうした動きを反映するものとして注目したい。

2、地域研究ならびに隣接領域の動向

これまで述べてきたロシア民俗(族)学研究の理論的・方法論的動向は、以下の三点としてまとめることができる。すなわち第一に、フォークロア理論・理論的模索の多様化、第二に「ロシア・フォークロア集成」に代表される資料整理に対する関心の高まり、そして第三に、ロシア・ソビエト民俗(族)学に関する古典的著作の復刊・再評価と外国の研究の積極的紹介の三点である。

このような動きと対応する形で、一方では地域別研究・地域別民族誌の作成という点で、また他方で、民俗(族)学とそれに隣接する諸領域との間の競合という点で、多くの成果がもたらされていることは近年の目立った現象である。

フォークロア資料の地域別収集活動とその成果としての資料集公刊については、以下の章の各ジャンルに関する項で具体的に紹介するが、質・量の点で特に近年注目すべき成果をもたらししているいくつかの地域が存在する。

まず第一は、ロシア・フォークロアの故郷とも呼ぶべきヨーロッパ・ロシア北部(セーヴェル)である。ここでは個々のジャンルの収集・研究が相変らず活発に行われており、それらの最近の動向に関してはA・Π・ラズーモヴァの論文(一九七八年)〔363〕に詳しく述べられている。加えて、北部の白海沿岸ポモリーエ地域の民族誌作成に携わってきたT・A・ベルンシュタムが前著『ポモルイ』(一九七八年)〔62〕に続いて、『一九一〇世紀初頭におけるポモリーエのロシア民衆文化』(一九八三年)〔66〕を発表した。前著では、ポモリーエ地域へのロシア人入植史と北部の民族誌的歴史、漁猟を中心とした産業システムが述べられたが、今回の著書ではそれを受け継いで、ポモリーエの物質文化、社会、家族生活、歳時暦・信仰・フォークロアの三つが扱われている。使用された資料も彼女自身

のフィールド・ノートやアルヒーフなどを含めて広範であり、加えて後述するように彼女自身の儀礼研究における新たな視点を内包している点でもおおいに注目されよう。彼女の二者は全体としてひとつの、しかもきわめてすぐれたポモーリエの民族誌であり、北部地域全体の民俗(族)学研究の歴史にとって新しい段階を切り拓くものとなることは疑いえない。

第二はシベリア地域であり、これは以下の各ジャンル(昔話、昔話以外の散文、儀礼歌、儀礼研究など)の項で記すように、多数の資料集ならびに研究をもたらしつつある地域としてきわめて注目すべきであろう。さらにノヴォシビルスクを中心とした「シベリア学派」の歴史家たちの仕事も民俗学研究に多くの影響を与えている。こうした中で、シベリアのロシア人に関する民族誌として、B・A・アレクサンドロフ編集の三冊の論文集が刊行されている。それは、『シベリアのロシア住民の物質文化研究の諸問題』(一九七四年)〔345〕、『一七一—二〇世紀初頭の西シベリア農民の産業と習俗』(一九七九年)〔501〕、『一七一—一九世紀半ばシベリアのロシア農民の民族誌』(一九八一年)〔534〕であり、シベリアの地域研究・ロシア民族誌の最良の成果と言えよう。⁽¹⁰⁾

ウクライナ、白ロシア、ロシアの接点に広がるボレーシエ地域は、スラヴ学・バルカン学研究所が集中的に調査対象としている地域であり、最新の調査成果が『ボレーシエ民族言語学論集』(一九八三年)〔334〕として公刊されたこととすでに紹介したとおりである。

このほか、バルト地域におけるロシア・フォークロアの研究も一九七〇年代にはいって活発化し、いくつかの基本的な資料集〔390・391・392・494〕が公刊されているし、そのような状況の中でA・Φ・ペロウソフが論文「バルト沿岸ロシア古老の民衆文学における中世ロシアの文学的伝統」(一九八〇年)〔59〕によって博士候補資格を取得している。ペロウソフはまた、同地域内古儀式派のフォークロアに関しても貴重な報告(一九七五年)〔58〕を行っている

る。

さらにまた、カザフ地域ではM・M・バギズバーエヴァが精力的な収集と研究を展開しており、その成果を二冊にまとめて発表している(一九七七、七九年)〔495〕。この仕事のアウトラインは彼女自身の論文「カザフスタンにおけるロシア・フォークローア」(一九八二年)〔36〕によって知ることができる。

以上見たような各地域の研究が活発化していることの背景には、一九七一年以降不定期に継続されているシンポジウム「言語学と民族学における地域研究」の開催を指摘することができるだろう。このシンポジウムの成果はこれまでに『言語学と民族学におけるカルトグラフィの諸問題』(一九七四年)〔346〕、『言語学と民族学における地域研究』(一九七七、八三年)〔27・28〕として公刊されているが、これは、スラヴ言語地図の作成と関連した地域研究自体の重要性だけではなく、民族学研究における方法としてのカルトグラフィの重要性が認識されつつあることを証明するものである。⁽¹¹⁾ その意味で、これら論文集に収められたものではないが、Γ・H・オーゼロヴァ他「二〇世紀初頭のロシア民族のグループのカルトグラフィについて」(一九七九年)〔303〕は今世紀初頭のロシア民族の状況と分布地図とによって記述した貴重な成果である。また、上記論文の中に収められた民族学関係の注目すべき仕事については、以下のそれぞれのジャンル紹介の中でとりあげることとする。

このように見てくると各地域別の研究は、「言語学と民族学における地域研究」のシンポジウムに見られるような理論的基礎を与えられつつ、具体的な収集・調査とそれらの研究成果の点で近年ますます活発化していると言えよう。そしてこの動きはまた一方で、「郷土史学」への大きな関心(例えば、概説書としてB・H・アシュールコフ他『郷土史学』(一九八〇年)〔34〕、モスクワの郷土誌論集として『大時計』(一九八三年)〔221〕その他)とも結びつくものである。

民俗学とそれに隣接する諸領域との競合をめぐる問題に移ろう。具体的には、民族学、歴史学、地理学、言語学、心理学、文芸学、演劇学などと民俗学との接点についてである。

民俗学と民族学の関わりについては、K・B・チストーフの論文「フォークロアと民族学」(一九六八年)〔512〕以降、たがいにきわめて「開かれた」、相互に統合的な要素として考えられてきた。チストーフの提唱を受けた形で一九七〇年以降『フォークロアと民族学』をタイトルとした論文集が繰り返し刊行されてきたことは、そうした状況を踏まえてのことであろう。最近の成果としては、『フォークロアと民族学——フォークロアと古代観念・儀礼の結びつき』(一九七七年)〔490〕、『同——フォークロア題材と形象の民族学的源泉』(一九八四年)〔491〕、そして『ロシアの北部——民族学とフォークロアの諸問題』(一九八一年)〔387〕があげられよう。こうした論文集に共通して見られるのは、民俗学を口承文芸学として自己規制してしまうのではなく、民俗学と民族学とを相互に開かれた、補完的な関係としてとらえようとする視点であろう。そしてこのような視点は、それら論文集を責任編集しているB・H・プチーロフ、チストーフ、T・A・ベルンシュタムらによって強固なまでに主張されてきたものであると言える。さらには、こうした民俗学と民族学との関連のあり方は資料方法論のレベルでも認められており、M・M・グロムイコ(一九七七年)〔118〕はシベリア農民の社会的意識の研究において、この両分野の資料を等しく用いるべきであると述べているのである。

歴史学と民俗学との関わりについては、さまざまな形で具体化されているが、とりわけ重要なのはシリーズ『ロシア文化概説』〔316〕の出版とその影響である。このシリーズはA・B・アルツイーフスキイを代表編集者として、モスクワ大学、考古学・歴史学・民族学の各研究所の協力を得て一九六八年の第一冊以降これまで六冊が刊行されている。これは、一九五一年に出版された『中世文化史』全二巻が一〇—一三世紀を扱ったのを受けて、一三—一五世

紀、一六世紀、一七世紀の三つの時代各二冊ずつの計六冊の大部である。そして各時代が第一部物質文化、第二部精神文化という二部で構成されていることはこのシリーズ全体に民族学の多大な協力のあったことを物語っている。また、特に中世史研究にとって民族学がいかに有効な補助科学となるかを具体的な各ジャンル・事象別に研究史を跡づけたものとして『キエフ・ルーシに関するソビエト歴史資料学』に収録のA・B・ガドロの研究ノート(一九七九年)〔438〕がきわめて便利である。

また、歴史学的方法論的一分野である古文献学(アルヘオグラフィーヤ)は、特に近年、科学アカデミー内の古文献学コミッションによって目ざましい発展をとげている。そもそもこの領域は中世史学M・H・チホミーロフや中世文学史家B・H・マールイシエフらによって開拓されたものであるが、一九七六年にモスクワでフィールド・ワークをとこなう古文献学に関する第一回全ソ連邦会議が開催されたり、すでに述べた「シベリア学派」が多くのすぐれた成果をもたらしたところなどによって大きく成長していると言えよう。最近の成果としては後述する「シベリア学派」の仕事のほか、モスクワ大学が一九六六―八〇年に行った古文献フィールド調査にもとづいた論文集『ロシアの文字・口頭伝統と精神文化』(一九八二年)〔382〕が目立ったものである。これによって、古文献学が歴史学のたんなる一補助学ではなく、精神文化史研究のための複合的アプローチに不可欠な一分野であることがわかる。

地理学、言語学に関しては、先に述べたシンポジウム「言語学と民族学における地域研究」とその成果である論集を想起すればよい。また、最近の措辞法・パレミオロジー研究についてはB・M・モキエーニコの動向紹介(一九八三年)〔275〕が詳しく、さらに『パレミオロジー論集、諺・謎謎(構造、意味、テクスト)』(一九七八年)〔323〕、『パレミオロジー研究』(一九八四年)〔324〕が最先端の成果である。それらは諺や格言、謎謎といったフォークロア・テクストのみの分析に捧げられているが、今後その適用範囲を広げうると思われ。そしてこのことと関連して、記号

論的方法にもとづくテキスト分析が民俗(族)学研究に大きな影響を与えていることも見逃しえない。個別事例としては、後述するA・K・バイブリーンによる住居に関するモノグラフ(一九八三年)〔44〕があるが、より明確な例として一九八一年冬にモスクワで開催されたシンポジウム「テキストの構造」がある。そこで行われた七〇を越える報告のレジュメは『テキストの構造―八一』(一九八一年)〔45〕として公刊されており、一、テキストの言語学、二、神話・儀礼・シンボル、三、テキストの分析、A、フォークロア、B、文学、から構成されている。

「ソビエト民族学」誌は一九八三年を通じて、民族心理学をめぐる一大キャンペーンと討論を行った。そこには研究所長IO・B・ブロムレーイ自らが加わったほか、多数研究者の参加を得て、全体として心理学的研究の重要性を確認するものとなった。この議論にも加わり、欧米の心理学をはじめ、哲学・社会学・児童学に広く通じたところを示したH・C・コーンは後述する「子供の民族学」を提唱するが、彼は『私』の発見(一九七八年)〔198〕のほか、「民族学と性の問題」(一九八三年)〔200〕を発表して、これまでのソ連では軽視されてきた領域を扱おうとしている。このほか、E・A・ブジーロヴァ『ロシア学における社会心理学的問題』(一九八三年)〔82〕はタイトルのとおり、革命前の諸学問を現在の社会心理学の視点から整理したものだが、革命前ロシアの民族心理学の歴史と問題を知る上で有益である。また、芸術的体験としての見世物の受容を社会心理学的メカニズムでとらえようとしたHj・A・フレノフのモノグラフ(一九八一年)〔502〕がある。

演劇学・芸術学の分野では、まず論文集『演劇的空間』(一九七九年)〔458〕をあげなくてはならない。これは一九七八年に、モスクワのプーシキン美術館で開催された展示「一五―一七世紀フィレンツェの演劇的空間」に寄せて行われた研究報告会の成果である。全体で三〇の論文が収録され、対象となるのはヨーロッパ、ロシアはもちろん、日本の演劇までと多岐にわたる。ロシアの関連で注目すべき論文としては、IO・M・ロートマン「演劇の言語と絵画」、

Б・Б・ミハイロフ「一八世紀モスクワの広場と舞台」、M・A・アレクセーエヴァ「一八世紀ロシアの花火演劇」、H・И・サーヴシキナ「ロシア仮装劇における演劇空間の特質」、A・Φ・ネクリロヴァ「民衆の定期市の宣伝」、A・Γ・サコーヴィチ「一八一—一九世紀ロシアの壁かけ版画の演劇」など。

このほか、И・Φ・ペトロフスカヤの『地方ロシアの演劇と観客』（一九七九年）〔328〕は、一九世紀後半のロシアの田舎では演劇がいかなる形で行われ、それを見物人がいかに受けとめていたかを丹念な調査にもとづいて記述したものであり、地方住民の生活を知る上で欠かせぬ研究である。また、H・M・ゾールカヤの『世紀の変わりめで』（一九七六年）〔162〕は一九〇〇—一〇年代の映画を中心に大衆芸術の発生を跡づけている。さらには、Ю・A・ドミートリエフの『ロシアにおけるサーカス』（一九七七年）は彼の長年におよぶサーカス研究の集大成であり、ロシアにおけるサーカスの起源から始めて、一九世紀ロシア・サーカスの興行主や芸人、芸の内容などを詳述している。最後に、このサーカスだけでなく軽演劇や祝祭に関するA・B・ルナチャールスキイの論文（全集に未収録のものを含む）が一冊にまとめられて出版されたこと（一九八一年）〔238〕を付記しておこう。これら演劇学・芸術学における成果は後述の民衆演劇の分野に大きな影響を与えている。

III ジャンル別動向

1、多岐のジャンルにわたるもの

次にジャンル別動向を述べよう。

まず複数のジャンルにわたるテキストの公刊としては、シリーズ「ロシア・フォークロアの記念碑」の中で『ノ

ヴゴロド州の伝統的フォークロア』(一九七九年)〔41〕があり、これは一九六三—七六年にロシア文学研究所が行った収集の中から歌謡と泣き歌合計五〇〇のテキストを編集し、注釈とともに公刊したもの。同シリーズには『プーシキンゆかりの地の歌謡と昔話、ゴリキイ州のフォークロア第一冊』(一九七九年)〔326〕もある。これは主に一九七〇年代にゴリキイ州内におけるA・C・プーシキンゆかりの土地で収集された民謡と昔話をテキスト化したもので、かつて同種の試みとして、B・И・チエルヌイシヨーフが一九二〇年代に収集した昔話・伝説資料集(一九五〇年)〔42〕があるが、今回のものはその現代版であると言える。これらはともに、ロシア文学研究所のフォークロア部門による周知な収集と緻密なテキスト校訂の成果である。

このほか、各地方別にあげるならば、スモレンスク州ヴェリシスキイ地区とその周辺においてΓ・M・ナウイメンコが散文、早口言葉、謎謎を集めたもの(一九七七年)〔285〕。ほぼ三〇年以上にわたってレニングラード州のフォークロアを採集してきたB・C・パフチーンは民謡、昔話、チャストゥーシカの言わば三部作を出版しているが、それにもとづきながらも新たに集めたテキストを加えて編集されたアンソロジ『レニングラード州の昔話、歌謡、チャストゥーシカ、地口』(一九八二年)〔53〕がある。また、ヴォーログダ州ソクリスキイ地区のフォークロア集『ヴォーログダのフォークロア』(一九七五年)〔98〕、A・B・エルマーチェンコの『カルーガのフォークロア』(一九七九年)〔155〕、バルト海沿岸地域ではA・Φ・ペロウソフ他の編集による『バルト沿岸ロシア住民のフォークロア』(一九七六年)〔60〕があり、これは歌謡と昔話のテキスト三〇七を収めている。また変ったところでは、第二次世界大戦時のバルチザンのフォークロアとして歌謡、チャストゥーシカ、諺、伝説などを収録した、『民衆の怒りの言葉』(一九八一年)〔429〕がある。さらに、テキスト集ではないが、地域別のフォークロア全体を扱ったモノグラフとして、ペーンザ州についてのO・И・マルトウイネンコ〔250〕、バルト地域についてのT・C・マカーシナ〔240〕

がすぐれたものである。蛇足ながら、ロシア革命前の今世紀初頭に出版されたすぐれた資料集が復刊され（一九八一年）〔420〕、話題となった。原本は、一九一〇年代にソコロフ兄弟がロシア北部を調査した際の成果として一九一五年に出版された『ベルオーゼロ地方の昔話と歌謡』であり、正確な記述とテキスト校訂の点で評判の高い資料集である。この復刊はそれ自体価値あるものであったが、歌謡ないし序文として書かれたすぐれた民族誌の部分が除かれて昔話のみが発表されたことはいささか期待はずれで残念であった。

また、研究としてはA・H・クジミンのモノグラフ（一九八一年）〔218〕が、ブイリーナや歴史歌謡、兵士の歌、諺などの中に見られる戦士の英雄像を跡づけている。いわば「英雄的なるもの」とは何かをフォークロアの各ジャンルを通してとらえようとしており、この種の試みがあまりなかっただけに興味深い仕事である。

2、散文ジャンル

「散文ジャンル」というタームを用いることによって、昔話だけでなく伝説、実話など非昔話のジャンルも含めた全体を考察するようになったことは最近の新たな現象である。具体的には、一九七四年にミンスクで開かれた会議とその報告集〔348〕の出版を契機として、「散文ジャンル」という分類法それ自体への関心が高まってきた。一九七七年に第一版を刊行した『ロシア・フォークロアの散文ジャンル』は、昔話はもちろんのこと伝説や実話、各種の話を編集して作られたアンソロジーであり、これまでには類のない新たな試みとして注目される。編者はB・H・モロヒンで、一九八三年には改訂版〔280〕が出版された。ここには六八の昔話、六四の伝説・宗教伝説・実際にあったとして語られる話、そして四三の語り・口承の物語の三種の散文ジャンルが収録されている。ただし、こうした三種類への分類は各作品の持つ社会的機能にもとづくとするH・H・クラフツォーフの見解によるものであり、編者の分類

案と各ジャンルの定義はあまりにも常識的であって、多くの疑問を残している。

昔話のテキスト刊行は、民謡とともに資料集として公刊されたものについては上で述べたとおりだが、それ以外に昔話のみのテキスト集としては次のようなものがある。シリーズ「カレリア・フォークロアの記念碑」の一冊である『ブドガ地方のロシア昔話』（一九八二年）〔379〕は、一九七四年に出版された『カレリア・ボモリーエ地方のロシア昔話』（378）の続篇であり、この二つの資料集をあわせてフォークロアの無限の宝庫であるロシア北部（セーヴェル）の昔話の伝統が今なおはっきりと継承されていることを示している。『ブドガ地方のロシア昔話』にテキストとして収録されたのは、一九三〇年代から七〇年代後半までに記述され、ソ連科学アカデミーのカレリア支部のアルヒーフとして保管されていた、二一名の語りによる五〇篇である。このカレリア支部手稿部内の昔話資料のカタログは一九七九年に出版された〔422〕。同じく北部地域の昔話集としては、Г・Я・シーミナの採集による『ピネガの昔話』（一九七五年）〔330〕も重要である。

このヨーロッパ・ロシア北部とともに豊富なフォークロアの蓄積で知られるシベリア地域については、特にここ数年來、後述する婚礼歌とならんで昔話の分野で一連の価値あるテキストが集中的に公刊されている。『勇士に関するシベリアのロシア昔話』（一九七九年）〔380〕、『シベリアのロシア英雄昔話』（一九八〇年）〔376〕、『シベリアのロシア魔法昔話』（一九八一年）〔375〕、『不思議な馬についてのシベリアのロシア昔話』（一九八四年）〔381〕などがそれぞれであり、いずれもP・П・マトヴェエヴァが中心になって編集されたものである。また、И・В・ズヴィリャーノフ（ウラルのロシア・フォークロア研究を代表する研究者で、『ロシアのチャストゥーシカのボエチカ』（一九七四年）や『カマ河周辺の婚礼歌の題材・テーマ索引』（一九七五年）の著者として知られる）がウラル地方の語り手一一名から収集した三五話からなる『老人の秘密』（一九八一年）〔450〕、先述のB・C・パフチーンの採集した八一話を収

めた『レニングラード州の昔話』(一九七六年)〔51〕、バルト海沿岸のものとして『リトワニアのロシア・フォークロア』(一九七五年)〔392〕とИ・Д・フリードリヒ編『ラトビアのロシア・フォークロア、昔話篇』(一九八〇年)〔391〕などがあげられよう。このように見えてくると、新たなテクストの発表は、ある意味では当然であるが、ロシアの中央部よりも周辺部において目立つ現象であり、今後ともこの傾向は変わらないものと思われる。

以上見てきた地域別の昔話テクスト集のほかに、テーマ別とも言えるものとしてД・М・モルダーフスキイ編『ロシアの風刺昔話』第二版改訂版(一九七九年)〔371〕がある。編者は長年にわたってこの種のアンソロジー編集や「笑いの文学」論にたずさわってきた、この分野の第一人者。А・Н・アフナーシェフから現代にいたる一八の昔話集から一五六話を選択して編まれたもので、多いに役立つアンソロジーとなっている。また、序文では最近の「笑いの文化」研究なども視野にいれ、昔話研究のみならず、その種の分野にとっても有益な資料を提供している。このほか、一九七六年はアフナーシェフ生誕一五〇年にあたるため、それを記念して一卷本の簡略版(一九七六年)〔33〕、ならびに豪華なイラスト入りの三巻本が出版されたが、ともにテクストそのものは一九五八年版にそのまま依拠しているため、何ら価値を持たない。ただし、現在H・B・ノヴィコフによって編集中の、「文学の記念碑」シリーズの一冊として刊行予定のアフナーシェフ昔話集では、多少ともテクスト校訂面での新しさが期待される。

昔話研究へ移ろう。B・П・アニーキンによる二冊の『ロシア昔話』(一九七七、八四年)〔18・23〕は教師用教科書、ならびに一般読者向け概説書ではあるが、著者の依拠する「新歴史主義」的立場をはっきりと示している。叙述も概説書に特有の無味乾燥さが濃厚である。このほか、旧来の昔話論ののっとった概説書としてH・M・ヴェヂェールニコヴァ『ロシア昔話』(一九七五年)〔89〕が「世界文化史」シリーズの一冊として出版されている。一方、一九七〇年に死去したB・Я・ブロッパの『ロシアの昔話』が一九八四年に出版された〔352〕。これは、彼がレニングラ

ード大学にて行った講義録であり、生前は未発表であったのをK・B・チストーフ、B・И・エリョーミナが編集したものの、「昔話礼讃」に始まる本書は、収集の歴史、研究史、各種昔話の特徴、昔話の存在、などを主たるテーマとした全七章から構成されるが、プーシキン以降現代までの収集の歴史を扱った第一章、昔話の存在の形式と語り手の問題を論じた第七章などが、これまでのプロップの仕事には見られなかった面として興味深い。

昔話研究に対するプロップの寄与が絶大なことは広く認められているが、より具体的な側面になると評価は大きく揺れるものである。チストーフの論文「B・Я・プロップ、伝説と事実」(一九八一年)〔518〕はそうした評価の動搖に対して書かれたもの。欧米のプロップ理解をあまりに一面的として、プロップの仕事全体のコンテクストを見るべきとしながらも、構造主義的昔話研究の先駆者としてのプロップを再確認し、彼の方法を継承する研究に対し柔軟な見解を提出している点は注目すべきであろう。『昔話の形態論』(一九二八、一九六九年)〔350〕で体现されたそうしたプロップの方法の延長上で生まれた仕事としては、E・M・メレチンスキイ他の「魔法昔話の構造的記述の諸問題」(一九六九年)〔259〕を「古典」としてさまざまな形で展開されているが、いまだ十分な説得力を持つにいたっていない。このほか、理論面で注目すべき新しい仕事としては、コンタミネーションの問題を扱ったT・Γ・イヴァノヴァの論文(一九八一年)〔169〕がある。また、新たな昔話分類案を提起したものとしてE・A・トゥドロフスカヤの試みがある〔475〕。彼女は「魔法昔話の構造について」(一九七二年)〔474〕において昔話の登場人物の間の衝突に重点を置いて昔話全体の筋構造を記述しようとしたが、それに引き続いてより大枠の分類案を提出した。これはある意味で、プロップがその博士論文となった『魔法昔話の史的根源』(一九四六年)〔351〕で素描した起源・発展段階論になぞらえたもので、(一)アルカイックな昔話(人間と空想上の存在との衝突にもとづくもの)、(二)英雄昔話(王女のための勇士の闘い)、(三)家庭内の係争を含む昔話(家族の敵対関係が中心となる)、(四)階級衝突を含む昔話、といっ

た四つとそれぞれの下位グループへの区分を含んでいる。細部の考察の点で参考となる個所は多いが、全体として見れば、こうした大枠の時代区分と発展段階論、時代と昔話との対応関係の点で根本的な疑問が残るのはやむをえない。

ところで一九七九年に刊行された『題材の比較索引、東スラヴ昔話』〔47〕は、フィンランド学派の歴史・地理的方法にもとづいてこれまで世界各地で行なわれてきたアールネリトンプソンのカタログとその増補版作成の東スラヴ版にあたる試みである。この試みはH・Π・アンドレーエフが『アールネの体系にもとづく昔話題材索引』（一九二九年）〔15〕として実現していたが、そこに含まれたのはロシアの昔話のみで、加えてその後の約半世紀の間に発見された新たな題材をカバーしていない点で、研究者にとってはきわめて不満の多いものとなっていた。今回のカタログは最近二〇年間の昔話研究の進展にもとづき、ロシア一二三三、ウクライナ一三三九、白ロシア八九〇の昔話を対象としたもの。フィンランド学派の方法それ自体に対する批判を別とすれば、研究者の便宜になることは言うまでもない。加えて、一九三〇年代に批判されたアンドレーエフと彼のフィンランド学派的方法の「普遍性」が一部復権されたことは確認しておいてよいだろう。

個別テーマについては、J・H・ブシカリョーフによるエルスラン・ラザレーヴィチに関する昔話を扱ったモノグラフ（一九八〇年）〔356〕がすぐれた仕事として高く評価される。エルスランの物語は口承による幅広い流布だけでなく、二〇〇以上の大衆本や手書き本でも知られるが、この英雄譚に関する最初の本格的モノグラフである本書は、この話の「発生」の問題にはじまり、ヴァリアント相互の比較研究、そして今世紀初頭にいたるまでの時期における改作と変容という、エルスランの話のみならず昔話一般に関わるほぼすべての論点を扱っている。そして著者は、それらの分析を通して「かつて人氣のあったこの昔話の深い民族的根源を解明し、民族間を放浪する題材が民衆意識の

中でいかに変容していったかを示そう」としたのであり、その試みは成功していると言つてよい。

このほか、世態昔話の主人公のタイボロジを論じたЮ・И・ユージンの論文〔535〕、同じくユージンによる、世態昔話の中における歴史以前の問題を扱った論文〔536〕、魔法昔話における「笑いの世界」を論じたИ・П・ルバーノヴァの論文〔239〕、「橋のたもとでの竜退治」のモチーフに関する歴史・地理的方法による分析を行ったЛ・Г・バーラグの仕事〔46〕、昔話の語り出しをはじめとした定式(フォーミュラ)を論じたH・M・ゲラシーモヴァの論文〔111〕などが目についた。

昔話の語り手の創造的個性ならびに彼の生活誌の問題は、ロシア・ソビエトの昔話研究の中ではH・E・オンチュコフ、M・K・アザドーフスキイ以来伝統的に古くから注目されてきたものである。Э・B・ボメラントツェヴァ編『ロシアの語り手たち』(一九七六年)〔339〕は、M・Д・クリヴォボレーノヴァ、H・O・ヴィノクローヴァ、Φ・П・ゴスボダリョーフ、M・M・コールグエフ、A・H・コロリコヴァなどロシア民俗学史上著名な語り手九名の語った話を編集したアンソロジーである。個々の語り手論としては、『カレリア白海地方の昔話』(一九三九年)で知られるコールグエフに関してチストーフ〔516〕とB・ブーリキン〔353〕、現代ヴォローネシの語り手コロリコヴァに関するT・Г・イヴァノヴァ〔168〕、A・K・セルジプトフスキイの収集で知られるボレーシエの語り手レドキイに関するB・K・カシコ〔184〕らによる仕事が発表された。

「散文ジャンル」というタームの使用によって明らかになったのは、昔話以外の口承文芸作品(言い伝え、宗教伝説など)の置かれた地位が相対的に上昇したということであった。そうした関心の高まりがチストーフの仕事(一九六七年)〔511〕、B・K・ソコロヴァの『ロシアの歴史伝説』(一九七〇年)〔442〕などの公刊、「民衆の散文」を特集した『ロシア・フォークロア』第一三巻(一九七二年)などにははっきりと示されていることはすでに前稿で述べたと

おりであるが、その後のテキスト公刊と研究としては次にあげるものがある。『一七世紀初頭のロシア歴史歌謡』（一九七四年）〔209〕を発表したH・A・クリニーチナは、ロシア北部白海・オネガ湖周辺地域の言い伝えを編集して『北部の言い伝え』（一九七八年）〔408〕を出版した。本書は言い傳えの選択基準と体系化について述べた序文に始まって、北部各地への植民と土地所有、チュージ族、「地主」、財宝、力持ち、外敵との闘争、盗賊、旧教徒、歴史上の人物といった九つのテーマ別の言い伝え合計二三四が収録されている。全体分量の三分の一を占める付録には、各言い伝えの理解に必要な歴史的事実を説明した註釈のほか、モチーフ索引（ただしモチーフそれ自体の問題、モチーフの組み合わせの問題は言及がない）、語り手・人名・地名索引などがあって親切である。ただしこの分野におけるB・K・ソコロヴァ、あるいはB・Π・クルグリヤシヨヴァなどの先行研究にも注意を払うべきであろう。本書で具体化された九つのテーマ別の分類案は、すでに「ロシア・フォークロア集成」に向けて彼女自身によって書かれた「言い傳えのジャンル特性と体系化の原則について」（一九七七年）〔210〕で述べられたものだが、十分な説得力を持つまでにいたらず、他地域との比較研究にとってはたしてどこまで有効かが疑問である。同じクリニーチナの仕事として「地方原住民に関する言い伝え」（一九八一年）〔211〕は、ロシア人入植以前のロシア北部の原住民チュージ族が伝承の中でいかに描かれているかを跡づけたものである。

イヴァン雷帝に関する伝承の研究としてはC・K・ロソヴェーツキイ「統治者イヴァン雷帝に関する一六―七世紀の口承散文」（一九八一年）〔367〕が最新の成果としてすぐれている。また同じくイヴァン雷帝に関する伝承を、作家Π・И・メーリニコフと神学者H・K・ミロリュエポフの二人によって記されたままほとんど忘れられてきた資料によって明らかにした3・И・ヴラーソヴァの地味ながら丹念な労作（一九八一年）〔96〕が発表された。

ペロヴォーージェ伝説はキーテジ伝説とならんでロシアのユートピア伝説として名高いものであり、日本でも中村喜

和氏によるすぐれた紹介〔556〕がある。この伝説の研究としては今なおチストーフのモノグラフ〔511〕が「古典」となっているが、C・C・サヴォスクルの最近の仕事（一九八三年）〔400〕は、この伝説を追跡して中央アジア奥深く遠征調査を行った画家H・K・レーリヒと伝説との関わりを詳細に論証したものと高く評価される。同じくペロヴォージエ伝説を一九二七—二八年の農民逃亡に関する資料とのつきあわせで論述したT・C・マムシクの仕事〔248〕も目についた。

シベリアの農民逃亡を扱ったすぐれたモノグラフ『社会現象としての逃亡』（一九七八年）〔246〕の著者であるマムシクは、このペロヴォージエ伝説のほかにもアルタイ山地への逃亡民「カーメンシチク」に関する新資料を発掘し、相次いで発表しているが（一九七五、八一年）〔245・247〕、これもまた、口承文芸の散文ジャンルの研究に多くの資料を提供している。この「カーメンシチク」に関する伝承については、H・B・アレクセーエンコ『プフタールマの昔語り』（一九八一年）〔14〕も貴重である。ところでこうしたユートピア伝説と、逃亡や反乱などさまざまな形で展開される農民運動ならびにその意識との関連については、特に最近のソ連にあって多くの関心を集めており、民俗（族）学のみならず、歴史学の枠内でも多くの注目すべき成果（先のチストーフ〔511〕、マムシク、H・H・ポクローフスキイ〔331〕、A・H・クリバーノフ〔190〕その他。こうしたソビエト史学の現況については土肥恒之氏の紹介〔554〕がある）が生まれていることを指摘しておこう。

散文ジャンルの最後として、第二次大戦時の口承散文を集めた『戦さの真紅の花』（一九七九年）が「現代人」出版所から刊行されたことに言及しておく。「大祖国戦争」以来四〇年以上を経過しようとしている現在、「愛国主義」への喚起という状況の中で回想記類が多数出版されているにもかかわらず、戦時の「伝承」を「正確に」記述しまとめる作業は十分行われてこなかった。そうした成果としては、一九六四年にロシア文学研究所から刊行された『大祖国

戦争のロシア・フォークロア』〔393〕がまとまったものとして今なお価値を失わぬ最も体系的な資料集であり、また、最近の問題整理的論文として、この資料集の責任編集者でもあるB・E・グーセフの「第二次世界大戦時における民衆創造とその研究課題」(一九八〇年)〔135〕が多少とも意味あるものとして指摘できるだけで、全体としてあまり多くはなかった。その意味で今回、A・B・ゴンチャローヴァによって編集、出版された本書の意義は少なくない。

3、諺・謎謎

諺、格言、謎謎といったジャンルは、B・H・モローヒンのアンソロジー(一九七九年)〔281〕のタイトルが示すように「小さなジャンル」としてまとめることができるが、この分野についてはさほど新たな動きは見られなかった。モローヒンのアンソロジーは一七世紀以来今世紀までの採録のごく一部分を抜粋して例示したものの。このほか、最近三、四〇年間に作られたものとしては最良であるとの解説の付いたA・И・ソーパーレフ編『ロシアの諺と格言』(一九八三年)〔434〕がある。一九二〇年末よりの収集の結果得られた一一〇〇〇以上のテキストを収めているが、半分以上はB・И・ダーリの収集に負っており、配列も「祖国について」「個人と集団」「友情、愛」などといった恣意的なテーマ別になっている。同様の恣意的なテーマの選択とそれにもとづいた配列を行っているものとしてB・ボーイコ編『ロシア民衆の諺と格言』(一九七九年)〔73〕がある。こうした中で注目すべきいくつかの出版物もある。まず、諺に関する最も基本的な資料集であるダーリの『ロシア人の諺集』が一九五七年版そのままの復刊とはいえ、「芸術文学」出版所から刊行された(一九八四年)〔142〕。また、一七二四―五四年に編まれて最近ロシア文学研究所へ委譲された諺集がA・И・ゲルマノヴィチによって発表された(一九七八年)〔341〕。これは合計二五〇〇近くのテキストを収め、しかも全体が文頭文字のアルファベット順に配置されており、諺そのものの歴史だけでなく諺研究の上でも

貴重な資料となるだろう。さらにウラル地域のフォークロア研究の第一人者であるM・Γ・キターイニクは、ウラル地域鉱山労働者をはじめとした労働者の保有する諺と格言を他数の資料から抽出し編纂して発表している（一九八一年）〔189〕。

謎謎についてはB・B・ミトロファアーノヴァのモノグラフ『ロシア民衆の謎謎』（一九七八年）〔171〕が、謎の発生と研究史、謎に反映した現実、芸術的特性と歴史的發展、他のフォークロアジャンルとの関連などを扱っている。M・A・ルイブニコヴァと言えば、主として一九二、三〇年代にフォークロアの言語と文体論、文学教授法などの分野に活躍したほか、諺、格言、謎謎にも多くの業績を残しているが（一九三六年に『謎謎』が出版された。『ロシアの諺と格言』は一九四一年に出版準備が出来ていたが戦争と彼女の死で中断、ようやく一九六一年に刊行された）、彼女の生誕百年に寄せて、一九八三年に選集〔398〕が刊行されたことを付記しておく。

4、歌謡ジャンル

民謡テクストの出版として最初に特筆しなければならぬのは、Π・B・キレーエフスキ「民謡集」の刊行が開始されたことである。キレーエフスキの「民謡集」は、一九世紀の多数のロシア知識人が採集に加わって出来上がった一大事業であり、A・И・ソボレーフスキやЯ・B・プラーチの民謡集と並ぶ代表的なロシア民謡集として知られている。これは一九世紀後半（一八六〇―七四年）に最初の版が刊行され、新版は革命前から革命後にかけて（一九一一、一八、二九年）出版されたが、近年の新たな資料の発掘（主としてキレーエフスキの収集に協力した「通信員」に関するもの）によって、より完全な版の上梓が待ち望まれていたのであり、今回「ロシア・フォークロアの記念碑」シリーズとして出版されたのは以前の二種の版の全面改訂版であると言えよう。現在まで刊行された二冊は、

ヤズィコーフ兄弟の収集になるもの第一巻（一九七七年）〔435〕とП・И・ヤクドシキン収集の歌謡集第一巻（一九八三年）〔436〕である。前者は、A・Д・ソノモノフによる長大な序文、キレーエフスキイ、H・M・ヤズィコーフ、A・C・ホミャコーフの共著論文「ロシア民謡の収集について」（一九三八年）を冒頭に収め、テキストはブイリーナと歴史歌謡、兵士・コサック・船乗りの歌謡、バラードと囚人歌謡、婚礼歌謡の四部の三八二個の歌謡から構成されている。一方、後者のヤクドシキンの収集になる巻は、構成を前者とはまったく違えて、一八四三—四四年、四五—四六年、四七年といった収集年代順にテキストを配置している。この巻の編者、序文執筆者は3・И・ヴラーソヴァである。キレーエフスキイの「民謡集」と銘うたれているものの、個々の巻の編集方針がまったく異なるのは問題が残ろう。しかしテキスト校訂自体はきわめて丹念に行われ、註釈にはこれまでの研究成果がはっきりと反映しており、信頼に足る資料集となっていることは言うまでもない。この二巻を通して言えるのは、ロシア民謡の歴史の上のみならずロシア民俗学史の上でもП・И・キレーエフスキイの民謡集が絶大なる意義を今なお持っていることである。加えて、以前の二種の版とはまったく異なった編集方針、すなわち収集者別に公刊するという試みは、例えばД・C・リハチョーフが「ロシア・フォークロア集成」の編集に対して述べた見解〔232〕と通ずる点があり、その点でも注目すべきである。

歌謡のジャンルの中で多くの成果を生んでいるのは婚礼歌の分野であり、これは近年特に目立つ婚礼研究の活発化という方向と密接不可分の現象である。婚礼歌謡の収集の成果としては、まずヨーロッパ・ロシア北部のものとして『ピネガ地方の婚礼歌』（一九八〇年）〔300〕があげられよう。これは一九七〇—七二年にH・И・サーヴシキナの指導によって行われたモスクワ大学の民俗調査の成果であり、テキストは、歳時歌謡、婚礼歌謡、葬礼歌謡、呪文の四つに区分されている。

一方、シベリア地域のテクスト刊行は、昔話の場合に見たとおり、きわめて盛んである。奥バイカルの旧教徒の婚礼歌研究で博士候補資格を取得したP・Π・ポターニナ(一九七七年)〔342〕がテクスト出版について精力的な活躍をしており、これまで彼女の編集になるのは、『シベリアのロシア婚礼歌』(一九七九年)〔383〕、『シベリアのロシア婚礼儀礼歌』(一九八一年)〔301〕、そして前二者が儀礼テーマ別の配列を行っているのに対しジャンル・テーマ別に配列した『シベリアのロシア婚礼歌謡』(一九八四年)〔372〕の三冊である。また、やはり奥バイカル旧教徒の歳時儀礼研究〔74・75〕で知られるΦ・Φ・ポロネフの編集によって『シベリア人の歳時儀礼歌』(一九八一年)〔179〕も刊行され、ここに収められた復活祭の時期の歌謡は新しい資料として目についた。ここにあげたシベリアの儀礼歌テクストはどれも基本的な資料集として、今後の研究に不可欠なものである。

研究としては、И・H・ヴィノグラドヴァの『南・東スラヴの冬期歳時歌謡』(一九八二年)〔95〕があり、これはクリスマス・正月期の儀礼歌コリャダーの起源とスラヴ民族間のタイポロジーを分析したものである。歳時歌謡の手法を分析したA・H・ローゾフの仕事(一九八一年)〔360〕も貴重であり、また、音楽民俗学の第一人者で名著『歳時歌謡のメロディカ』(一九七五年)〔160〕によってИ・И・ゼムツォーフスキイが博士号を取得した(一九八〇年)ことを付記しておく。ちなみにソ連の音楽民俗(族)学を開拓し、東スラヴの儀礼歌謡ジャンルの形態論的記述を行ったK・B・クヴィートカの生誕百年(一九八〇年)を記念した論文集が「ソビエト作曲家」出版所から刊行された(一九八三年)〔319〕。

このほか、A・M・ノヴィコヴァとC・И・プーシキナによる『トゥーラ州の婚礼歌』(一九八一年)〔297〕はこの地域の二〇年にわたる調査の成果であり、一三八のテクストは婚約の際の歌、嫁入り前夜の歌、婚礼のための歌の三つに分類されている。またシベリアのトムスクのオビ河周辺域の婚礼歌を分析したA・M・メフネツォフ(一九七七

年)〔262〕、ノヴゴロド地域の婚礼歌研究で博士候補資格を得たB・M・ジェクターリナ(一九七五年)〔157〕、同じく博士候補資格を「音楽・民族学的体系としてのボモリーエ人のロシア婚礼歌」のテーマによって取得したB・A・ラーピン(一九七六年)〔224〕らの仕事が相次いでいる。さらにЮ・Г・クルーグロフは『ロシアの婚礼歌』(一九七八年)〔212〕、『ロシアの儀礼歌』(一九八二年)〔214〕の二冊を刊行した。この二冊はともに研究篇とテクスト篇との二部構成で、婚礼歌ならびに儀礼歌の全体を手軽に知りうるように編集された学生向けの教科書である。この種の概説書が生まれたこと自体が、婚礼・儀礼とそれに結びついた歌謡への強い関心を示すものであるが、口承文芸としての儀礼歌という大枠は厳格に守られている。したがって婚礼歌をほめ歌・そしり歌・抒情歌の三つに、また儀礼歌を儀式歌・まじない歌・ほめ歌、そしり歌・遊び歌・抒情歌の六つに分類する案にさして新しさは見当らない。

儀礼歌以外の民謡については、まとまったテクストの収集・発表はあまり行われなかった。先に言及したゼムツォーフスキイの編集によって『ウーグリチの民謡』(一九七四年)〔479〕が刊行されたが、これは一九六九年にヤロスラ・ヴリ州ウーグリチで新たに収集された一三〇〇のうち九一を収めている。また、『柳の木、奥ウラルの民衆抒情』(一九八三年)〔172〕は民謡の宝庫のひとつとして名高いウラルのパラード、恋愛歌、家族歌、風刺歌、遊び歌などを集めたもの。編者B・П・フォードロヴァの序文は短かいながら奥ウラルのフォークロアについてのすぐれた解説である。ただし、歌謡収集のデータが不十分である点が問題となろう。

収集ならびにテクストの出版があまり活発とは言えないのに対して、この分野に対する研究成果には注目すべきものをいくつか見出すことができる。「民衆抒情歌の比喩(メタフォアからシンボルへ)」によって博士候補審査を通過した(一九六七年)〔150〕B・И・エリョーミナは、この博士候補論文を基礎として『ロシア民衆抒情歌の詩学的構造』(一九七八年)〔152〕を発表している。これは、メタフォアとそれに関連した神話、メタフォア的形容辞とイメー

ジによる比喻、シンボルの問題、メトニミーとその形式、そして詩的シンタクスとしての反復性といった詩学上の基本的な問題のすべてを扱っている。このような問題設定は、革命前にA・H・ヴェセロフスキイによって行われたものであり、エリョーミナ自身「A・H・ヴェセロフスキイの遺産における史的詩学の諸問題」(一九七九年)〔153〕の中でこの問題を論じている。さらにエリョーミナには、民謡にみられる変身という問題を神話的ファンタジーの側面からとらえようとした論文「神話と民謡」(一九七八年)〔151〕もあるが、いまだ概括的でさしたる新しさを見出せない。Л・B・ルイバコーヴァの論文「ロシア抒情民謡における神話的伝統の問題によせて」(一九八〇年)〔397〕は、抒情民謡に神話的観念が反映していることを、描写対象の選択の論理、民謡の中の女主人公の形象の分析を通して明らかにしている。また、一九八二年秋に、博士候補資格審査の直前に急死したГ・И・マリーツェフの「ロシアの非儀礼抒情歌の伝統的定式」(一九八一年)〔243〕は、欧米の研究をも十分視野にいれた、この分野における最初のまともだったモノグラフとしてすぐれたもの。

H・П・コルバコーヴァは一九〇二年生まれで、一九二〇年代以来一貫してロシア民謡研究にたずさわってきた第一人者であるが、彼女の最近の論文「ロシア世態民謡のジャンル・題材・テーマ分類について」(一九八三年)〔197〕は長年の研究にもとづく、民謡分類案の提示である。彼女によれば「世態民謡」は、まじない歌・遊び歌・ほめ歌・抒情歌といったジャンル、農耕・家族・社会風俗・歳時暦・婚礼・恋愛・兵士といったテーマによって分類され、さらにそれが下位テーマやモチーフ、題材へと区分されるという。同じくこのコルバコーヴァ女史と民謡との生涯にわたる関わりは、『民謡と人々』(一九七七年)〔194〕の中で熟っぽく語られており興味深い。また、B・A・ヴァシレーヴィチの『東スラヴのユーモラスな民謡』(一九七九年)〔88〕は、小冊ながらも「ユーモラスな民謡」という、これまで明確な一領域となりえなかったジャンルを東スラヴのレベルで提唱したものである。著者の試みは、近年の

「笑いの文化」「コミックなもの」への関心の高まりをも踏まえながら、民謡研究に対して新たな視野を開こうとしたものとして注目に値する。ただ、儀礼歌謡におけるユーモラスな側面が論じられぬのはなぜか。

革命運動や国内戦、第二次世界大戦の時期に作られた起源の新しい民謡に関しては、以下にあげる資料集ならびに研究書が出版された。A・K・バリコヴァの『自由待望の歌』（一九七八年）〔318〕は今世紀初頭の東シベリアにおける革命運動と関連した民謡に関する最初のモノグラフ、同じくシベリアで一九一八―二〇年の国内戦の時期に生まれた民謡三〇七を収めた貴重な資料集『シベリアにおける国内戦の英雄歌謡』（一九八二年）〔112〕がある。後者を編集したのは、四〇年以上にわたってシベリア、極東のロシア・フォークロアをテーマとしてきたJ・E・エリアソフである。また、二次大戦の一大激戦地として知られるスターリングラード（現在はヴォルゴグラードと改名）の攻防戦の中で生まれた歌を集めたものとしてΠ・Φ・レーベジェフ編『火中で生まれた歌』（一九八三年）〔327〕がある。スラヴ全域のバルチザン歌謡を対象としたものとしてB・E・グーセフのモノグラフ（一九七九年）〔134〕が出版されている。

コルバコーヴァと同じ一九〇二年生まれのT・M・アキーモヴァは、文学と民謡の関わりの問題をはじめロシア・フォークロアの多くの分野にあっていわば「サラトフ学派」の中心として多くの業績を残しているが、彼女の『ロシア民謡概史』（一九七七年に刊行されている。彼女と同じく「サラトフ学派」の一員であるB・K・アルハーンゲリスカヤの論文「御者の歌謡」（一九八〇年）〔31〕は、御者の民謡に関する一九世紀の作家たちの記述をもとにこの未研究の分野に踏みこもうとした仕事であり、御者の生活誌にとっても貴重な資料となっている。また変わったところでは、一八、九世紀のロシア民衆社会の中で「歌集」がいかに流布し受けいれられていたのか、それがどのような歴史をたどったのかを跡づけようとした仕事も現われた。H・Π・コバネヴァの「一九世紀民衆にとっての歌

集」(一九八三年)〔202〕とB・チスチャコーフの「行商人のリュックから」(一九八三年)〔524〕がそれである。これらは概説的で物足りなく分析の突っ込みも不十分だが、これまであまり扱われてこなかった、いわば社会的分野を取りあげた点で価値が高く、今後こうした分野の研究がさらに強く求められる。

泣き歌に移れば、このジャンルでまず述べなくてはならぬのは一九八一年五月にペトロゾヴォーツクにおいて天才的泣き女И・А・フェドソヴァの生誕一五〇年を記念した集まりがあり、研究報告も行われた。フォークロア伝承者のためにこうした記念祝賀会が開かれるのは他に例を見ないように思われる。チストーフ夫妻の校訂によるフェドソヴァの泣き歌が『選集』(一九八一年)〔484〕として刊行されたのもこの生誕一五〇年記念に向けてのことであった。フェドソヴァの泣き歌テキストは、E・B・パールソフによる『北部地方の泣き歌』(一八七二—八五年)とO・X・アグレネヴァ・ヴァリスラヴァ・スカーヤの『ロシア農民婚礼の記述』(一八八七—八九九年)などに求められたが、容易に目にするのできなかったため、今回の『選集』はきわめて有益である。さらにK・B・チストーフは『カレリアのロシアの語り手たち』(一九八〇年)〔516〕で四章のうちのひとつをフェドソヴァにあてて、彼女の生涯のアウトラインを素描している。フェドソヴァについては拙稿〔560〕に記したとおりだが、近年の調査と研究によって彼女の活動に関するいくつかの事実が明らかになっている。その一例は、フェドソヴァの肉声を収めた録音(一八九六年、モスクワにおける)が発見され、その歌謡の一篇が復元、テキスト化されたことである〔236〕。

フェドソヴァ以外にも、最近の泣き歌収集の成果として『カレリアの泣き歌』(一九七六年)〔453〕、B・B・エフイメンコヴァの『北部ロシアの泣き歌、研究とテキスト』(一九八〇年)〔156〕がある。研究論文としては、泣き歌に見られる「他界への道」の観念を論じたB・A・チスチャコーフ(一九八二年)〔523〕、泣き歌を素材として一九世紀農民の家族関係を明らかにしようとしたチストーフ(一九七七年)〔514〕、そして泣き歌に描かれた「家」の意味論

を扱ったJ・F・ネーフスカヤ(一九八二年)〔286〕などといった仕事が目すべきである。ネーフスカヤの論文は、これまで公刊されたほぼすべての泣き歌のテキストを用いて、そこに描写された窓、扉、門、玄関、部屋、「赤い隅」などの各部分の意味論を分析したものである。このほか、H・B・ズィリヤーノフ「婚礼泣き歌の即興性について」(一九七八年)〔164〕、エリョーミナの「葬礼泣き歌の『常套句』の歴史・民族的源」(一九八一年)〔154〕などが発表されているが、これらには特に新しさは見当らない。

一九世紀半ば以降に生まれたとされる起源の新しいフォークロアであるチャストゥシカ(小唄)は現在もなお確実に受けつがれ、新たなレパートリーが続々と生まれているジャンルである。したがって最近においても、収集の成果が精力的に公刊されている。その例としては、シベリア地域について『シベリアのチャストゥシカ』(一九七七年)〔414〕とその続篇『南シベリアのチャストゥシカ』(一九八一年)〔504〕、後者は合計一一〇〇のテキストを地域別、そしてその中ではまったく自由に配列している。ウラル地域では、一九七二―七三年にこの地域の各地で開かれた第一回フォークロア・フェスティバルで収集されたテキストを編集した『ウラルのチャストゥシカ』(一九七九年)〔480〕がある。またヨーロッパ・ロシア北部では『北部地方のチャストゥシカ』(一九八三年)〔505〕が出版された。これはアルハーンゲリスク州のカールゴポリに住む郷土誌家M・B・フヴァリンスカヤが採集したもの、あるいは彼女の手もとに保管されていた古いノートによるもの合計八〇〇点から一六〇〇余りを選択し、生活誌的題材(孤児、村の夜の集い、新たな生活等々)に従って配列したものである。これらのいずれも、テキスト集としては信頼に足るものであり、しかもしゃれた装丁と挿絵の工夫がなされていて読む者の心を楽しませるものとなっている。

バラードのジャンルについては、さほど目立った動きは見られなかった。これまでソビエトの民俗学では、バラードという言葉そのものへの抵抗もあったためか、このジャンルに対しては十分な議論が行われてこなかった。その一

方で文学研究の視点からバラードを扱う場合は多く、その中で例えば、ロマン主義文学とバラードにおけるフォークロアの要素を指摘したH・И・コプイロヴァの研究〔203〕も発表されている。民俗学の枠内でバラードを扱ったものとしては、「詩人文庫」シリーズで『民衆のバラード』（一九六三年）を編纂したД・М・バラショーフの編んだ『ロシアの民衆バラード』（一九八三年）〔377〕が、一般読者向けとはいえバラードの全体像を知る上ですぐれたアンソロジーとなっている。しかしここに収録されたテキストの多くは、ロシアのバラードが一四―一七世紀に開花したとする編者の見解にもとづき、古い題材を歌ったものであり、近世・近代の作品はさほど多くない。

ブイリーナのテキスト集としてあげることができるのは以下のとおりである。Ю・И・スミルノーフとB・Γ・スモリーツキイの編集による『ノーヴゴロドのブイリーナ』（一九七八年）〔294〕はノーヴゴロドの叙事詩伝統を知る上で役立つもので、一九七四年に同じ編者によって刊行された『ドブルーニャ・ニキーチツチとアリョーリャ・ポボーイチ』と同じく「文学の記念碑」シリーズの一冊である。H・П・レオンチエフが北部ベチョーラ地域で新たに収集した成果である『ベチョーラのブイリーナと歌謡』（一九七九年）〔329〕、また、一九八一年に「ソビエト作曲家」出版所から刊行された『ブイリーナ―ロシアの音楽叙事詩』〔87〕は、ブイリーナの楽譜を収めた「旋律の集成」として最初の試みである。テキストの配列は、まず北部・中央地域・ヴォルガ沿岸・ウラル・シベリアといった地域別に、その中ではメロディ別の分類によっており、いわばテキストと音楽の結合を意図したものである。独自のアンソロジー作成の試みである。編者はB・M・ドブロヴォーリスキイとB・B・コルグザーロフであり、「ロシア民謡集」シリーズの一巻として刊行された。

ソ連邦科学アカデミーのカレリア支部が、ヨーロッパ・ロシア北部のフォークロア資料を多くの未刊草稿の形で保管していることは昔話の項で言及したとおりだが、昔話の場合同様ブイリーナについてもそれら未刊資料のいくつか

が公刊された。「カレリアのフォークロア記念碑」シリーズの一冊としてH・Γ・チエルニャーエヴァの編集によって出版された『カレリアのロシア叙事歌謡』(一九八一年)〔384〕がそれである。ここには一九三〇年代から六〇年代にかけて収集されたバラード八、巡礼歌一〇のほか、ブイリーナ三六が収められている。また、ブイリーナの歴史にあって忘れえないA・Φ・ギリフェルジンによる『オネガのブイリーナ』がA・И・バラランジンの編・序文によって復刊されたこと(一九八三年)〔304〕もつけ加えておきたい。

ブイリーナ研究、特に研究方法論について述べるならば、一九六〇年代前半にB・A・ルイバコフとB・Я・プロップの間で激しく展開された論争(簡単な紹介は〔555〕で行われている)は今なお大きな余波を残している。すなわち、ブイリーナ研究の方法の点で「具体的歴史主義」(ルイバコフ)に立つか、「抽象的タイポロジー」(プロップ)に立つのかという論点は最近においても、「歴史主義」をいかに理解すべきかをめぐってなお多くの議論を呼んでおり、到底解決にたどりつきそうにない。しかもこの問題はブイリーナ研究のみならず、フォークロア研究そのものの方法論に深く関わる点で重要である。この議論で最も活発に発言しているのはB・Π・アニーキンであろう。彼は一九七〇年代までのソビエト期のブイリーナ研究を「歴史主義」との関連で検討する〔19・20〕だけでなく、革命前の「歴史学派」との関連で確認しようとし〔22〕、そこからルイバコフの立場を全面肯定している。ほぼ同じ視点はИ・И・エメリヤノフ(一九七八年)〔149〕、C・H・アーズベレフ(一九八二年)〔5〕、またΦ・M・セリヴァーノフ(一九八四年)〔410〕などによって述べられていると言えよう。

これらのいわば「歴史主義派」に対し、プロップの流れに立つグループはB・H・プチーロフ(一九七八年)〔354〕を除くならば表立った批判を展開してはいない。しかしながら、より具体的な実りある仕事の中で「歴史主義派」への批判は行われていると思われる。そのような仕事としては例えば、H・Я・フロヤノフとЮ・И・ユージンの共著

論文「史的現実とブイリーナのファンタジー」(一九八三年)〔498〕、И・П・スミルノフの「叙事的メトニミー」(一九七九年)〔432〕などがあげられよう。

このほか、T・M・アキーモヴァの論文(一九七七年)〔8〕は最近のブイリーナの詩学に関する研究の整理を行ったものとして役立つ。また、個別テーマを扱ったものとして、ブイリーナにおける数の問題を扱ったT・A・ノヴァイチョヴァ論文(一九八四年)〔299〕、ブイリーナに登場するチェスのリアリティを論じたИ・M・リンデルの論文(一九八四年)〔229〕などがあった。

最後に、ブイリーナの語り手に関するいくつかの仕事あげる。B・И・チーチェロフは冬期歳時儀礼の研究で博士号を取得し(一九四八年、出版は一九五七年)〔525〕、一九五三年から五七年に死ぬまでのわずかの期間ながらモスクワ大学教授として活躍した研究者であるが、彼の『奥オネガ語り手の流派』は書かれてから四〇年余りも経過してようやく出版された(一九八二年)〔526〕。これは一九二〇年代に彼が行ったブイリーナ採集時における、フィールドとなったヨーロッパ・ロシア北部の語り手の系譜と流派を地域性から始めて丹念にフォローしたものである。

K・B・チストーフの『カレリアのロシアの語り手たち』(一九八〇年)〔516〕は、先にふれた泣き女フェドソヴァと昔話の語り手コールゲフ以外に、ブイリーナの語り手として名高いリャビニン一家の人々と、第二次大戦時までに生き長らえたブイリーナの語り手И・T・フォーファノフの生涯と彼らのブイリーナ芸術に関して、多くの新資料もまじえて述べている。また、H・Г・チェルニャエヴァの論文「叙事的記憶の研究の試み」(一九八〇年)〔509〕は、ブイリーナを資料として師から弟子への継承と再創造がいかに行われるかを、テキストの各行、節、モチーフ、題材の詳細な比較対照とその結果の分析を通して行った労作である。

5、民衆劇

民衆劇というジャンルは、特に近年めざましく研究が進行している分野である。第二次大戦後から一九七〇年代半ばまでのこのジャンルの研究動向についてはT・M・アキーモヴァの論文（一九七六年）〔6〕が細大もらさず教えてくれるが、そこでも紹介されている論文集『民衆劇』（一九七四年）〔284〕は、最近の研究の進展に大きなはずみを与え、いわば民衆劇研究の新しい段階の到来を告げたものである。この論文集はレニングラードの国立演劇・音楽・映画研究所から出版されたもので、B・E・グーセフの責任編集下に、民衆演劇研究の第一線に立つ研究者（M・イーヴレヴァ、A・A・ペールキン、A・Φ・ネクリイロヴァ、H・H・サーヴシキナなど）が執筆し、テーマも演劇と儀礼の関係、遊戯・儀礼・演劇のタイポロジー、放浪芸人、人形劇、現在の民衆劇伝統、他民族の文化の中のロシア民衆劇などさまざまである。

こうした状況の中で、一九八二年秋にH・H・サーヴシキナ（モスクワ大学）が論文「フォークロア芸術現象としての一九二〇世紀初頭のロシア民衆劇」〔403〕によって博士号を得たことは、民衆劇研究の上だけでなくロシア民俗学全体にとっても一大事件であった。この事件は、これまで不当なまでに軽視されてきた民衆劇という分野をロシア・フォークロアのジャンルとして確実に承認させ、演劇研究の枠内で扱われることの多かった民衆劇研究をロシア民俗学の中に画然と位置づける意義を持つこととなったと言える。

ロシア民衆劇に対する彼女の基本的な視点・全体的構想と、自らの収集を含む多くのテキストその他のデータはすでにこれまでもさまざま形で発表されてきた。かつて拙稿で取りあげた『ロシア民衆劇』（一九七六年）のほか、大学生向けとは言え豊富な内容を含む『ロシア伝承民衆劇』第一、二冊（一九七八、七九年）〔402〕その他がそれにあたり、今回の論文はそれらの集大成であるが、これまでには見られなかった側面もいくつか見出される。全体の組

立てを知るために、各章のタイトルをあげるならば、

序、研究の基本的側面と諸問題（第一章）、民衆劇の収集・出典の性格（二）、分類と題材構成・民衆劇題材とバリエーションのシステム化と素描（三）、発達した民衆劇の形成における、一八世紀末—一九世紀民衆的大衆芸術の役割（四）、民衆劇の思想的・美的構造（五）、民衆劇における歌の機能（六）、民衆劇の題材・コンポジションのタイプ（七）、人物のシステム（八）、言葉の特徴（モノローグとダイアローグ）のタイプとその組立て（九）、物・テーマの写実性（一〇）、言葉のスタイル（一一）

ここで、例えば第四章はサーヴシキナ自身も含めてこれまで明らかにされてこなかった面を扱った点で注目されるし、第一、第二章はまさに民衆劇研究の「出発」を高らかに宣言したものと見て興味深く読むことができた。巻末の文献リストは二〇ページを越え、さらに付録として民衆劇テキストのみならず、民衆劇に関する各種の記録や証言、さらに民衆劇にまつわる大衆本などまでがあがっている。以上の点でこの博士論文はП・Г・ポガトゥイリョフによって開始されたソビエト民衆劇研究の成果のすべてを反映しており、同時にまた今後の研究の礎となることは間違いないと言える。

上でふれたサーヴシキナの『ロシア伝承民衆劇』と同じく学生用の参考書として書かれたもので、グーセフの執筆になる二冊も見逃すことができない。『ロシア民衆劇の源流』（一九七七年）〔133〕とその続編にあたる『一八世紀—二〇世紀初頭のロシアのフォークロア演劇』（一九八〇年）〔136〕がそれである。前者は、仮装、儀礼的行為（カーニバルタイプ）の遊興、輪舞の遊興、伝統的婚礼、民衆の演劇的遊戯の三部分から成り、民衆演劇の前史を描いたもの。それに対して後者は一八世紀以降の民衆劇のさまざまな形態を紹介しており、ここで扱われているのは小劇、笑劇、「盗賊」劇、見世物小屋とその呼びこみ「爺さん」、メロドラマと素人劇などである。しかもここで注目しなくてはな

らないのは「フォークロア劇」というタームが用いられていることである。これまで「民衆劇」と「フォークロア劇」というタームは区別されることなくほぼ同義で使われてきたが、グーセフが上述二書のうち後者の冒頭で述べているように、「民衆劇」という言葉はあまりにも多義的であり、素人による古典劇上演や「民衆のための」演劇もまた「民衆劇」と呼ばれることが多い（そうした分野を扱った最近の成果はΓ・A・ハイイチェンコ『一九世紀末—二〇世紀初頭のロシア民衆劇』（一九七五年）〔500〕）。したがってグーセフは「フォークロア劇」というタームをより厳格に、上であげたものに対して用いようとするのである。

グーセフのこうした提案は当然であろう。例えばΓ・C・オストローフスキイも、見世物小屋や大道芸などの世界を文学や絵画、回想録などによって再構成し、それを「フォークロアの舞台記述」の問題として把握しようとした魅力ある論文「フォークロア劇の舞台記述」（一九七七年）〔313〕の中で、「フォークロア劇」というタームの利用を呼びかけているのである。

このほかグーセフの仕事として、革命後から一九三〇年代半ばまでのフォークロア劇の状況とその研究史を跡づけた論文（一九八一年）〔137〕、論文集『ドストエーフスキイと演劇』（一九八三年）の一章として、ドストエーフスキイと民衆劇との関わりを扱った論文〔138〕などが目についた。特に後者で述べられた作家ならびにその作品と民衆劇との関連というテーマは、ドストエーフスキイだけでなく他のロシア作家についてもほとんど扱われてこなかったものである。そうした試みとしては最近、Γ・A・チーメ「一八八〇年代—一八九〇年代初期におけるロシア作家と民衆劇の問題」（一九七七年）〔460〕が発表されている。これはオストローフスキイにはじまる「民衆のための演劇」運動を特にJ・H・トルストイの創作活動との関わりで論じたもので、民俗学からの民衆劇研究とは異なり、むしろ作家研究、演劇史研究にとって重要な仕事であるが、参考となる部分も多い。作家ならびに作品と民衆劇との関連と

いうテーマは、「文学とフォークロア」の個所で後述するように、その関わりをいかなる形でとらえるのかという方法論の上で多くの問題を含んでおり、これから多くの議論が求められるであろう。

A・Φ・ネクリヨヴァは一九七三年に「一九一〇世紀の記録におけるロシア民衆人形劇『ペトルーシカ』」〔288〕のテーマで博士候補資格を取ったが、人形劇に関するその後の成果としては「ロシア民衆人形劇『ペトルーシカ』の舞台特質」(一九七四年)〔289〕のほか、最新のものとしてグーセフとの共著による『ロシアの民衆人形劇』(一九八三年)〔293〕がある。特に最後のものは学生向きの参考書で五〇ページほどの分量であるが、「ペトルーシカ」「ヴェルテプ」その他の民間にかつて広く流布していた人形芝居の全体像を、最近までの研究成果を余すところなく利用しながら簡潔に記したものととして高く評価されてよい。ネクリヨヴァのほか人形劇を扱ったものとしては、H・ソロモニク「人形劇分析の問題」(一九七八年)〔445〕が「言語」としての人形劇の「記述」を試みており、人形劇研究の新しい方向を含んでいると言える。

A・A・ペールキンのモノグラフ(一九七五年)によって新たな段階を迎えたロシア放浪芸人(スコモロフ)研究については、その後の成果として次の二つがある。P・Л・サドコフの「陽気なスコモロフ」(一九七六年)〔405〕はこの芸人の楽器について若干の洞察がある以外はエッセー風読み物である。また一九四六年に「北部におけるスコモロフ」を書いてこの分野を開拓したA・A・モローゾフが「スコモロフの歴史的役割と意義に関する問題によせて」(一九七六年)〔279〕を著わし、スコモロフに関してこれまで出された論点の整理を行っている。しかしながらこの二つとも、スコモロフ研究の困難さ、特に資料面での障害の大きさを物語る結果となっている。この放浪芸人の研究に新たな視角が必要であることを痛感せざるをえない。

以上述べた民衆劇研究はようやく本国ソ連でも開始したばかりであり、これからの研究にとって問題点は多い。

最後に、この分野における欧米の研究成果に言及しておく。E・A・ワーナーの『ロシア民衆劇』（一九七七年）〔550〕は民衆演劇全体を広範に、しかも手がたく概説したもの、またR・ズグタ『ロシアの旅芸人』（一九七九年）〔552〕は歴史家らしく、スコモローフの起源から北方への移動、そして没落という歴史を跡づけ、後半で口承文芸や音楽その他芸術への寄与をスケッチしたものである。ともに本国ソ連の研究を細部にいたるまで参照しながらの力作と言える。しかしながら概説的であるのは仕方ないとしても、民衆演劇の世界へのアプローチに熱意と問題意識が足りないのはどうしてであろうか。

このことに関連して述べるならば、J・クベルシット演出による学術映画「ロシア民衆劇」〔386〕は、最近のこの分野に対する関心の高まりと同時に本国ならではの熱意の産物として高く評価されねばならない。このフィルムは、婚礼とその他の歌や遊戯を扱った第一部、輪舞ならびに見世物小屋や人形芝居を扱った第二部、そして「マクシミリアン皇帝」「舟」といった民衆劇の代表的レパートリーと、箱形形劇ヴェルテープの上演を扱う第三部の三部からなる。きわめてすぐれた映像処理のみならず再現された民衆劇の全体世界の広がりの中でロシア民衆劇研究にとって貴重な資料となることは疑いない。

6、子供のフォークロア

子供のフォークロアのジャンルに関して言えば、まとまった資料集の出版は見られなかった。むしろ一地域の民俗調査の成果の中にはこのジャンルのテキストも含まれており、一九六〇年代の調査だが『ウラジーミル村の伝統的フォークロア』（一九七二年）〔470〕にも子守歌、あやし歌、物語の計一二のテキストが子供のフォークロアとして収録されている。ソ連邦の諸民族の子守歌を集めたアンソロジーとして『優しさの本』（一九八二年）〔192〕があるが、こ

こには詩人の作ったものも含まれている。

この分野についての収集と研究は、後述するように一九二〇年代後半から三〇年代にかけての一時的高まりを除いて、ほとんど展開されておらず、資料面では革命前の収集に、また研究面では諺や謎謎とともに論じたB・П・アニキン¹³の著書(一九五七年)〔17〕に依拠せざるをえなかった。

こうした中で、M・H・メリニコフ著『シベリアの子供のロシア・フォークロア』(一九七〇年)〔261〕はこのジャンルを一個の独立した分野へと承認させるのに大きな力となった。そしてこのモノグラフを契機として、いくつかの本格的な研究が発表されつつあるのが現状である。二、三の例をあげるならば、Э・C・リトヴィンの「ロシアの子供フォークロアの歌謡ジャンル」(一九七二年)〔230〕、O・H・グレーチナとM・B・オソリーナの「現代の子供のフォークロア散文」(一九八一年)〔116〕は一九六五年以来レニングラード、ならびにレニングラード州を中心とする子供たちから集めた二〇〇の「怪談」を分析したもの、И・B・サヴィトヴァの論文(一九八二年)〔399〕はアルハーンゲリスク州で一九七五―七八年に収集した資料にもとづくもので遊戯ジャンルの現状を伝えてくれる。

そしてこのような研究段階を象徴するかのとき二つの動きがあった。ひとつは、A・H・マルトウイノヴァが論文「ロシア民衆の子守歌と農民の習俗」(一九七七年)〔253〕によって博士候補資格を得たことである。彼女は、未発表のテキストを含め知りうる限りの子守歌のテキストの分析を通じて、この歌の分類の問題(一九七四年)〔251〕、子守歌に見る農民生活、特に子殺しの風習の「反映」の問題(一九七五年)〔252〕などを扱っており、前記の資格取得論文はそれらの集大成である。マルトウイノヴァの仕事はまさにこれからの子守歌研究、ならびに子供フォークロア研究にとって欠かせぬものとなることだろう。⁽¹³⁾

第二の動きは、Г・C・ヴィノグラードフの未刊論文「子供のフォークロア」が発表されたことである(一九七八

年)〔94〕。一九二〇年代後半は、子供のフォークロアに関する研究にとっては重要な、一時的とはいえ大きな時代であり、言わばその時期に子供が「発見」されたと言っても過言ではないのである。そしてその仕事を担ったのが、O・H・カピーツァとΓ・C・ヴィノグラードフの二人であった。カピーツァは、一九二七年にロシア地理学協会内に子供のフォークロア・習俗・言語に関する委員会を創設、この委員会の活動報告集として論文集『子供の習俗とフォークロア』(一九三〇年)〔183〕を編集したほか、著書として『子供のフォークロア』(一九二八年)〔182〕も残している(カピーツァの仕事に関してはΓ・Γ・シャポヴァーロヴァがすぐれた紹介をしている〔527〕)。一方、アザドーフスキイとともに「シベリア・グループ」の代表であったヴィノグラードフは、カピーツァと同時期に『子供のフォークロアと習俗』(一九二五年)〔92〕、『ロシアの子供フォークロア』(一九三〇年)〔93〕を発表している。これら二人の仕事は革命前の研究の総括であると同時に、新たな社会と現実の中に置かれた子供文化の「変形」に対する強い問題意識にもとづくものであった。

今回、先のマルトウイノヴァの手で発表されたヴィノグラードフの論文は、第二次大戦前に『ロシア・フォークロア』三巻本のために執筆され、その後長い間見つからなかった原稿がロシア文学研究所の手稿部門で発見されたもの。論文は採集と研究史、にはじまり、「子供フォークロア」の概念、起源、その詩学の重要な側面、存在の条件と演者、口承文芸としての子供フォークロア、といった具合に、このジャンルの問題の全体をほぼ余すところなく論述しており、視野の広さと洞察の深さの点で現在もなお価値を失わぬものである。

そしてさらに注目すべきことは、ヴィノグラードフやカピーツァの仕事の中に明確に見ることができた子供のフォークロアの、いわば場としての「習俗」(ブイト)の研究への視点が見直されていることである。このことは、オリナらの論文「学際研究の対象としての現代の子供のフォークロア」(一九八三年)〔308〕にうかがえるし、より明確

な形ではH・C・コーンによる「子供の民族学」の提唱（一九八一年）〔199〕として具体化しつつあると言えよう。そうした呼びかけと方法的問題提起は、一部では成果を生んでおり、アジア諸民族の子供の養育と社会化を扱った論集『子供の民族学』全二巻（一九八三年）〔533〕が刊行されている。ロシアについてはこれからの成果が待ち望まれるところである。

7、労働のフォークロア

時に現代のフォークロアと同義で用いられる労働のフォークロアについては、後述する動きを除いてさして目立った仕事はなかった。一九六五年にB・Γ・バザーノフ編の論文集『ロシアの労働者の口承詩』〔482〕が刊行され、その後、革命前の時期を対象としてO・B・アレクセーエヴァがすぐれたモノグラフ『ロシア労働者の口承詩』（一九七一年）〔13〕を出版し、その中で「労働のフォークロア」の概念規定を行なって以来、それらに匹敵するまとまった収集ならびに理論的考察を含めた研究は行われていないと言えよう。ただシベリア地域についてのテキスト収集として、Л・П・クジミナーの編集になる二冊『シベリア労働者の民衆詩』（一九七四年）〔219〕、『シベリア労働者の民衆詩創造』（一九七七年）〔219〕の刊行は重要な意義を持つ。

この二冊のテキスト集に対して好意的な書評を記しているH・C・ポリシチュークは、長年にわたってウラル地方の労働者の文化を民族学的に調査してきた。その成果は、やはり長期間このテーマに関わってきたB・Ю・クルビャーンスカヤとの共著になる『ウラル鉱山労働者の文化と習俗（一九世紀末—二〇世紀初頭）』（一九七一年）〔216〕、この二名のほかさらに二人が加わった『ニージニイ・タギールの鉱夫と冶金工の文化と習俗（一九一七—一九七〇年）』（一九七四年）〔217〕として公刊された。これらはたんに口承文芸のみならず、それをも含んだ労働者の文化全体を記

述しようとしたもの。その記述にとって労働者の口承文芸が持つ大きな意義については、ポリシチュークの「ロシア労働者の労働と習俗の条件の研究資料としての労働者のフォークロア」(一九七五年)〔336〕に詳しい。

ポリシチューク、クルビヤーンスカヤによって開拓されつつある労働者の民族学という領域は、今後隣接分野との協力によってより多くの成果を生むものと思われる。例えば、首都ペテルブルグ創設期の一八世紀前半における首都労働者の実態に関するJ・H・セミョーノヴァのモノグラフ(一九七四年)〔411〕、前世紀末から今世紀初頭の労働者の、主として労働と余暇、俸給、食事、住居、生活条件などを中心とした生活様相を多数の統計値を利用して記述したЮ・И・キリヤーノフのモノグラフ(一九七九年)〔188〕などをほんの一例として、労働者の歴史に関する研究は革命以後の長い伝統を持っており、それらの成果は、労働者のフォークロア研究と民族学にとって多くの資料を提供することになろう。

8、フォークロアの言語学的研究

ロシア・フォークロアの言語学的研究に移ろう。この分野を代表する研究者のひとりで、最近『現代ロシア語方言の語彙』(一九八二年)〔311〕を著わしたИ・А・オソヴェーツキイは、文学作品とフォークロア作品を言語レヴェルで比較した「現代ロシア詩の言語と伝統的フォークロア」(一九七七年)〔309〕、またプリーナ、婚礼歌、抒情歌の言語学的分析を行った「韻文フォークロアの言語に関する若干の観察」(一九七九年)〔310〕を発表している。プリーナの韻律に関してはM・Л・ガスパローフの論文(一九七八年)〔104〕が詳しい。

フォークロア作品に対するシンタクスのレヴェルでの研究としては、いくつかのまとまった仕事が公刊された。ロシアと白ロシアの昔話を素材としたB・И・ボルコーフスキイ『昔話の統辞論』(一九八一年)〔76〕、諺を材料とし

た3・K・タルラーノフ『ロシアの諺の統辞論概説』(一九八二年)〔457〕、また「ヴォローネシ・グループ」の仕事として、E・B・アルチョーメンコの『芸術的構成から見たロシア抒情民謡の統辞論的構造』(一九七七年)〔29〕とA・T・フロレーンコの『ロシア抒情民謡の詩的表現』(一九八一年)〔503〕が最新のすぐれた成果である。このほかに論文集として、ペトロザヴォーツク大学から出版された『ロシア・フォークロアのジャンルの言葉』(一九七九年)〔541〕がある。

9、文学とフォークロア

「文学とフォークロア」と呼ばれる分野は、特にロシア文学にはフォークロアに対する強い親近性がみられるが、この両者の相関関係を追求するものである。個々の作品ならびに作家に対するフォークロアの影響を指摘する試みは、最近においても盛んに行われていると言える。そうした成果としてまずあげることができるのは次の三つの論文集である。第一に、『ロシア・フォークロア』第一八巻(一九七八年)は「スラヴ文学とフォークロア」というタイトル下に、プーシキンの「オネーギン」、A・B・スホヴォーロコビリンの「タレールキンの死」、J・H・トルストイ、チェーホフ、K・J・パリーモント、エセーニン、J・レオーノフなどの作品とフォークロアの関わりを扱った論文を収録する。これと同年に刊行された『神話・フォークロア・文学』(一九七八年)〔273〕は、ドストエーフスキイ、レスコーフ、ブローク、エセーニンとフォークロアの関連を論じたものを収める。そして第三に『ロシア文学とフォークロア』(一九八二年)〔370〕は、同シリーズの前二者の続篇で一九世紀後半を対象として、ドストエーフスキイ、サルトゥイコーフ、シチエドリイン、メーリニコフ、ペチュエルスキイ、Γ・И・ウスペーンスキイ、六〇年代のルボルタージュ作家、またネクラソフ、アポロン・グリゴリエフ、A・K・トルストイ、ニキーチンらの詩

人、オストローフスキイとスホヴォーロコヴィリンといった劇作家を取りあげている。

以上あげた三つの論文集以外にも、この分野を対象とする仕事は数多く枚挙のいとまがない。単行本としては、メルズリャコフ、ツイガノフ、A・コリツォーフ、プーシキン、レールモントフといった一八一―一九世紀前半の詩人と民謡との関わりを論じたA・M・ノヴィコヴァの著書（一九八二年）〔295〕、革命前から二次大戦期まで活躍した作家B・Я・シシコフとフォークロアの問題を扱ったB・H・コーチエトフの著書（一九八一年）〔204〕、少々古いがA・И・マリューチナの著書『B・Γ・コロレンコのシベリア物語とその民衆詩的基礎』（一九六二年）〔244〕、またB・M・シデーリニコフの『作家と民衆詩』（一九八〇年）〔47〕とД・M・モルダーフスキイの『歌も詩も』（一九八三年）〔276〕はともにこれまで発表されたものを集めた論文集だが、現代詩人も含めて、ロシア・ソビエトの作家・詩人がフォークロア世界といかに深く交わっているかを示すものとなっている。さらに、少々異質なものではあるが、Ю・Д・レーヴィン『ロシア文学におけるオシアン』（一九八〇年）〔227〕もあげておくべきと思われる。このモノグラフは、文学とフォークロアとの関わりを直接扱ったものではなく、むしろ比較文学史の枠内に収められるべきものである。しかし、かつてアザドーフスキイが『ロシア民俗学史』の中で適確に指摘したように、オシアンならびにその受容期におけるロマン主義的雰囲気とロシアのフォークロアとの関連という問題は、一方でキルシャ・ダニロフ編『中世ロシア詩』中のブイリーナとオシアンの歌謡との類縁の問題などともからんで、民俗学史の上でもきわめて重大なテーマである。したがって今回のレーヴィンの著書は、これまで未開拓であったオシアンのロシアにおける受容史というテーマに正面から取り組んだ点だけでなく、民俗学史ないし文学とフォークロアの問題の上でも大きな意義を持つものと言えよう。

これら著書以外に、目についた論文としては、ネクラソフの作品と農民のユートピアを論じたB・B・メリグノ

17 (一九八〇年)〔260〕、一九世紀初頭のロマンスと民謡の関わりを扱った T・M・アキームヴァ (一九八〇年)〔9〕、M・M・ブリーシピン作品に関する П・C・ヴィーホツェフ (一九八〇年)〔100〕、И・A・ブーニンの作品についての Г・M・アターノフ (一九八一年)〔32〕、A・A・アフマトヴァの詩におけるフォークロア伝統を論じた H・Ю・グリヤカロヴァ (一九八二年)〔123〕、ゴーゴリのフォークロアによせた A・B・サムイシキナ (一九七九年)〔406〕、また一九二〇年代の散文における「神話創造」の問題を Л・M・レオーノフ、A・M・レーミゾフ、B・A・ピリニャークだけでなく外国の作家をもあげて論じた B・Г・チェボタリョーヴァ (一九八一年)〔506〕など。また B・Г・バザーノフは、革命期の前後に活躍した「農民詩人」H・A・クリューエフと C・A・エセーニンの作品を取りあげて、そこに見られるフォークロアとそのシンボリズムの問題をいくつかの論文で論じている (一九七八、七九、八〇年)〔38・39・40〕。

最後に、文学とフォークロアの関わりを理論面で考察した仕事として、Д・H・メドリシ『文学とフォークロア伝統』(一九八〇年)〔258〕、У・B・ダルガート『文学とフォークロア』(一九八一年)〔140〕の二冊が刊行された。

10、民俗(族)学研究史

ロシア民俗(族)学の研究史を全体として論述した仕事とえば、かつて革命前に A・H・ブワイピンが著わした『ロシア民族学史』全四巻〔359〕をはじめとして M・K・アザドーフスキイの『ロシア民俗学史』(一九五八、六三年)〔2〕、C・A・トーカレフの『ロシア民族学史』(一九六六年)〔463〕のほか、シベリア地域を対象とした Я・P・コーシェレフ『シベリアのロシア民俗学』(一九六二年)〔205〕があげられるが、最近の仕事としてこれらに匹敵するものは発表されなかった。トーカレフは『民族学史』(一九七八年)〔464〕を刊行したが、これは一九世紀半ばま

でのヨーロッパの民族学通史であり、さらに彼は『外国民族学史』(一九七八年)〔465〕も発表している。

こうした中で注目すべきものとしてT・B・スタニユコーヴィチの『民族学と博物館』(一九七八年)〔448〕をあげなくてはならない。すでに著者は、自分の働く人類学・民族学博物館(クンストカメラ)の歴史を『ペテルブルグ科学アカデミーのクンストカメラ』(一九五三年)〔447〕として発表済みだが、今回はそれを全面的に増改訂し、他の博物館や研究機関についても記述している。長年にわたる調査と膨大な情報量の集大成となっている今回の著書は、十八世紀以降革命後までの資料収集・整理・収納と博物館の歴史をたどることによって、前記の民族(俗)学概史とは異なる形ではありながら、ロシア・ソビエト民族学研究の一面の通史となっており、高く評価される。また、クンストカメラは一九七九年一〇月に創立一〇〇周年を迎えたために、それを記念した論文集が『人類学・民族学博物館論集、第三五巻』(一九八〇年)〔407〕として公刊され、博物館内に収納されている世界各地の民族学資料のコレクションに関する論文が多数収められている(例えばP・A・クセノフオントヴァ「博物館収集の一七―八世紀日本の陶器」)。クンストカメラとともにレニングラード市の中であって、ロシア民俗(族)学研究の発展に重大な役割を果たしたロシア地理学協会は、一九七〇年に創立一二五周年を迎え、同年一二月に記念シンポジウムが行われている。その際の報告がようやく一九七七年に「ロシア民族学・民俗学・人類学概史」のシリーズの第七冊〔315〕として発表されたが、その中で注目すべきものとしてJ・M・サブローヴァ「ロシア地理学協会と民族学研究」、スタニユコーヴィチ「ロシア地理学協会の民族学博物館」、H・B・ノヴィコフ「ロシア地理学協会と民族学概史」のシリーズの第七冊〔315〕として発表された。ヴァーリスカヤ「ロシア地理学協会のベトラシェーフスキイ・グループ」など。この地理学協会の革命前の出版物中に見られる民族学関係のビブリオについてはЗ・J・チトーヴァの詳細な調査(一九八二年)〔462〕が便利である。

一九世紀後半のロシア民俗学の「黄金のフォンド」に関しては、いくつかの大きな仕事が発表されている。B・

Γ・バザーノフの『ロシアの革命的民主主義者と民衆認識』（一九七四年）〔37〕はH・Γ・チェルヌイシニエーフスキイ、H・A・ドブロリユーボフの民俗学への関心にはじまり、Π・И・ヤクーシキン、И・Γ・プリージョーフ、И・A・フジャコーフら民俗収集家の問題意識、さらに人々のうわさ、放浪するアジテーター、「民衆の中へ」運動と民衆のための本、といった問題を扱っている。同じ彼の著書『ロシア北部の歌謡』（一九八一年）〔41〕は一九四七年に出版された彼の『カレリアの民衆文学』をもとに、その後の論文によって全面的に改訂したものである。全体は、ブイリーナの故郷の発見、イリーナ・フェドソヴァ——儀礼と歌、ロシアにおける「カレワラ」紹介史、の三部から構成されるが、特にブイリーナの郷里としての北部地方がΠ・H・ルイブニコフにより「発見」され、その後一九二〇年代に「再発見」されていくプロセスを追った第一部は、ロシア民俗学全体にとつての北部の意味を考える上で重要である。

B・И・カルーギンの『ロシア叙事詩の主人公たち』（一九八三年）〔181〕は、全体の三分の一をブイリーナに登場する合計五八人の英雄たちをあげて紹介するが、残りの三分の二では巡礼歌がはらむさまざまな問題、И・H・トルストイ宅を訪れたブイリーナの歌い手B・Π・シチェゴリョーノクのこと、そして泣き女フェドソヴァを扱っている。全体として新たな指摘は少ないが、これまでの研究を丹念にフォローした手堅い紹介として貴重である。また、B・K・アルハインゲリスカヤの『ナロードニキ民俗学概説』（一九七六年）〔30〕はこれまでまったく未開拓であった領域に踏みこんだモノグラフとして高く評価されねばならない。すなわち、一八七〇年代の雑誌に反映したフォークロア研究をΠ・B・ザソジームスキイ、H・H・ズラトヴラーツキイ、A・И・エールテリといった知識人との関わりで論じたものである。以上あげた仕事は、一九世紀後半におけるロシア・フォークロアの「発見」と収集の意義が現在もなおきわめて大きなことをはっきりと物語っていると云ってよい。

個別のテーマを時代順にあげてみると、作家プーシキンの刊行になる雑誌「現代人」に反映された民族学のテーマを扱ったЛ・А・ファデーエフ（一九八二年）〔483〕、А・И・バラインジンの論文（一九七五年）〔45〕はロシア民俗学史上で「神話学派」として知られる研究者とその活動を概観する上で手頃である。Φ・И・ブスラーエフに関してはС・В・スミルノフの著書（一九七八年）〔433〕が刊行されたが、民俗学の面での仕事についてはあまり論じられていない。А・А・ポテブニャーの仕事は主要な言語学的著作が復刊されているが、ひとつだけあげるならば、『美学と詩学』（一九七六年）〔343〕は民謡のシンボル論、諺の詩的イメージについての考察を含んでいる。

А・H・アフナーシエフの昔話集についてはすでに昔話の個所で述べたとおりなので、ここではそれ以外の二点について記しておく。第一に、民俗・神話に対する彼の「神話学派」としての理論を集大成した『スラヴ人の詩的自然観』が、その一部を抜粋した形で『生命の樹』（一九八二年）〔34〕として出版されたことである。この出版は近年ソ連で高まっている『詩的自然観』の再評価^{〔14〕}、「神話ブーム」にもとづくものであるが、にもかかわらず『詩的自然観』の影響がブロック、エセーニンといった詩人など芸術家との関連で、そして現在では文学研究の一部のみで語られるのはどうしてであろうか。かつてアザドーフスキイは『詩的自然観』が『金枝篇』に匹敵し、しかも後者に先行したことが評価さるべき壮大な試みであるとしたが、こうした指摘そのものは受け入れられたとしても、必要なのは現在の民俗（族）学の立場からの再点検であると思われる。しかしながら以上の疑問を別とすれば、今回の『生命の樹』は文章選択の個所も適切で、『詩的自然観』に先行するアフナーシエフの諸論文をも検討しており、テキスト校訂もすぐれている。ロシア民俗学の古典をこのような形で簡単に手に取れるようになったこと自体はきわめて喜ばしいと言えよう。

アフナーシエフに関する第二点は、彼の生涯で不明であった部分が最近次第に明らかにされつつあることである。

これまで彼に関する伝記はЮ・М・ソコロフ、B・И・ポルドミーンスキイらによって記されてきたが、アフアナシエフの日記など主要な一次資料を含むアルヒーフがほとんど利用されてこなかったために、彼の生涯と思想的立場については不明な個所が多かった。近年、アルヒーフが点検され、Π・Π・ペカールスキイその他にあてた多数の書簡が公刊された〔173・174〕ほか、С・Γ・ラズーチンによって日記の解説にもとづいた分析（一九七三年）〔222〕も行われてきた。そしてさらには、これまでほぼ一定してきた、リベラルなインテリとしてのアフアナシエフ像自体への疑問も投げかけられ、例えば一八五〇―一八六〇年代の時代状況と「よりラディカルな」アフアナシエフ像とを結びつけたB・M・イヴァンコフの仕事（一九七四年）〔165〕なども現われている。アフアナシエフをあまりに「勇敢な政治的闘士」とする立場にはいささか問題が残るが、これまであまりにも不明の部分が多かったアフアナシエフの全貌が徐々に明らかになっていくことは、当然のことながら、おおいに歓迎したい。

A・H・ヴェセロフスキイについては、И・K・ゴールスキイの『アレクサンドル・ヴェセロフスキイと現代』（一九七五年）〔115〕が特にソビエト期の民俗学におけるヴェセロフスキイの理論的位置を論じている。B・И・ダーリの『ロシア人の諺集』が復刊されたことは先に述べたが、一八三〇年代から五〇年代にかけて彼が創作した物語が選集の形で出版された（一九八三年）〔141〕。これは文学者としてのダーリの仕事ではあるが、シエミャーカ裁判の話など昔話の改作も含まれており、一八三〇年代前半期のプーシキンをはじめとした昔話創作の動きを知る上で役立つものである。このことと関連して、ダーリの民俗学関係の論文が復刊されることが望まれる。

作家でありながら民俗学の分野でも多くの仕事を残しているС・B・マクシモフの『選集』（一九八一年）〔242〕が出版されたことも重要である。ここには『北方の一年』『シベリアと徒刑』『名言集』『悪魔・妖怪・精霊』といった民俗学的意味を持つ代表的な彼の仕事からの抜粋が収められている。今後、膨大な量を誇る彼の仕事は民俗学史の

上でもおおいに見直されるものと思われる。また、農民詩人・ロシア民衆詩人として親しまれるA・B・コリツォーフの伝記が「偉人伝文庫」シリーズの一冊として、H・H・スカートフの著で刊行された(一九八三年)〔423〕。さらに、一八六〇年代に活躍した民俗学者で作家であり、ウラル・コサックに関して貴重な資料を残しているK・H・ジュレズノーフに関するH・M・シチュルバノフのモノグラフ(一九七八年)〔531〕が特に目についた。

今世紀にはいるならば、北方の昔話、民衆劇、ブイリーナ研究に大きな仕事を残したH・E・オンチュコーフについてはT・Γ・イヴァノヴァの「H・E・オンチュコーフと彼の学問的遺産の運命」(一九八二年)〔170〕が特筆に値する。そこでは、これまでその仕事を持つ重要性は指摘されてきたがごく断片的にしかられてこなかったオンチュコーフの仕事の全体像が描かれ、彼の編集した主たるテキスト集の意義と問題点が現代から見た批判点も含めて述べられている。またオンチュコーフの生涯に関しても綿密な調査にもとづいた記述が行われている。しかし彼の「不幸な最期」に関しては明確には記されていない。ついでに言えば、オンチュコーフに関してA・M・ナレーピンが論文を書きあげ、現在、原稿発表段階にあって「ロシア民族学・民俗学・人類学概史」シリーズの中で公刊される予定であるとの情報を得たが今もって発表はない。また、フォークロアの語り手でありながら、同時に採集者としても活躍したO・Θ・オザロフスカヤについてはA・モスクヴィーンのルポルタージュ(一九七五年)〔282〕がある。さらに、ロシア民俗(族)学とは直接関わらないが、革命前に活躍し、現在のソ連邦科学アカデミー付属民族学研究所にその名を冠せられた地理学者H・H・ミクルーホリマクラリーの伝記がB・H・プチーロフによって書かれた(一九八一年)〔355〕。ミクルーホリマクラリーの著作の一部は最近でも英語版〔547〕、ロシア語版〔263〕で出版されているが、近く彼の『全集』全七巻が刊行予定(一九八七年以降)である。これは一九五〇―一五四四年に刊行の五巻著作集にかわるもので、それ以後の新資料や研究により(現在、レニングラードにて「マクラリー研究会」が続行中)完全な

版となるといい、死後百年にあたる一九八八年には『研究・資料篇』が刊行される予定であるという。

最後になったが、ロシア・ソビエトの民俗(族)学史に関わる貴重な資料集として次の二冊の名をあげておく。それは『ロシア民俗学の歴史より』(一九七八年)〔173〕とその続篇とも言える『ロシア・ソビエト民俗学の歴史より』(一九八一年)〔174〕である。主として未刊資料の活字化を目的とするこのシリーズの二冊には、すでにそれぞれの個所で言及したフォークロアのテキストならびに研究の公刊(A・H・ゲルマノヴィチによる一八世紀諺集、アフナーシエフ、アザドーフスキイの書簡、Γ・C・ヴィノグラードフの「子供のフォークロア」など)のほか、北部の民族学者Π・C・エフィメンコの自叙伝、「ロシア・フォークロア集成」に関するA・H・トルストーイの言及、E・Γ・カガロフ「儀礼の言語的要素」といった、未発表資料が掲載されており、研究史上欠かせぬものとなっている。このシリーズが永長く続くことが強く切望される。

11、方法論・書誌・教科書

上記のフォークロア理論をめぐるさまざまな議論と模索に対応する形で、フォークロア研究の方法論についても大きな振幅が見出される。もっとも、実践的な収集案内は教育上の必要からであろう、主として大学研究者の手によって各種のものが発表されている。H・H・サーヴシキナ(モスクワ大学)の『フォークロアの収集について』(一九七四年)〔40〕、同じくモスクワ大学のЮ・Γ・クルグロフ『民俗学実習』(一九七九年)〔23〕がその好例であり、ゼミナール学習用の文献案内としてはT・M・アキモヴァ他による『ロシア民衆詩創造』(一九八三年)〔10〕が各ジャンル毎にテーマを列挙する形で文献を紹介しており、手頃なガイドブックとなっている。これらはいずれもフォークロアを口承文芸としてとらえ、伝統的なジャンル分類にもとづいて書かれたもの。一方フォークロアをより広く、

音楽や遊戯、舞踊などをも含むものとするB・E・グーセフの考え方⁽¹⁵⁾にもとづいて『ロシア民俗学術語集』(一九七八年)〔48〕が発表されており、おおいに参考になる。

スラヴ・バルカン学研究所がボレーシエ地域を長期にわたって総合的な民族学調査を行っていることはすでに述べたとおりだが、このフィールドワークのプログラムはこれまでいくつか活字化されている⁽¹⁶⁾。最新のものはA・B・グーラ他によって作成されているが〔128〕、これは、家族儀礼・歳時儀礼・産業サイクルの儀礼・自然観の四つに大別され、さらに付録に六五の質問が添えられている。

こうした対象の広がりや視点の精密化にもなった形で、各地に散在する資料ないしは保存されている文書資料の整理と書誌作成が活発化しているのは当然であろう。すでに述べた、ロシア・フォークロアの収集と文書保管の調整に関する全ソ学術協議会の開催はその意味でも注目すべきものである。地域別に公刊された書誌をあげるならば、B・A・バーヴロヴァ編『ヴォーネシ地方のフォークロア』(一九六五年)〔317〕、M・H・アンドレーエヴァ他編『ニジネゴロド地方のフォークロア』(一九七一年)〔16〕、『ゴーリキイ大学ロシア文学講座のフォークロア文書資料』(一九七六年)〔69〕など、また白ロシアについてはM・Я・グルンブラト編『白ロシア民族学、民俗学(一九四五—一九七〇年)』(一九七二年)〔122〕がある。

テーマ別の文献目録としては、A・M・ノヴィコヴァ他『フォークロアと文学、ゼミナル』(一九七八年)〔296〕はタイトルの通り、ロシア文学の作品とフォークロアの関連を論じた研究文献を作家・作品別に配列しており、便利である。少々古いがB・M・シデーリニコフ編『ロシア民謡、書誌一七三五—一九四五年』(一九六二年)〔416〕があるが、ある意味では後者を大幅に発展させたものがЛ・M・バツネル他による『ロシア民俗音楽。楽譜索引、第一部』(一九八一年)〔56〕である。これは革命前から一九七三年までの民謡集の書誌だが、各項目に詳しい内容が記さ

れている。第一部はAからΠまでの一一九一点を扱っている。また、書誌ではないが、昔話の筋索引としてИ・Г・バーラグ他により『題材の比較索引。東スラヴ昔話』(一九七九年)〔47〕が刊行された。これについては昔話の項で言及した。また、『革命以前のロシアにおけるスラヴ学』(一九七九年)〔424〕はフォークロアのみに関わらず、広くスラヴ文献学一般に関わる研究者小辞典であるが、フォークロア研究者も多数選択されている。例えばE・B・アニチコフ、A・H・アフナーシエフ、A・H・ヴェセローフスキイ、A・Φ・ギリフェルジーング、O・Φ・ミールレル、Π・H・ルウイブニコフ、И・M・スネギリョーフ、H・Φ・スムツォーフ、A・A・ポテブニャー、И・A・フジャコーフ、A・A・コトリャレーフスキイ、M・H・スペラーンスキイ、Φ・И・ブスラーエフ、E・B・パールツフ、H・A・ヤンチュエークなど。各項目には研究者のごく大まかな生涯のアウトライン、主要な著作、その研究者ならびに彼の仕事に関する研究文献、さらに未刊資料の所在について明記されており、役立つ。近年活発化しているスラヴ学という大きな枠組の中での研究を、その研究史的側面から見直す上でも本書の意義はきわめて大きいと言えよう。

しかし何と言ってもロシア・フォークロアの書誌について欠かせぬのが、ロシア文学研究所フォークロア部門によってこれまで刊行されてきた『ロシア・フォークロア、書誌索引』である。これまで刊行されたのは、一九四五―五九年分(一九六一年刊)、一九一七―四四年分(一九六六年)、一九六〇―六五年分(一九六七年)、そしてしばらくの中断をはさんで最新刊は一九〇〇―一六年の巻(一九八一年)〔389〕である。四〇〇〇点を越える文献を拾ったこの最新の巻は、文献配列のシステムの基礎ともいべきジャンル分類の点でこれまで刊行された三巻のやり方をそのまま受けついでいる(もっとも、革命以前の文献を対象するために「旧教徒のフォークロア」「囚人・流刑囚の歌」といったジャンルが作られている)。また、全体が「テキスト」「研究、論文、覚書」「教科書、書誌的一覧」の三部で

構成されていることもこれまでのものと同じである。一方、この巻の目立った特色としては、文献の典拠を実に広範な刊行物に求めていることである。「民族学評論」「生ける過去」といった民俗学雑誌は当然だが、「ニーヴァ」や「アポロン」といった一般誌や「ヨーロッパ報知」「神学報知」、そして特に価値あるものとして各県で、また教会管区で発行されていた「通信」、各県の文書委員会や統計委員会の報告集などからも関連文献が選択されており、その価値はきわめて大きい。引き続き一九六六―七五年の文献を扱った巻も近く刊行の予定である。⁽¹⁷⁾

すでに前稿でも述べたように、この『ロシア・フォークロア』書誌シリーズは研究者必携のものであり、書誌作成の責任担当者であるM・Я・メリツ女史の丹念な仕事は心からの敬服に値する。彼女はロシア文学研究所を退職した今もこうした書誌作りの仕事を継続しているが、具体的な作業を担当しているのはA・H・ローゾフとT・Γ・イヴァノヴァの二名である。書誌を作成するために特別に一部屋があてられており、研究員は随時自由に、ごく最近までの文献カードを検索できるようになっている。⁽¹⁸⁾

最後に、主として大学生を対象とした教科書(概説書ならびにアンソロジー)、ならびに一般向けのフォークロア案内書について述べておく。一九七八年以降に出版されたロシア・フォークロアのアンソロジーとしてはIO・Γ・クルーゴフ編『ロシア民衆詩創造』(一九八一年)(215)、またテキストの出典記事が不十分である点が難点である『おい、勇者たちよ』(一九七九年)(113)が「若き親衛隊」出版所から刊行された。学部学生用の概説書として、A・M・ノヴィコヴァ編『ロシア民衆詩創造』(改訂第二版、一九七八年)(298)は初版(一九六九年)のブイリーナ、昔話、昔話以外の散文の項を全面的に書きかえたもの。H・И・クラフツォーフとC・Γ・ラズーチン共著『ロシア口承民衆創造』(改訂二版、一九八三年)(206)は各ジャンルを扱った第一部、その歴史的發展を論じた第二部からなるが、現在までのところではこの種の試みとしては最も詳しいもの。また、モスクワ大学グループのB・П・アニー

キンとЮ・Γ・クルーグロフによるもの（一九八三年、〔25〕）も刊行された。さらにアニーキンの著書として『ロシア口承民衆創造（フォークロア）、方法的指示』（一九八一年）〔21〕もある。大学の文学部通信学生向けとされた本書は百ページ足らずの分量ながら、各ジャンルの問題点を研究の方法論や文献案内も含めながら手際よくまとめている。しかしながら、以上あげたものはか最近いくつか相次いで発表された教科書類が全体として多くの問題をはらみ、ロシア・フォークロアの「統一像」をもたらさないことは、現代の民俗学研究そのものの状況を象徴的に示すものと言えよう。⁽¹⁹⁾例えば上に言及したクラフツォーフとラズーチンの共著になる教科書は、現在の時点では最良のものとはいえ、叙述の図式的で無味乾燥であること、全体としてのまとまりに欠くことは認めざるをえない。かつてユーリイ・ソコロフが発表した教科書『ロシア・フォークロア』（一九三八、四〇年）〔41〕は、その方法論的立場やその後の研究の進展からすれば、多くの問題点を含むにもかかわらず、全体としての叙述の流れ、構想、叙述の具体性などの点ではるかにまとまっており、良かれ悪しかれ、このソコロフの名著に匹敵するものは書かれていないのが現状であろう。

そうした教科書類のレヴエルの低さのかわりとも言うように、ロシア・フォークロアの研究に長年関わってきた研究者によるエッセー風覚書が何点か発表されており、それらは民俗学への格好の誘い、すぐれたオリエンテーションとなっている。一九八〇年に死亡したЭ・В・ボメラインツェヴァ『ロシア・フォークロア論』（一九七七年）〔38〕、音楽民俗学の分野で知られるクラコフスキイ夫妻の『民衆の知恵を求めて』（一九七五年）〔22〕、また、すぐれたフィールドノート『黄金の泉のほとりにて』（一九七五年）の著書Н・П・コルバコーヴァによる一九四、五〇年代の調査日誌〔195・196〕や、民謡の個所で言及した『歌謡と人々』（一九七七年）〔194〕などもすぐれた民俗学案内として読まれるべきだろう。これらの著者がいずれも徹底したフィールド・ワーカーであることも興味深い。また、こう

したガイドブックの伝統の下で書かれたB・C・バフチーン『ブイリーナから親決め歌まで』（一九八二年）〔54〕は、「児童文学」出版所から発行されたものとはいえ、フォークロアのほぼすべてのジャンルにわたって論述しており、参考になる個所が多い。

IV 新たな視点から

本章では前章までで述べることのできなかった、最近の注目すべき動きを以下の三点にわけて論述することとする。それは、儀礼・神話研究、都市の民族学、およびトータルな農民生活研究の三点であり、これらはどれも言わば脱ジャンルの動向であると言ってもよい。

1、儀礼・神話研究

一九六〇年代後半以降、儀礼研究が特に婚礼研究を中心として急速に発展し、多くの成果をあげていることは、すでに前稿で記したとおりであり、その傾向はますます強まりつつある。ロシアを扱ったものではないが、一九七三年から刊行されてきた『他のヨーロッパ諸国の歳時風習と儀礼』は、冬期（一九七三年）、春期（七七年）に続き、夏・秋期（一九七八年）〔180〕と「風習の歴史的根源と発展」（一九八三年）〔180〕が刊行されたことは、儀礼研究全体の昂まりを象徴したものである。そしてこの論集の責任編集者であるC・A・トーカーフが論文「民族学研究の対象としての風習と儀礼」（一九八〇年）〔466〕において儀礼研究の重要性を再確認したことは、これからも儀礼研究が多くの関心を集めていくことを示唆するものであろう。彼によれば、ここ二、三〇年間にソ連邦内で発表された無数に近

い儀礼研究は次の五つのカテゴリーに分類できるといふ。(一)純粹に記述的な仕事、新旧儀礼の單純なる記述、(二)プロバガンダの方向を持つ大衆向け文献、「市民・民間の」新しい儀式への関心を表現したものも含む、(三)文化的・社会的現象としての習俗・伝統の社会学的研究、(四)習俗・儀礼の比較・民族学的分析、これは民族起源や民族間の結びつきの問題に光をあてることになる、(五)儀礼の形式的・構造主義的(記号学的)分析。ここで(二)や(三)、特に(三)などは儀礼に対する「ソビエト的」関心であり、他にあまり例を見ないものであろうが、ここで我々が問題としたいのは、何と言つても(四)と(五)であろう。そして(五)が独立して一項をあてられているのは、やはり近年の動向の中で「構造主義的」儀礼研究が無視できぬものとなったことを明瞭に示すものである。

ところでロシア・フォークロアの研究について見るならば、儀礼・祭という対象は、これまで中心的だった口承文芸学の枠内では「儀礼歌」「歳時歌」、あるいは儀礼と結びついた迷信や民間信仰といった形でごく断片的にしか扱われてこなかった。そうした状況に対する反省はさまざまな形で行われているが、その中のひとつはB・Kソコロウフによる「儀礼フォークロア」概念の提唱(一九八一年)(444)であろう。そしてこの提唱にもとづいた具体的な成果としては、彼女自身の『一九一—二〇世紀初頭ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人の春・夏歳時儀礼』(一九七九年)(443)があり、同じく彼女の責任編集になる論文集『儀礼と儀礼フォークロア』(一九八二年)(302)をあげることでできよう(もっとも後者については、収録された十五篇の論文は対象のみならず方法もまったく異なっており、「儀礼フォークロア」の統一像を得ることはいささか困難である)。しかしながら、『春・夏歳時儀礼』に明確に示されるように、「儀礼フォークロア」というタームの具体的骨格は旧来の儀礼歌研究と、きわめて時代おくれの農耕呪術論にもとづく單純化された儀礼解釈とを組み合わせたものにすぎないのであり、そこには何ら新しさは見出せない。別の言い方をすれば、『春・夏歳時儀礼』の巻末に掲げられた文献目録は実に多くの文献をカバーしており、しかも

多くのアルヒーフ資料が利用されているにもかかわらず、個々の儀礼解釈はすべてアブリオリに提出されており、個別資料を徹底的に点検しその中から帰納的に命題を導き出すとする方向はまったく認められないと言えよう。

それに対して、徹底的な文献調査あるいはフィールド調査にもとづき、それを通して得られた資料によって儀礼の記述と解釈とを行なおうとする動きがあるのは当然である。H・Γ・ガブリリニクは『精神文化現象のカルトグラフィ』でウクライナの出産儀礼を具体的データとして、儀礼研究の方法としてのカルトグラフィが有効であることを示そうとした(一九八一年)〔103〕。またT・A・ベルンシュタムは、「カッコウ洗礼・葬礼の儀礼」(一九八一年)〔63〕、「娘髪との別れの『儀礼』」(一九八二年)〔65〕、「ロシア・フォークロアと儀礼的遊戯におけるまり」(一九八四年)〔67〕、またB・A・ラービンとの共著論文「ヴィノグラージェ——歌と儀礼」(一九八一年)〔68〕など相次ぐ精力的な仕事の中で、徹底的なカルトグラフィと文献調査にもとづきながら、「シンボリックな」儀礼解釈の可能性を打ち出そうとする。そしてそこには、ロシア民衆文化の根源ならびに東スラヴ人の民族起源の問題へ向かおうとする方向がはっきりと感ぜられるのである。なお「カッコウの洗礼と葬式」の儀礼については、B・A・スミルノフの論文(一九八一年)〔430〕があり、この儀礼と水浴びの際の儀礼歌との比較が行われている。

ポレーシエ地域に関する集中的な言語学・民族学的調査がスラヴ学・バルカン学研究所によって押し進められていることはすでに繰り返述べたとおりであるが、その地域に対する徹底的なフィールド調査は儀礼研究の上で多くの成果をもたらしている。例として、葬式に関するO・A・セダコーヴァ(一九八三年)〔409〕、O・A・テルノーフスカヤは雨乞い儀礼をテーマに博士候補資格を得たが(一九七七年)、同じ彼女の収獲儀礼に関する論文(一九八一年)〔459〕、また家畜儀礼に関するA・Φ・ジュラヴリョーフ(一九七八年)〔159〕(彼はこのテーマで一九八二年に博士候補資格を取得した)などがあげられる。

Φ・Φ・ポロネフは、シベリアの奥バイカル地域に住む旧教徒セメーイスキイ派のフィールド調査の結果を一九七五年に『セメーイスキイ派の歳時風習と儀礼』〔74〕として発表したが、その続篇で、より統合的なモノグラフと言える『奥バイカル・セメーイスキイ派の民間暦』〔75〕が一九七八年に公刊された。これはこの旧教徒グループの民族誌とその研究史を素描した第一章、暦の中の移動しない部分と移動部分にそれぞれ第二、三章をあてた三部構成で、セメーイスキイ派の歳時暦がロシア地域の伝統的な暦を強固に残していることを明らかにした労作である。「シベリア学派」の仕事として意義が大きいばかりでなく、宗教異端派の民族誌という、これまで未開拓の領域を切り拓いたものとして価値が大きい。

さらにH・H・ポクローフスキイの論文（一九八一年）〔32〕は、歳時儀礼に対する宗務庁の態度を一八世紀の文献資料によって明らかにした。文献調査の徹底化が新たな儀礼研究の方向を打ち出した好例である。

儀礼の中でも婚礼に対して多くの関心が向けられ、その結果として多数の成果が生まれていることについては、すでに別の個所で紹介したとおりである〔56〕。それとの重複は避けねばならないが、何と言っても特筆すべき仕事はK・B・チストーフとT・A・ベルンシュタムの編になる論文集『ロシア民衆の婚礼』（一九七八年）〔385〕であろう。これはおそらく、婚礼研究のあらゆる問題を内包し、しかも最良の成果を収めた論集であると言ってよい。まず序においてチストーフは「婚礼研究の重要課題」と題して、研究上の問題点を一一項目にまとめている（これについても拙稿〔56〕を参照）が、そこで注目すべきは婚礼研究が民族学に対して「開かれた」ものとなるべきであるとする彼の主張である。すなわち彼は、婚礼という対象が象徴的・呪術的・遊戯的な儀礼行為、衣裳や住居装飾などの物質文化、言語と音楽のフォークロアという三つのレヴェルから構成され、さらには風俗や社会的・法的観念、家族関係や信仰との関わりの点からもとらえる必要があるとするのである。

こうしたチストーフの主張に沿った形で、論集『ロシア民衆の婚礼』に収録された仕事のほとんどは、これまでの婚礼歌研究を中心とした婚礼研究とはまったく異なった方向を示したものである。一六世紀の都市住民の婚礼の全体像を記述したM・Γ・ラビノーヴィチ、同じく都市の婚礼を一九世紀末—二〇世紀初頭の中央ロシア中小都市の場合について研究史的にまとめたΓ・B・ジルノーヴァ(彼女の研究成果は死後三年たつて一九八〇年に『過去と現在におけるロシア市民の結婚と婚礼』〔158〕として集大成された)、ポモーリエ地域の婚礼前の儀礼分析を行ったT・A・ベルンシュタム、婚礼後の最初の春に新婚夫婦を祝う儀礼ヴィユニーシニキに関する最初のモノグラフであるJ・A・トゥーリツェヴァ、そして婚礼の「構造的記述」を行おうとしたA・B・グーラ「北部婚礼の構造の解明の試み」とA・K・バイブリーンとΓ・A・レヴィントンの「東スラヴの婚礼の空間構成の記述に向けて」が注目すべきものとしてあげられる。このほか、論集にはシペリア、バルト、ウクライナその他の地域に住むロシア人の婚礼に関する論文、また衣裳その他物質資料に関する論文が収められており、全部で一五本を数える論文は、婚礼研究のこれまでの到達点をそのまま伝えるものとなっていると言つてよい。

この論文集のチストーフの序文ならびに一五の論文に体现化された婚礼研究の基本的な論点はそれぞれさらに展開されて、いくつかの成果として発表されている。グーラの「スラヴ婚礼とその用語の地域的性格づけの試み」(一九八一年)〔125〕はスラヴという規模で婚礼に関するタームを比較研究し、婚礼の比較・タイポロジーへの方向を探った基礎作業として注目すべきである。また、婚礼のカルトグラフィについてはチストーフ「儀礼と儀礼フォークロアのカルトグラフィの問題——婚礼の場合」(一九七四年)〔513〕にはじまって、A・K・バイブリーン「ロシア婚礼の地域研究に向けて」(一九七七年)〔42〕、J・C・グヴォーズジョヴァ他「婚礼のカルトグラフィの問題に向けて」(一九七八年)〔109〕がある。また婚礼の衣裳をめぐるのはJ・H・モートルトヴァの仕事(一九七八、七九年)〔277〕

278)のほか、以下で述べるΓ・C・マースロヴァの著書(一九八四年)〔255〕の第一章が最も体系立った記述を行っている。さらに婚礼の際の食物に関してはグヴォーズコヴァ(一九八一、八二年)〔107・108〕が周倒な資料調査にもとづいて婚礼研究のみならず儀礼食のタイポロジー的研究にとっても重要な視角を与えてくれる。このほか、Γ・Γ・シャポヴァーロヴァ「ロシア婚礼におけるダイアログ」(一九七八年)〔528〕も注目すべきである。

婚礼に関する個別地域研究をあげるならば、北部ポモリーエについては上述のベルンシュタームの論文以外に同じく彼女の「白海のポモリーエ沿岸、オネガ湖岸の婚礼」(一九七四年)〔61〕(この二つはまとめられて一九八三年に刊行されたポモリーエの民族誌〔66〕の一部となった)、また資料集『カレリア・ポモリーエのロシア婚礼』(一九八〇年)〔374〕があり、ちなみにカレリア人の婚礼に関してはЮ・Ю・スルハスコの『カレリアの婚礼』(一九七七年)〔456〕が徹底したフィールド調査と文献調査にもとづいた婚礼の詳細な記述を行っている。ブリヤーンスク州セフスク地区の『ヴォルガ中流域におけるロシアの婚礼』(一九八一年)〔161〕は多民族地域であるヴォルガ中流域の各地に分散するロシア人の婚礼を二〇〇地点の調査によって跡づけたもの、地方別に分化し存在する理由を一六、七世紀のロシア人入植に求めている。シベリア地域については、儀礼歌の個所であげたもののほか、プロズヴィツカヤ他の「シベリアにおけるスモレンスクの婚礼伝統」(一九七六年)〔349〕、一九六九年にすぐれた資料集『白海テレーク沿岸のロシア人婚礼歌』を発表した作家で民俗収集家であるЛ・И・バラシヨーフはヴォーログダ州の農村で採集した婚礼の記述を刊行する予定である〔373〕。また一九七〇年代のプスコフ州の婚礼を調査した成果であるЛ・М・イヴァシニヨヴァ他の論文(一九八〇年)〔171〕は現代における婚礼の状況を明らかにしている。

こうした婚礼研究ならびにそれを含めた儀礼研究全体の目ざましい発展の上に立って、儀礼と住居ないし衣裳との

相関を扱った二つのモノグラフが発表されたことは、ある意味で当然とは言え、十分特筆に値しよう。ひとつは、記号論的方法論に貫かれたA・K・バイブリーンの『東スラヴ人と儀礼と觀念における住居』(一九八三年)〔44〕である。民族学における住居の問題をめぐっては、J・H・チーゾヴァ(一九七六年)〔51〕が研究史と問題所在の整理を行っているが、バイブリーンの仕事はそうした住居民族学の成果を踏まえつつも、住居を儀礼ないし觀念との関わりでとらえ、しかもこの関わりを記号論の立場から分析したものである。ただし本書についてはかつて書評の形で紹介を試みたので〔56〕、ここでは記さない。そしてもうひとつは、Γ・C・マースロヴァ『一九一〇世紀初頭東スラヴの伝統的風習と儀礼における民俗衣裳』(一九八四年)〔25〕である。著者のマースロヴァはすでに前著『歴史・民族学資料としてのロシア民衆刺繍の装飾』(一九七八年)〔24〕にあって緻密な資料分析を行っているが、今度は民俗衣裳と儀礼との関連という、きわめて基本的でありながら十二分に論じられることの少なかったテーマを取り上げた。第一章で婚礼、第二章で葬式と出産儀礼、第三章で農業と結びついた風習・儀礼のそれぞれにおける衣裳を概観するといった全体の構成から明らかなどおり、全体の論述の手法はオーソドックスなものであるが、データはきわめて詳細かつ具体的で、アルヒーフも含めた使用文献も実に膨大である。おそらくはこの分野の研究に不可欠な基本文献となるのは疑いないであろう。以上二つの著書のほか、婚礼時の食物に関するモノグラフを発表している先述のグヴォーズジョヴァと同様の試みとして、A・B・ストラーホフ「ロシアの儀礼焼菓子(の歴史と地理から)」(一九八三年)〔45〕がある。これは法事とキリスト昇天祭の際の「梯子」型焼菓子を素材とした儀礼のカルトグラフィ・タイポロジー研究である。

儀礼と不可分に結びついた民間信仰・神話の領域に目を移すならば、J・A・トゥーリツェヴァの「一九一〇世紀の境目におけるロシア農民の宗教的信仰と儀礼」(一九七八年)〔46〕は概括的ながらも、日常生活における正教、

異教信仰の機能、民間暦の問題などの整理を行ったもの。同じトゥーリツェヴァは儀礼におけるスズメのシンボルリズムについてのすぐれたノートを記している（一九八二年）〔47〕、ウサギならびにイタチの民間信仰における意味についてはA・B・グーラの論文（一九七八、八一年）〔124・126〕が光っている。しかし民衆観念における動物のシンボルリズムに関する仕事として特筆すべきは、T・A・ベルンシュタームの「東スラヴ人における鳥のシンポリカ」（一九八二年）〔64〕である。ここで彼女は、ブイリーナ、昔話、婚礼歌といった口承文芸だけでなく、住居装飾や頭飾り、儀礼行為といった広範な対象を素材として、鳥のシンボルが年齢のシンボルリズム、婚礼ステータスによって区別されたグループのシンボルリズムにとって最も重要な役割を果たしていることを明らかにしている。このほかに、旧暦七月二〇日のイリヤの日と予言者イリヤ信仰を東スラヴの民間信仰とフォークロアの枠内でとらえたT・C・マカーシナ（一九八二年）〔241〕、Γ・Я・シミナ（一九八一年）〔419〕は、年間の農耕歳時暦その他に関連した言い伝え、予兆のテキスト三一四を天候、自然、季節、きのこ収穫、死者、夢、客などの項目別に整理している。ここに選択されたテキストは一九五八年から七七年にかけてアルハンゲリスク州で集められたもの。

一九八〇、八二年に刊行された全二巻の神話事典〔274〕はそのタイトルである「世界諸民族の神話」が示すように、ロシア・スラヴのみならず世界中の民族の神話を対象としたものだが、これはソビエトの神話研究の総決算とも呼べるものである。ロシア・スラヴに関連する項目が他とのバランスの上でわれわれにとって物足りないのは仕方がないが、この事典の出版がロシア・スラヴの神話研究の目ざましい進展と無縁であったはずはなく、ここ五、六年の枠内においても大きなモノグラフがいくつか発表されている。年代順に記すならばまずH・H・ヴェレーツカヤの『スラヴのアーカイックな儀礼の異教的シンポリカ』（一九七八年）〔90〕はスラヴ人の異教的他界観という大きなテーマに直面から取り組んだもの。考古学、民族学、民俗学の多数の資料を用いながら、「あの世」送りの儀礼のアーキタイ

プをある意味で「記号論的」に記述しており、著者のこうしたねらいはほぼ成功していると言える。

B・A・ルィバコーフの『古代スラヴ人の異教』(一九八一年)〔396〕は、考古学をはじめ中世ロシア史、民俗学など幅広い関連分野にわたる彼のほぼ半世紀にわたる研究の集大成である。彼の利用する資料は、考古学資料や年代記の記述はもちろん口承文芸テクストや儀礼、さらに木彫や民芸品の模様・装飾にまで及び、それらを縦横に駆使することによってキリスト教導入以前のスラヴ人の世界観を再構成しようとする。全体で十章からなる本章の各章タイトルをあげるならば、一、スラヴ異教の時代区分、二、記憶の深奥、三、石器時代・狩猟信仰の残滓、四、銅石併用時代黄金期、五、スラヴ文化の源流、六、原スラヴ人の農耕文化、七、女神・男神の誕生、八、出産の神々、九、ロシアの刺繍と神話、十、神話・伝説・昔話。細部にあつて問題とすべき点や解釈の単純な箇所は多いが、それはこうした大きなモノグラフとしては仕方のないことであろう。この点で議論の余地はあろうが、異教的神話の全体像をこれほどまでに大きな枠組でとらえようとした試み自体は評価されねばならない。

トルストイ夫妻による「スラヴ異教ノート」〔468〕は、ルィバコーフとはまったく異なった視点によって異教世界をとらえようとしたものであるが、やはりその枠組の大きさの点でルィバコーフの仕事に匹敵するものである。と言つてもいまだ未完であつて、これまで発表されたものは、彼ら自身の構想に従つてそのタイトルをあげるならば、一、井戸のそばでの雨乞い(一九八一年)、二、ポレーシエの雨乞い(一九七八年)、三、ポレーシエの最初の雷、四、ポレーシエの避難(一九八二年)、五、ドラガチュヴォその他のセルビア地区の避難(一九八一年)。このほかH・N・トルストイは単独で「スラヴ・デモノロジ・ノートより」(一九七四、七六年)〔467〕を発表している。異教ならびにデモノロジを扱った仕事はいずれも、長年にわたつて行つてきたポレーシエ地域のフィールド・ワークの成果を基礎としながら、スラヴ全体を視野にいたれた言語学的方法によるテクストの提示として大きな意義を有す

るものである。

モスクワ大学のB・A・ウスベーンスキイの『スラヴ古代の領域における文献学的探求』（一九八二年）〔481〕は、B・B・イヴァーノフとB・H・トポロフの『スラヴ古代の領域における研究』（一九七四年）〔167〕とまったく同様で、徹底的な言語学的方法による神話テクストの再構成の試みである。しかも後者が雷神ペルーンとその属性、竜との闘争、そしてペルーンをはじめとした神話主人公の変形ないしバリエーションの神格を素材としたのに対し、ウスベーンスキイはその試みを継承した形で聖者ニコラ信仰、ニコラと天使ミハイル、ニコラと異教家畜神ヴォロスとの関連を問題としている。本書後半の「補説」には、聖像画の名称としての「神」をはじめとして異教神や聖者に関する覚書二〇篇が収められており、これも多くの示唆を与えるものである。

今後の神話研究にとってきわめて重要な意義を持つであろう以上あげたモノグラフ以外にも、いくつかの価値ある仕事が発表されている。例えば、Я・E・ポローフスキイの『古代キエフ人の神話的世界』（一九八二年）〔77〕は短かいものながら初期スラヴ人の神話の全体を適確にとらえている。また、O・A・チエレパーノヴァ（一九八三年）〔507〕は、ヨーロッパ・ロシア北部における「神話的語彙」のタイポロジ的分析を行っている。著者は、かつてB・ボメラーンツェヴァが用いた「神話的ペルソナージ」（一九七五年）〔337〕の概念にもとづいて民間信仰や言い伝え、昔話に登場する「人格」を多数の資料から抽出し、それらを「民族言語学」（トルストイ）の立場から分析しようとする。北部という限定された地域のみを扱っているとは言え、そこがスラヴのアルカイックなゾーンであるとの問題設定、そして方言など語彙の分析にあたって用いられた「民族言語学」の方法などの点で、この試みの提起する問題は数多い。

2、都市の民族学

都市の民族学ないし民俗学という領域は、これまで目立った成果は見られなかった。わずかに目につくのは、労働のフォークロアの項で言及したB・Ю・クルビヤーンスカヤ、H・C・ポリシチュークらの仕事であろう。そしてこの仕事を継承した形で、主として現在の都市住民の民族誌を構想しようとするのがJ・A・アノーヒナとM・H・シメリョーヴァによる『ロシア共和国中央地帯の都市住民の習俗、過去と現在』（一九七七年）〔26〕である。この仕事の理論的問題ならびに具体的な展開としては、O・P・ブジナとシメリョーヴァの共著論文（一九七七、七九、八二年）〔83・84・85〕があり、またM・Γ・ラビノーヴィチとシメリョーヴァ共著の「都市の民族学的研究に向けて」（一九八一年）〔530〕と「都市と民族のプロセス」（一九八四年）〔362〕がある。さらに一九八〇年三月にはレニングラードにおいて、国家成立期における都市の民族文化的役割をテーマとする会議が開催されている。こうした状況によってようやく都市の民族学が輪郭を得つつあると言えよう。

ところでラビノーヴィチの『ロシア封建時代民族誌概観』（一九七八年）〔360〕は、そうした動向を最も明確に反映するものであり、著者の長期間に及ぶ都市の考古学的研究の延長上に立って近代以前の都市庶民生活を素描した仕事である。概説書的な性格は仕方ないが、これまで類書の少ないだけに貴重である。ちなみに全体の構成は次のとおりである。第一章、都市と市民（居住地としての都市、市民の主な生業、市民の副業、若干の民族のプロセス）、第二章、社会的習俗の歴史から「都市」、市、商工地区、第三章、家庭習俗の主な側面（家族、結婚、子供、埋葬と法事、文字教育）。なおこれは都市民族誌の第一部にあたり、精神文化を扱った第二部が現在執筆中とのことである。また彼の資料論は「都市民族学研究のための資料としての封建時代のロシア文字資料」（一九八二年）〔361〕に詳しい。

このラビノーヴィチと並行するかのようには、歴史学の立場から都市庶民生活誌を試みたのが、一八世紀ペテルブル

グ史を専門とするJ・H・セミョーノヴァの『ロシア習俗と文化生活史概観』（一九八二年）〔412〕である。彼女は一八世紀前半という時期に限定して、主として首都ペテルブルグの日常生活の全体を、第一章、家族、第二章、親と子、第三章、外的特徴と内的世界、第四章、社会的娯楽と余暇、第五章、労働条件と民衆生活、といった形で描き出している。

ラビノーヴィチ、セミョーノヴァの仕事は、扱っている対象や時期、叙述の方法などの点で若干の違いを見せているとはいえ、その全体的枠組や意図、アルヒーフを含む多数の文献の渉猟の点で共通する部分が多い。そしてこの両者の視角が革命前の歴史家H・H・コストマローフ、H・E・ザベリン、あるいはM・H・プイリヤーエフやO・H・ストルピヤーンスキイらの仕事にある意味で継承したものであることは確認しておいてよいだろう。⁽²⁰⁾この二人によって開拓（あるいは再開拓）されつつある都市の庶民生活誌という分野は、これから多数の構成要素に関する個別研究のさらなる積み重ねによって発展していく可能性を十分持っていると言える。

ところでこれらラビノーヴィチとセミョーノヴァのいささか概観的で、全体的な記述をねらいとした仕事とは別に、より細部の分析と考察にウエイトを置いて都市の民族学的記述を行おうとする動きがある。それはH・B・ユフニョーヴァを中心として、レニングラードロベテルブルグの民族誌を目的とするものである。その一部は「ロシア北西部の民族学的研究」と題されたシンポジウム開催（第一回一九七四年、第二回七六年、第三回七八年）の形で、また他方でユフニョーヴァのほか民俗学者、歴史学者、美術史家など幅広い分野の専門家たちによる研究会の開催の形で展開されている。そしてこれらの研究成果はこれまでに、『ソ連邦北西部の民族学的研究』（一九七七年）〔532〕の第二部、ならびにその続篇『古きペテルブルグ』（一九八二年）〔452〕という二つの論文集として発表されてきた。特に注目すべきは後者であり、ここには先にあげたセミョーノヴァによる一八世紀首都の民衆娯楽概観、市内博物館収蔵の

都市生活資料について論じたT・B・スタニニューヴィチ、首都におけるフォークロア伝承者の公演についてのK・B・チストーフ、都市研究の資料としての絵画の問題を論じたA・M・レーシエトフなどの論文のほか、この首都とエストニア、スロバキヤ、フィンランド、またロシア国内との結びつきを扱った論文計一が収録されている。それぞれが新たな問題を提供しており、加えてペテルブルグ文化に対する執筆者たちの深い愛情を感じさせるものである。だが何と云っても特筆すべきは、この論文集の責任編集者でしかも巻頭に「ペテルブルグ——多民族首都」〔540〕を執筆しているユフニョーヴァである。すでに前論文集の中で「民族学的問題としての都市研究」(一九七七年)〔537〕を発表した彼女は、そこで都市民族学の方角として文化習俗史、民族的プロセスの二つのあることを指摘し、さらに一九八〇年の論文〔539〕において問題所在の全体を明らかにしたが、この巻頭論文において具体的な事例分析を行う。すなわち彼女は、前論文「一九世紀末—二〇世紀初頭ペテルブルグ住民の民族構成」(一九七七年)〔538〕を統計面で補正、拡大しながら、多民族から構成されるこの首都の文化の複合的性格を記述しようとするのである。数字資料の緻密な処理と分析はもちろんのこと、メモリアルや旅行記など幅広い資料の利用によって、ペテルブルグは非ロシア人の全体像、ドイツ人の町とする「神話」の実像を明らかにした点でユフニョーヴァの仕事の意義は大きい。そして近代・現代の大都市が有する多民族的・民族混交的な性格という問題にとっても、特異な成立史を持つペテルブルグの事例分析としてこの論文は多くの示唆を与えるであろう。なお彼女のモノグラフが単行本として刊行の予定である。さらに一九八三年一二月には、レニングラードの民族学研究所において、レニングラードの都市民族学をテーマとするセミナーが開催されたとのことである。セミナーは、一、ペテルブルグの民族学・文化史的問題、二、通り、区画管理・博物館化の問題、三、現代レニングラードの民族社会学的研究、の三つの部分からなり、全体で二五の報告が行なわれたという。

ところでこのセミナーの参加者のひとりであるA・M・コネーチヌイの報告テーマ「見世物小屋のペテルブルグ・グリャーニエ」が示すように、ナロードノエ・グリャーニエ（民衆遊歩）が都市の民衆の祝祭として再検討されつつあることを最近の傾向として指摘できる。すなわちこれまでごく断片的にしか論じられてこなかったこの複合的な文化現象が都市の祝祭をはじめとする民族誌の中で不可欠なものであることが確認されつつあると言えよう。ソ連の現段階におけるグリャーニエ研究の問題点と今後の方向については拙稿（一九八三年）〔563〕に記したとおりであるが、上記コネーチヌイの成果は「謝肉祭と聖週間におけるペテルブルグのナロードノエ・グリャーニエ」（一九八二年）〔201〕、A・Γ・レヴィンソンの博士候補資格論文「ナロードノエ・グリャーニエにおけるロシア芸術のフォークロアの伝統の発展」（一九八〇年）〔228〕、そしてA・Φ・ネクルイロヴァの「ロシア定期市フォークロアの研究について」（一九八〇年）〔291〕などに最新の成果が反映されている。

ネクルイロヴァの用いた「定期市フォークロア」というタームは、かつてΠ・Γ・ボガトウイリョーフが用いた（一九六八年）〔71〕ものであるが、ここにはグリャーニエの場をはじめとして都市の街頭で耳にすることができる各種の言葉（見世物小屋や回転木馬の客寄せの言葉、覗きからくりの口上、人形芝居の科白、商人の売り声等）が含まれる。この種の言葉を記録したテクストは多くないが、最近二つの貴重な資料が公刊された。ひとつは、一九一〇年代から二〇年代にB・И・シマコーフが収集し整理していた、商人の言葉とそれに関連した通りでの商いに関わる各種の言葉が「ロシアの商売の雄弁」と題して発表されたことである（一九七八年）〔207〕。テクストは、一、通りの小商人、二、買手の叫び声、三、陽気な雄弁、四、商いの諺と格言、五、家内工業者、商人のモノローグ、六、商売上の契約、七、誓詞と呪い、の七つからなり、全体で五〇ページにもおよぶもの。また第二のものは、E・Π・イヴァノーフの『モスクワ庶民・職人の言葉』（一九八二年）〔166〕である。これは今世紀初頭のモスクワを中心とした大

都市で活躍した各種の職人の言葉を記述したものである。全体は「モスクワ商人の習俗と言葉」と題された第一部と、「さまざまな職業人の言葉、ユーモアと習俗」という第二部とからなり、ここで取りあげられる職業は、古本屋、聖像画売り、御者、床屋、仕立屋、靴屋、酒場や食堂の給仕、風呂番、棺桶屋、歩哨などである。このイヴァノフの資料集は、一方ではП・И・ボガトゥイリョーフ、И・А・ペロウソフ、В・А・ギリヤロフスキイらによるモスクワ庶民生活誌と密接に結びつくものとして貴重である。そして他方では、一九二〇年代に言語学者В・А・ラーリンが提起した「都市の俗語」「都市の言語学的研究」〔25〕とも通ずるものを含む点で興味深い。

ところでこうした発話による言葉のみならず、書かれた言葉としての宣伝文あるいは看板をも含めた形で都市のフオークロアを構想しようとする試みも、わずかではあるが行われつつある。ネクルイロヴァの「都市の視覚フオークロアのスタイルの若干の特質」(一九七八年)〔29〕、同「民衆の定期市の宣伝」(一九七九年)〔45〕、Г・С・オストロフスキイによる「ロシア描写フオークロアの本質について」(一九七四年)〔31〕と「ロシアの看板」(一九七九年)〔34〕などがその例であり、方法論の点ですでに言及したА・М・レーシエトフの論文〔45〕などが裏付けを与えていると言える。

そして文学作品もまた、以上述べてきた都市民族誌作成のさまざまな試みにとって、一定の制約下に多くの資料を提供するものである。その意味で、Ю・М・ロートマンの「アレクサンドル・ブロークと都市の民衆文化」(一九八一年)〔23〕は大きな視野を与えるものであろうし、一八四五年に文学者のオーチュルク(ルポルタージュ)を集めて出版された『ペテルブルグの生理学』が復刊されたこと(一九八四年)〔48〕は重要なこととして注目されるべきであろう。また、Н・И・ミロネーツの「歴史資料としての芸術文学」(一九七六年)〔27〕がこの問題に対する原論的考察を行なっている。

3、トータルな農民生活誌

本稿の冒頭で記したように、民衆版画や民家、建築、衣裳や装飾、民芸品といった対象に多くの関心が向いているのは最近の目立った現象である。しかもその関心が、以前のような豪華写真集の出版といった形だけでなく、より科学的な研究のレベルでも現われているというのが最近の特徴であるように思われる。例をあげる。民衆版画（ルポーク）については、久々に大部の画集が刊行されたが（一九八四年）〔546〕、残念ながら英語版であり、絵のタイトルのロシア語表記すら付いていないのは発行意図を疑うものである。むしろこれよりも注目すべきなのは、最大のルポーク収集家Д・А・ロヴィーンスキイ生誕一五〇年記念会議（一九七五年開催）の報告集『一七一—一九世紀ロシアの民衆版画とフォークロア』（一九七六年）〔283〕である。ここには巻頭論文としてО・Б・ブラスカヤ「Д・А・ロヴィーンスキイ、同時代人と後継者」をはじめとして、М・А・アレクセーエヴァ「モスクワにおける版画の商売とその取締り」、Ю・М・ロートマン「ロシア民衆画の芸術的本質」など一六篇が収められている。またアレクセーエヴァの論文（一九八三年）〔12〕はルポーク「ねずみが猫を埋葬する」のモチーフ、テーマを詳細に分析した労作であり、注目に値する。

玩具に関しては、Г・И・ダインの『ロシア民衆玩具』（一九八一年）〔139〕が玩具の流布やその「祝祭的」本質にまで論及していて興味深い。このほか、玩具の名産地として知られるドゥイムコヴォ村の玩具の収集家Г・ブリノフによる『ロシア民衆玩具』（一九八三年）〔544〕、И・Я・ボグスラーフスカヤの『ロシアの泥玩具』（一九七五年）〔72〕も貴重である。こうした玩具を含む民芸品を幅広く紹介したものとしては『火の鳥の故郷』（一九八三年）〔364〕が多くの写真を掲載しており、А・С・ミローフスキイの『跳べ、良き一角獣』（一九八二年）〔264〕も民芸品とその作

家たちに関するすぐれたレポートである。さらにはM・A・ネクラソヴァによる、多数の写真を含む二冊の概説書『現代の民衆芸術』（一九八〇年）、『ロシアの民衆芸術』（一九八三年）〔287〕がこの分野の最もまとまった仕事である。民族楽器については、И・B・マチエーフスキイの論文（一九八〇年）〔256〕が研究の前提となる方法論を論じている。また民族舞踊に関しては、А・А・クリモフの『ロシア民族舞踊の基礎』（一九八一年）〔191〕が概説書ながら、まとまっていて便利である。特にホロヴォード（輪ないし直線、曲線の列になって踊る集団舞踊）が現在いかに行われているか、に関してはE・И・ヤツノークの論文（一九七四年）〔542〕が貴重な情報を与えてくれる。

伝統的な木造建築に関しては、B・П・オルフィンスキイによる研究方法論の提示（一九八三年）〔307〕があったが、より具体的なガイドブックとしてA・B・オポローヴニコフとГ・C・オストロフスキイによる『木造のロシア』（一九八一年）〔306〕が手頃である。そしてこの著者のひとりであるオポローヴニコフの『ロシア木造建築』（一九八三年）〔305〕は豪華な写真集ではあるが、この分野の研究の最新で最良の成果である。

そしてこれら民衆芸術のさまざまな作品を民族（俗）学の立場から積極的に対象として扱った研究も次々と発表されつつある。すでに儀礼研究の個所であげた儀礼における衣裳の問題をはじめて本格的に論じたГ・C・マースロヴァのモノグラフ（一九八四年）〔255〕、同じく彼女の刺繍の模様を扱ったモノグラフ（一九七八年）〔254〕はその好例である。そのほか、C・B・ロジヂェストヴエーンスカヤの『ロシア民衆の芸術的伝統』（一九八一年）〔365〕もすぐれた成果として特筆すべきである。これは先のマースロヴァらとともに一九六九―七三年にかけて民族学研究所が行った「ロシア民衆芸術」調査の成果である。対象地域はヨーロッパ・ロシア北部から南ロシア、北東・北西ロシア、中央ロシア、ヴォルガ上・中流域で、各地の建築装飾を取り上げてそこに見られる芸術的伝統の問題を論じている。さらには、こうした建築装飾をはじめ民衆芸術をその土地の民族誌との関連で考察したC・И・ドミートリエヴァの

論文「メゼーニ地方ロシア人伝統的住居の建築的・装飾的特質」(一九八〇年)〔14〕、「メゼーニ地方ロシア人の民衆芸術」(一九八三年)〔145〕も光っている。

ところで以上あげてきた民衆芸術に対する民族学的アプローチは、その根幹において農民の意識と生活の全体像を追求しようとする動きと相通するものである。そしてこの動きを最も顕著な形で体現しているのが、「シベリア学派」と呼ばれる一連の研究者の成果である。このグループの代表者とも呼ぶべきM・M・グロムニコ、H・H・ポクローフスキイの仕事に関しては日本でも、和田春樹氏(一九七八年)〔56〕、高田和夫氏(一九七八年)〔53〕、土肥恒之氏(一九八〇年)〔54〕らによる紹介が行われているのでここでは繰返さない。ただ、グロムニコ(一九七五年)〔117〕によって提起された「労働伝統」の問題は歴史学だけでなく民俗(族)学の上でもきわめて重要である。ノヴォシビルスクからモスクワへ移ったグロムニコは「労働伝統」の問題を、今度は「相互扶助」の風習の形で展開し、多数のアルヒーフ資料にもとづいた労作「一九世紀ロシア農民の相互扶助の風習」(一九八一年)〔120〕を発表している。彼女の方法論は、当然のことながら、フィールド・ワークによらずアルヒーフを主にした文献資料の徹底的な分析にあり、それは「シベリア・グループ」に共通に見られる「古文獻学的方法」であるが、その方法は成果とともに今後の一九世紀ロシア農民の民族誌作成に絶大な影響を与えることとなる。なお、彼女の方法論は「一九世紀ロシア農民の美的伝統研究の問題と資料」(一九七九年)〔119〕ならびに「東スラヴ人の美的伝統研究の問題と方法、資料」(一九八三年)〔121〕に詳しい。

グロムニコの仕事とともに注目すべきは、シベリア地域のロシア人家族の研究に従事してきたH・A・ミネーニコの仕事である。すでに彼女は一九七五年にシベリア北西部(一八一—一九世紀前半)の民族誌を発表しているが〔265〕、それを基礎として今度は『西シベリアのロシア農民家族』(一九七九年)〔267〕を著わしている。これは、家族の数と

構造、家族の産業的機能、家族内の相互関係、農民の結婚と家族儀礼、農民の家族と共同体、という五章からなり、一八一—一九世紀前半の家族の全体像を統計面だけでなく民俗風習のレベルにまで踏みこんで浮き彫りにしようとした野心的な仕事である。この彼女の仕事として、同じく西シベリア農民の余暇と娯楽を扱った論文（一九七九年）〔26〕、やはりこの地域のロシア人農民の裁判の伝統的形式を論じたもの（一九八〇年）〔268〕、アルタイ地域へ流刑された旧教徒を扱った論文（一九八三年）〔261〕が目についた。

シベリア地域における農民逃亡の問題がT・C・マムシクによって、また旧教徒の反封建的闘争の問題がボクローフスキイによって論じられていることはすでに散文ジャンルの項で述べたとおりである。このほか、シベリアへの流刑や入植の問題（一例として論文集『シベリアにおける流刑と懲役』（一九七五年）〔245〕があり、先のグロムイコによる興味深い論文「一九世紀五〇年代シベリア懲役史資料としてのドストエーフスキイ『死の家の記録』」などが収められている）、共同体の問題を扱った論集『一七一—二〇世紀初頭シベリアにおける農民共同体』（一九七七年）〔208〕も農民生活の全体をとらえる上で不可欠であろう。

以上あげたグロムイコにはじまる「シベリア学派」の仕事は、徹底的な文献調査にもとづいて、革命前の農民の社会的意識をその歴史的・伝統的古層を抽出する形で説明しようとするものと言うことができよう。そしてこうした方向と並行して、儀礼研究の個所であげたΦ・Φ・ポロネフによるモノグラフがフィールド調査によって生まれており、またII 2であげたB・A・アレクサンドロフ編集のすぐれた民族誌三冊が公刊されているのである。

むろん、こうした「シベリア・グループ」のみが農民の生活と意識の解明を旨ざしているわけではないことは当然である。心理学研究が民俗（族）学に影響を与えつつあることはすでに述べたとおりだが、農民の意識と生活を心理学の立場から説明しようとするすぐれた業績としてO・N・ゾートヴァ他『農民心理的特質』（一九八三年）〔163〕があ

る。これは作家サルトル・ウイコーフ・リシチエドリーンの作品の舞台として知られる現在のヤロスラーヴリ州ポシエホーニエ地区の農民を対象として、革命前と現在の要求・関心、集団主義と個人主義、家族・結婚関係の三点を心理学的分析にもとづいて論述したものである。このほか、民間医療という対象が民族学の中で多くの注目を集めていることも伝統的農民生活研究の一環と考えられよう。その注目は一九七一年にトビリシ、一九七五年にレニングラードで開催されたシンポジウム、そして IO・B・プロムレーイと A・A・ヴォーロノフの共著論文「民族学研究の対象としての民間医療」(一九七六年)〔80〕の中にはっきりと確認できるものである。

また、エルスラン・ラザレーヴィチの昔話に関してすぐれたモノグラフを著わした II・H・プシカリョーフは、一七世紀後半の社会政治思想史を論じた著書(一九八二年)〔357〕において、その第二部をフォークロアを素材とした一七世紀後半の社会史を描こうとしている。すなわち、農民の労働、社会関係、教会と宗教、商売とお金、学校、家族関係がフォークロアの中にいかに反映しているかを跡づけており、これなどもロシア農民生活誌への試みのひとつと言ってよいであろう。さらには、歴史学の立場でアルヒーフ資料を利用して農奴解放前後の農民意識をより具体的に説明しようとする B・A・フォードロフの仕事(〔557・558〕で紹介されている)なども、例えば一九世紀半ばの農民の間に流布した風聞を扱った B・Γ・バザーノフ(一九七四年)〔37〕の仕事などと重なり合うものを多く含んでいるであろう。

V 民衆文化史像の再構築にむけて

以上のように述べてきた現在のソ連におけるロシア・フォークロア研究の動向は全体として、これまでの民衆文化

論の読みかえ、ならびに新たなロシア民衆文化像の提示という形でとらえ直すことができると思われる。

例をあげよう。スラヴ民族の起源の問題はこれまで何度も繰り返し論じられてきたが、一九八三年五月にモスクワで開催された「ボレーシエとスラヴ人の起源」をテーマとする全ソ会議は、本稿ですでに述べたボレーシエの民族誌作成作業との関わりの点で意味が大きい。スラヴ民族の起源の問題に対する民俗(族)学の対応は、一九八三年にキエフで開かれた第九回国際スラヴィスト会議の円卓討論でも見られたが、より具体的には一九八四年前半期に雑誌「ソビエト民族学」で二回にわたって行われた誌上討論に詳しい。これは「古代スラヴ精神文化の再構成」をテーマとした質問とそれに対する解答を掲載したもので、これに参加したのはB・H・プチーロフ、A・K・バイブリン、B・E・グーセフ、Ю・И・スミルノフ、A・B・グーラ、トルストイ夫妻、B・B・イヴァーノフなど合計四名である。近年、イヴァーノフやトルストイ夫妻をはじめB・A・ウスベーンスキイ、H・H・ベレーツカヤなどが神の名前や神話、儀礼を通じて古代スラヴ人の世界観を再構成する作業を行っていることはすでに記したとおりであり、この誌上討論はそうした成果の上に立ってスラヴ人の起源の問題を論じようとしたものである。このほか、儀礼やフォークロア・テクストの分析を通じて古代スラヴ人の民族誌への道を開こうとした労作として、T・A・ベルンシュタムとB・A・ラーピン「ヴィノグラデー——歌と儀礼」(一九八一年)〔68〕、Д・А・マチーンスキイ「東スラヴの歴史と神話を背景とするロシア・フォークロアの『ドゥナーイ』」(一九八一年)〔27〕が注目すべきである。

「文化的伝統」をめぐる一九八一年に「ソビエト民族学」誌上で繰り広げられた討論も、現在のソ連民族(俗)学にとって伝統という問題がいかに重要であるかを物語るものである。この討論の契機となったのは、一九七八年にエレバンで開かれた民族文化に関するシンポジウムであり、続いて一九八一年に「ソビエト民族学」に二回にわたり掲

載されたアルメニアの哲学者ヨ・C・マルカリアンの論文であった。このマルカリアンに対する反論と多くの議論はK・B・チストーフの論文(一九八三年)〔519〕によって一応の終結を迎えたが、全体として実りの多い議論が生まれたことになった。なおマルカリアンの立場は一九八三年に『文化の理論と現代の科学』〔249〕としてまとめられている。

このほか、現代ロシア文学にとって重大なテーマである「歴史的記憶」、文学と習俗(アイト)の相関関係、ならびに「農村派」文学の問題なども、民俗学それ自身の抱えた問題であり、民俗学の立場からの発言も行なわれている〔102〕。また、一九世紀後半の民俗研究者リ文学者たち(B・H・ダリ、Π・H・ヤクシーキン、C・B・マクシモフら)によって作られた「民衆認識」「民衆学」という分野も、民衆世界のトータルな把握の必要性という現代の視点によって再評価されようとしており、このことも以上述べた動きと無関係ではないだろう。

このように見てきた時、我々は文化を総体としてこれまでとは全く異なった視角でとらえ直そうとする意欲的な試みに気づかぬわけにはいかない。ひとつの例は、中世文学研究者A・M・バインチェンコのいくつかの仕事である。例えば「革新者としてのアヴァクーム」(一九八二年)〔320〕で彼は、アヴァクームという人物像を民衆的祝祭や表象との関わりで捉えようとする。それと同じ方法は「文化的神話としての『ポチョームキンの村』」(一九八三年)〔321〕で用いられており、ここで彼は有名な「ポチョームキンの村」のエピソードの生まれた「神話的背景」をこれまで一般に用いられた資料の新たな読みかえによって明らかにしているのである。⁽²³⁾

もうひとつの例は、ヨーロッパの中世文化を対象としたA・Я・グーレヴィチの仕事である。前著『中世文化のカテゴリ』(一九七二年)〔129〕において文化を基本的カテゴリによって捉え記述したのに対し、『中世民衆文化の諸問題』(一九八一年)〔130〕ではそれを継承しながらもまったく別のアプローチ、すなわち文化の合一性と「生理

学」の形で、いわば動態的・統合的な形で把握するのである。

グーレヴィチの方法と記述の全体にM・M・バフチンの「カーニバル論」〔55〕が多くの影響を投げかけていることは言うまでもないが、同じくこの「カーニバル論」にもとづいてロシアの中世文化を読みかえようとした試みとしてJ・C・リハチョーフとA・M・バーンチェンコによる『中世ロシアの笑いの世界』(一九七六年)〔234〕のあることは前稿で記した。この『笑いの世界』がきっかけとなって笑いに関する研究が相次いで生まれていることは注目すべきで、その中で目についたものとして一七世紀ロシア精神文化におけるパロディの問題を扱ったJ・A・チョーイルナヤ(一九八〇年)〔508〕とH・Π・スミルノーフ「中世ロシアの笑いとコミックなもの論理」(一九七七年)〔431〕をあげておく。さらにH・B・ポヌイルコの「一七世紀のロシア・クリスマス週間」(一九七七年)〔340〕は愚者の祭りとしてのクリスマス週間を取りあげて、そこに見られる火、仮装、衣裳のシンポリカと、キリストの降誕と洗礼との二つのマーク化について論じた興味深い仕事である。この仕事は先のリハチョーフ、バーンチェンコ共著の『笑いの世界』の増補版『中世ロシアにおける笑い』(一九八四年)〔235〕に収められた。また、やはりバフチンの方法に多くを依拠しながら、近代ロシア民衆の遊戯世界を祝祭空間として捉えようとしたA・Φ・ネクリロヴァ『ロシア民衆の祭・娯楽・見世物、一八世紀末—二〇世紀初頭』〔292〕が近刊の予定である。

ソビエト民俗(族)学における第二世代の巨人たちの足跡を受けて、第三世代の精鋭たちはその関心・方法の多様さと斬新さで、新たななる波を作り出そうとしている。そのうねりは国外の民族学の波に呼応しようとするものであり、開かれたソ連の民俗学が自国の民俗への自覚の昂まりと相俟ってどのような発見をもたらし、アイデアをうみ出していくか注目していきたい。

- (1) 欧米のそうした指摘はJ・H・ピリングトン〔54〕、また『スラヴ評論』一九七三年三月号(三二卷一号)のJ・V・ハーネイ、T・E・バード、G・L・クラインらの論文に見出すことができる。
- (2) そこに「あらゆる原理の根本」を見ようとするベローフ独自の認識論の源が存在する。彼の問いかけはまさに、ロシアの民衆文化とは何か、ロシア民衆の世界観とは何かという点にあり、その視点から現代社会における労働・伝統・歴史・記憶の意義をとらえ直そうとするものである。その点で彼の著書の意味ははかりしれなく大きい。『調和』をめぐるこうした問題については、P・C・ヴィーホツェフ(一九八二年)〔102〕を参照。またベローフを通して問題となる現代ロシア文学のいわゆる農村派については、さしあたってЮ・И・デュージエフ(一九八三年)〔147〕、B・B・コージノフ(一九八二年)〔193〕。
- (3) ロシア語の「フォルクローレ」というタームに関しては、これまで何度も議論されてきたが、最近のものとしてC・H・アーズベレフ(一九七四年)〔4〕を参照。
- (4) この部門の各研究員、ならびに彼らの仕事については、拙稿(一九八二年)〔56〕で記した。
- (5) 創立五〇周年を記念して、民族友好勲章を授与された。この研究所の五〇年の活動の全体総括については、K・B・チストーフ(一九八三年)〔52〕ならびにЮ・B・プロムレイイ他(一九八三年)〔81〕。
- (6) この雑誌の半世紀にわたる歴史についてはA・И・ペールシツ他(一九七六年)〔32〕。
- (7) 最近の博士候補資格取得者は、B・И・ジュクターリナ、B・K・ベトゥホーフ(ともに一九七五年)、A・H・ローゾフ(一九七八年)、一九八二年夏にT・Г・イヴァノヴァ。同年秋に審査予定であったГ・И・マリツェフは直前に急死。また博士号取得者はE・И・シャステーナ(一九七八年)、Л・И・エメリヤノフ(一九七九年)、Ю・И・ユージン(一九八〇年)。ここ数年の民俗調査は平均年五、六回の規模で行なわれている。
- (8) この会議の報告は『ロシア・フォークロア』二二巻に掲載予定だが、会議の意義や全体像についてはP・C・ヴィーホツェフ「新たな段階において」(一九八〇年)〔101〕。
- (9) 「スラヴ民族学」全三巻をめぐる経緯とその意義については〔52〕。なお、民族学研究所と日本の民族学博物館を中心とした交流は、モスクワにおける日本の伝統文化の展示会、民博への来訪と日本における簡単な調査活動といった形で行われてい

- る。
- (10) この三冊をはじめとして、近年のシベリアのロシア民族誌の動向と問題点に関してはE・Π・ブスイーギンの論文(一九八三年)〔86〕が詳しい。
- (11) フォークロア研究のカルトグラフィ的方法・研究の重要性がすでに一九二〇年代に意識されていたこと、また最近の民族(俗)学研究におけるカルトグラフィの問題とその成果などに関してはトルストイ夫妻の論文(一九八三年)〔49〕の注六八にあげられている文献によって知ることができる。
- (12) その三部作は『レニングラード州のチャストゥーシカ』(一九六九年)、『レニングラード州の昔話』(一九七六年)、『レニングラード州の民謡』(一九七八年)〔50・51・52〕である。
- (13) 彼女の論文〔52〕は英訳されて論文集『帝政ロシアの家族』(一九七八年)〔54〕に収録されている。
- (14) このことは例えば、前記アフナーシエフ『ロシア昔話集』一卷本〔33〕に寄せたB・Π・アニーキンの序でも明らかである。
- (15) 彼のこの考え方は『フォークロアの美学』(一九六七年)〔131〕で明確化され、さらに近年に及んで言及した「複合的研究」の提唱へと展開している。
- (16) トルストイ夫妻「ボレーシエ民族・言語学的研究の課題」(一九八三年)〔49〕の二二、二〇ページ、注七〇を参照のこと。
- (17) 一九八四年になって、一九六六―七五年の文献を対象とした全二冊のうちの一冊が刊行された。
- (18) 筆者未見だが、一九七五年にJ・E・ゲーニンにより『図書館書誌分類におけるフォークロアの反映と、現代民俗学による分類の方法論』〔110〕が出版された。
- (19) 最近出版された多くのフォークロア教科書の丹念な紹介と批評はЭ・C・リトヴィーン(一九八三年)〔231〕によって行われている。
- (20) 最近刊行のA・A・フォルモゾフ『モスクワの歴史家И・E・ザベーリン』(一九八四年)〔49〕はザベーリンに関する

文字通り最初のモノグラフとして注目に値する。

- (21) В. И. Симароффはチャストゥーシカの収集で知られる研究者で、一九七七年に彼を記念した論文集『シマコーフと民衆創造』〔418〕が刊行なれている。
- (22) 以下にあげるB・T・ハザーノフの言葉を参考のこと。「民俗学は民衆認識の中に含まれ、民衆の世界観・ロシア農民の経済的、知的、美的生活に関する学問の最も重要な一分野を形成する」〔37〕。
- (23) さらに彼はB・A・ウズネーンスキイとの共著論文「イヴマン雷帝とピョートル大帝」(一九八三年)〔322〕において新たな中世・近世ロシア史像を描き出さうとしてゐる。

文 献

- 〔1〕 Аздовская Л. В., Из научного наследия М. К. Аздовского.——В〔3〕.
- 〔2〕 Аздовский М. К., История русской фольклористики, Т. 1, 2. М., 1958, 1963.
- 〔3〕 Его же, Статьи и письма. Новосибирск, 1978.
- 〔4〕 Азбегел С. Н., К определению понятия «фольклор».——РД, 1974, No. 3.
- 〔5〕 Его же, Историзм былин и специфика фольклора. Д., 1982.
- 〔6〕 Акимова Т. М., Русский народный театр в исследованиях последних лет.——СЭ, 1976, No. 5.
- 〔7〕 Его же, Очерки истории русской народной песни. Саратов, 1977.
- 〔8〕 Его же, Исследования о поэтике былин в последние десять лет.——В сб.: Фольклор народов РСФСР, вып. 4, 1977.
- 〔9〕 Его же, «Русская песня» и романс первой трети XIX века.——РД, 1980, No. 2.
- 〔10〕 Акимова, Т. М. Архангельская В. К. Бахтина В. А., Русское народное поэтическое творчество, М., 1983.
- 〔11〕 Актуальные проблемы современной фольклористики. Д., 1980.

- [20] Алексеева М. А., Гравюра на дереве «Мыши kota на погост волокут»—памятник Русского народного творчества конца XVII-начала XVIII в.—В сб.: XVIII век, 14, Л., 1983.
- [21] Алексеева О. Б., Устная поэзия русских рабочих. Л., 1971.
- [24] Алексеевко Н. В., Бухтарминские были. Алма-Ата, 1981.
- [25] Андреев Н. П., Указатель сказочных сюжетов по системе Дарне. Л., 1929.
- [29] Андреева М. П., фольклор нижегородского края. Горький, 1971.
- [27] Аникин В. П., Русские народные поговорки, загадки и детский фольклор. М., 1957.
- [28] Его же, Русская народная сказка. М., 1977.
- [29] Его же, Теоретические проблемы историзма были в науке советского времени, вып. 1-3, М., 1978, 1978, 1980.
- [20] Его же, Советская историческая поэма в былиноведении и Всеволод Миллер.—РФ, 19, 1979.
- [24] Его же, Русское устное народное творчество (Фольклор), М., 1981.
- [22] Его же, Историческое толкование эпоса Киевской Руси в трудах В. Миллера.—Вестник МГУ, серия филология, 1983.
- [23] Его же, Русская народная сказка. М., 1984.
- [24] Его же, Былины. Метод выделения исторической хронологии вариантов. М., 1984.
- [23] Аникин В. П., Крутков Ю. П., Русское народное поэтическое творчество. Л., 1983.
- [29] Анохина Л. А., Шмелева М. П., Быт городского населения средней полосы РСФСР. М., 1977.
- [22] Ареальные исследования в языкознании и этнографии. Л., 1977.
- [28] Ареальные исследования в языкознании и этнографии. Л., 1983.
- [28] Артеменко Е. Б., Синтаксический строй русской народной лирической песни в аспекте ее художественной

организации. Воронеж, 1977.

- [20] Архангельская В. К., Очерки народной фольклористики. Саратов, 1976.
- [21] Ее же, Песни ямщиков.—В сб.: Фольклор народов РСФСР, вып. 7, 1980.
- [22] Атанов Г. М., Проза Бучина и фольклор.—РД, 1981, No. 3.
- [23] Афанасьев А. Н., Народные русские сказки. М., 1976.
- [24] Его же, Древо жизни. Избранные статьи. М., 1982.
- [25] Ашурков В. Н. Кацюба Д. В. Магوشин Г. Н., Историческое краеведение. Изд. 2-ое, М., 1980.
- [26] Батизбаева М. М., Русский фольклор в Казахстане.—Известия АН, серия лит. и я., т. 41, No. 6, 1982.
- [27] Базанов В. Г., Русские революционные демократы и народнознание. JL, 1974.
- [28] Его же, Древнерусские (и фольклорные) ключи к «Ключам Марии» С. А. Есенина.—В [23].
- [29] Его же, Поэма о древнем Выге.—РД, 1979, No. 1.
- [30] Его же, К символике красного коня.—РД, 1980, No. 4.
- [31] Его же, Поэзия русского севера. Петрозаводск, 1981.
- [32] Байбурин А. К., К ареальному изучению русского свадебного обряда.—В [23].
- [33] Его же, Семiotический статус вещей и мифология.—СМАЭ, т. 37, JL, 1981.
- [34] Его же, Жилище в обрядах и представлениях восточных славян. JL, 1983.
- [35] Багандин А. И., Мифологическая школа.—В кн.: Академические школы в русской литературе. М., 1975.
- [36] Барраг Л. Г., Сюжет о змеборстве на мосту в сказках восточнославянских и других народов.—В [23].
- [37] Барраг Л. Г., Березовский И. П. и др., Сравнительный указатель сюжетов. Восточнославянская сказка. JL, 1979.

- [84] Барапова И. И., Показ современности в ГМЭ.—СЭ, 1981, No. 2.
- [84] Баскаков В. Н., Пушкинский дом 1905 • 1930 • 1980. Л., 1980.
- [85] Бахтин В. С., 1000 частушек ленинградской области. Л., 1969.
- [85] Его же, Сказки ленинградской области. Л., 1976.
- [85] Его же, Песни ленинградской области. Л., 1978.
- [85] Его же, Сказки, песни, частушки, присловья ленинградской области, Л., 1982.
- [84] Его же, От Былинны до ситялки. Л., 1982.
- [85] Бахтин М. М., Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и Ренессанса. М., 1975.
- [85] Башнер Л. М. и др., Русская народная музыка. Нотографический указатель. Ч. 1, М., 1981.
- [85] Белов В. И., Лад: очерки о народной эстетике. М., 1982.
- [85] Белоусов А. Ф., «Колыбельная» из Причудья. Уч. записки Тарту. уни-та, вып. 358, 1975.
- [85] Его же, Литературное наследие древней Руси в народной словесности русских старожитов Прибалтики. Автореферат к. ф. н. Тарту, 1980.
- [85] Белоусов А. Ф., Макашина Т. С. и др., Фольклор русского населения Прибалтики. М., 1976.
- [85] Бернштам Т. А., Свадебная обрядность на поморском и онежском берегах Белого моря.—В сб.: Фольклор и этнография. Л., 1974.
- [85] Его же, Поморья. Л., 1978.
- [85] Его же, Обряд «крещение и похороны куклушки».—СМАЭ, т. 37, Л., 1981.
- [85] Его же, Орнитоморфная символика у восточных славян.—СЭ, 1982, No. 1.
- [85] Его же, «Обряд» раставания с красотою.—СМАЭ, т. 38, Л., 1982.
- [85] Его же, Русская народная культура Поморья в XIX-начале XX в. Л., 1983.

- [75] Ег же, Мяз в русском фольклоре и обрядовых играх.—В [55].
- [76] Бернштам Т. А., Лапин В. А., Виноградье—песня и обряд.—В [55].
- [77] Библиографический указатель материалов фольклора архива кафедры русской литературы Горьк. гос. уни-та, вып. 1, ч. 1, Сказки Горький, 1976.
- [78] Библиография трудов Ин-та этнографии. Л., 1967.
- [79] Богатырев П. Г., Художественные средства в юмористическом ирмарочном фольклоре.—В кн.: Вопросы теории народного искусства. М., 1971.
- [80] Богуславская И. Я., Русская глиняная игрушка. Л., 1975.
- [81] Бойко В./сост., Русские народные поговорки и пословицы и поговорки. Киев, 1979.
- [82] Болонев Ф. Ф., Календарные обычаи и обряды семейских. Улан-Удэ, 1975.
- [83] Ег же, Народный календарь семейских Забайкалья. Н., 1978.
- [84] Борковский В. И., Синтаксис сказок. М., 1981.
- [85] Боровский Я. Е., Мифологический мир древних киевлян. Киев, 1982.
- [86] Бромлей Ю. В., Современные проблемы этнографии. М., 1981.
- [87] Ег же, Очерки теории этноса. М., 1983.
- [88] Бромлей Ю. В., Воронов А. А., Народная медицина как предмет этнографических исследований.—СЭ, 1976, No. 5.
- [89] Бромлей Ю. В., Чистов К. В., Ордена дружбы народов ИЭ—50 лет.—СЭ, 1983, No. 4.
- [90] Будилова Е. А., Социально-психологические проблемы в русской науке. М., 1983.
- [91] Будина О. Р., Шмелева М. Н., Этнографическое изучение города в СССР.—СЭ, 1977, No. 6.
- [92] Их же, Общественные праздники в современном быту русского городского населения.—СЭ, 1979, No. 6.

- [52] Их же, Традиция в культурно-бытовом развитии современного русского города.—СЭ, 1982, No. 6.
- [53] Буслыгин Е. П., Этнография русского крестьянства Сибири.—СЭ, 1983, No. 6.
- [54] Былины. Русский музыкальный эпос. М., 1981.
- [55] Васильевич В. А., Восточнославянская юмористическая песня. Минск, 1979.
- [56] Ведерникова Н. М., Русская народная сказка. М., 1975.
- [57] Веленкая Н. Н., Языческая символика славянских архаических ритуалов. М., 1978.
- [58] Вестник Московского уни-та. Серия филология. 1946+
- [59] Виноградов Г. С., Детский фольклор и быт. Иркутск, 1925.
- [60] Его же, Русский детский фольклор. Иркутск, 1930.
- [61] Его же, Детский фольклор.—В [53].
- [62] Виноградова Л. Н., Замытая календарная поэзия западных и восточных славян, М., 1982.
- [63] Выасова З. И., Фольклор о Грозном у П. И. Мельникова и Н. К. Миролюбова.—РФ, 20, 1981.
- [64] Войны кровавые цветы. Устные рассказы о Великой Отечественной Войне. М., 1979.
- [65] Вологодский фольклор. Вологда, 1975.
- [66] Вопросы поэтики литературы и фольклора. Воронеж, 1976, 1977.
- [67] Выходцев П. С., Народно-поэтические основы философской прозы М. М. Пришвина.—РЛ, 1980, No. 1.
- [68] Его же, На новом этапе.—РЛ, 1980, No. 3.
- [69] Его же, Труд-нравственность-искусство.—РЛ, 1982, No. 1.
- [70] Гаврилюк Н. Г., Картографирование явлений духовной культуры. Киев, 1981.
- [71] Гаспаров М. Л., Русский былинный стих.—В сб.: Исследования по теории стиха. Л. 1978.
- [72] Гапанк В. М., Фольклористика Советского Союза за 50 лет.—Известия АН, серия лит. и я., т. 31. Вып. 6,

1972.

- [90] Его же, Фольклор и модавско-русско-украинские исторические связи. М., 1975.
- [97] Гвоздикова Л. С., К типологии русского свадебного хлеба.—СМАЭ, т. 37, Л., 1981.
- [80] Его же, Межкие изделия из теста в русском свадебном обряде.—СМАЭ, т. 38, Л., 1982.
- [69] Гвоздикова Л. С., Шаповалова Г. Г., К проблеме картографирования свадебного обряда. В кн.: Ареальные исследования в языкознании и этнографии. Краткие сообщения. Л., 1978.
- [81] Генин Л. Е., Отражение фольклора в библиотечно-библиографических классификациях и методика его классифицирования в свете современной фольклористики. Л., 1975.
- [11] Герасимова Н. М., Формулы русской волшебной сказки.—СЭ, 1978, No. 5.
- [21] Героическая поэзия гражданской войны в Сибири. Н., 1982.
- [13] „Гой еси вы, добры молодцы“ Русское народно-поэтическое творчество. М., 1979.
- [11] Горелов А. А., Насущные проблемы освоения культурного наследия.—РЛ, 1977, No. 4.
- [15] Горский И. К., Александр Веселовский и современность. М., 1975.
- [19] Гречина О. Н., Осорина М. В., Современная фольклорная проза детей.—Рф, 20, 1981.
- [11] Громыко М. М., Трудовые традиции русских крестьян Сибири. Н., 1975.
- [81] Его же, Этнографические и фольклорные источники в исследовании общественного сознания русских крестьян Сибири.—В кн.: Источниковедение отечественной истории. М., 1977.
- [61] Его же, Проблемы и источники исследования этнических традиций русских крестьян XIXв.—СЭ, 1979, No. 5.
- [20] Его же, Обычай помощей у русских крестьян в XIX.—СЭ, 1981, No. 4. и 5.
- [21] Его же, Проблемы, методы и источники исследования этнических традиций восточных славян.—В кн.:

- История, культура, этнография и фольклор славянских народов. М., 1983.
- [12] Грыбляг М. Я., Белорусская этнография и фольклористика. Библиографический указатель (1945-70). Минск, 1972.
- [13] Грякалова Н. Ю., Фольклорные традиции в поэзии Анны Ахматовой.—РЛ, 1982, No. 1.
- [14] Гура А. В., Символика зайца в славянском обрядовом и песенном фольклоре.—В [28].
- [15] Его же, Опыт ареальной характеристики славянского свадебного обряда и его терминологии.—В кн.: Формирование раннефеодалных славянских народностей. М., 1981.
- [16] Его же, Ласка (Mustela pivalis) в славянских народных представлениях.—В [28].
- [17] Его же, Хроника полесских экспедиций.—В [28].
- [18] Гура А. В., Терновская О. А., Толстая С. М., Программа полесского этнолингвистического атласа.—В [28].
- [19] Гуревич А. Я., Категории средневековой культуры. М., 1972.
- [20] Его же, Проблемы средневековой народной культуры. М., 1981.
- [21] Гусев В. Е., Эстетика фольклора. Л., 1967.
- [22] Его же, Методика комплексного изучения фольклора.—В кн.: Проблемы музыкального фольклора народов СССР. М., 1973.
- [23] Его же, Истоки русского народного театра. Л., 1977.
- [24] Его же, Славянские партизанские песни. Л., 1979.
- [25] Его же, Народное творчество в годы второй мировой войны и задачи ее исследования.—СЭ, 1980, No. 4.
- [26] Его же, Русский фольклорный театр VIII-начала XX века. Л., 1980.
- [27] Его же, Фольклорный театр.—В кн.: История советского театроведения. М., 1981.
- [28] Его же, Достоевский и народный театр.—В кн.: Достоевский и театр. Л., 1983.

- [63] Дайн Г. Л., Русская народная игрушка. М., 1981.
- [64] Далгат У. Б., Литература и фольклор. М., 1981.
- [65] Даль В. И., Избранные произведения. М., 1983.
- [66] Его же, Пословицы русского народа в двух томах. М., 1984.
- [67] Дмитриев Ю. А., Цирк в России. М., 1977.
- [68] Дмитриева С. И., Архитектурные и декоративные особенности традиционного жилища русских Мезени.—
СЭ, 1980, No. 6.
- [69] Его же, Народное искусство русских Мезени.—СЭ, 1983, No. 5.
- [70] Древнерусская рукописная книга и ее бытование в Сибири. Н., 1982.
- [71] Дюжев Ю. И., Живая душа народа. Петрозаводск, 1983.
- [72] Дюмезиль Ж., Осетинский эпос и мифология. М., 1976.
- [73] Емельянов Л. И., Методологические вопросы фольклористики. Л., 1978.
- [74] Еремина В. И., Иносказания народной лирики. Автореферат к. ф. н. Л., 1967.
- [75] Его же, Мир и народная песня.—В [63].
- [76] Его же, Поэтический строй русской народной лирики. Л., 1978.
- [77] Его же, Проблемы исторической поэтики в наследии А. Н. Веселовского.—РФ, 19, 1979.
- [78] Его же, Историко-этнографические истоки «общих мест» похоронных причитаний.—РФ, 21, 1981.
- [79] Ермаченко А. В., Калужский фольклор. Тула, 1979.
- [80] Ефименкова Б. Б., Севернорусская причеть. М., 1980.
- [81] Желудина В. И., Поэзия свадебного обряда Новгородского края. Автореферат к. ф. н. Л., 1975.
- [82] Жирнова Г. В., Брак и свадьба русских горожан в прошлом и настоящем. М., 1980.

- [65] Журавлев А. Ф., Охранительные обряды, связанные с падежом скота, и их географическое распространение. — В [49].
- [66] Земповский И. И., Мелодика календарных песен. Л., 1975.
- [67] Зорин Н. В., Русская свадьба в Среднем Поволжье. Казань, 1981.
- [68] Зоркая Н. М., На рубеже столетий. М., 1976.
- [69] Зотова О. И., Новиков В. В., Шорохова Е. В., Особенности психологии крестьянства. М., 1983.
- [70] Зырянов Н. В., О характере импровизаций в свадебных причитаниях. — В кн.: Литература и фольклор Урала. Пермь, 1978.
- [71] Иванов В. М., А.Н.Афанасьев и революционная ситуация в России конца 50-х—начала 60-х годов XIX века. — В кн.: Вопросы истории и филологии. Ростов на Дону, 1974.
- [72] Иванов Е. П., Меткое московское слово. М., 1982.
- [73] Иванов В. В., Топоров В. Н., Исследования в области славянских древностей. М., 1974.
- [74] Иванова Т. Г., Воронежская сказочница А. К. Королькова. — Подъем, 1979, No. 1.
- [75] Ее же, К вопросу о контаминации в волшебной сказке. — В [49].
- [76] Ее же, НЕ. Ончуков и судьба его научного наследия. — РЛ, 1982, No. 4.
- [77] Ивашева Л. Л., Разумовская Е. Н., Увятский свадебный ритуал в его современном бытовании. — СЭ, 1980, No. 1.
- [78] Ивушка-раkitовый кусток. Народная лирика Зауралья. Челябинск, 1983.
- [79] Из истории русской фольклористики. Л., 1978.
- [80] Из истории русской советской фольклористики. Л., 1981.
- [81] Известия АН СССР. Серия литературы и языка. 1940+

- [176] Институт славяноведения и балканистики (1947-1977). Справочно-информационный обзор. М., 1977.
- [177] Источники по культуре и классовой борьбе феодального периода. Н., 1982.
- [178] Источниковедение и археология Сибири. Н., 1977.
- [179] Календарно-обрядовая поэзия сибиряков. Н., 1981.
- [180] Календарные обычаи и обряды в странах зарубежной Европы. Летне-осенние праздники. М., 1978; Исторические корни и развитие обычаев. М., 1983.
- [181] Калугин В. И., Герои русского эпоса. М., 1983.
- [182] Капица О. И., Детский фольклор. Л., 1928.
- [183] Капица О. И./ред., Детский быт и фольклор. Л., 1930.
- [184] Касяко В. К., Подлесские сказочники.—В кн.: Вопросы этнографии и фольклористики. Минск, 1979.
- [185] Каталог коллекций отдела Европы МАЭ.—СМАЭ, т. 38, 1982.
- [186] Каталог-указатель этнографических коллекций. Украинцы. Л., 1983.
- [187] Каталог этнографических коллекций Музея археологии и этнографии Сибири Томского уни-та. ч. 1, 2, Томск, 1979, 1980.
- [188] Кирьянов Ю. И., Жизненный уровень рабочих России. М., 1979.
- [189] Китайник М. Г., Пословицы и поговорки русских рабочих.—В [88].
- [190] Клибанов А. И., Народная социальная утопия в России. М., 1978.
- [191] Климов А. А., Основы русского народного танца. М., 1981.
- [192] Книга нежности: Колыбельные песни народов СССР. М., 1982.
- [193] Кожин В. В., Статьи о современной литературе. М., 1982.
- [194] Колпакова Н. П., Песни и люди. Л. 1977.

- [95] Ее же, Уральский дневник.—СЭ, 1979, No. 6.
- [96] Ее же, Сразу после войны. —СЭ, 1980, No. 4.
- [97] Ее же, О жайровой и сюжетно-тематической классификации русской народной бытовой песни.—СЭ, 1983, No. 6.
- [98] Кон И. С., Открытие «Я». М., 1978.
- [99] Его же, Этнография детства.—СЭ, 1981, No. 5.
- [100] Его же, Этнография и проблемы пола.—СЭ, 1983, No. 3.
- [101] Конечный А. М., Петербургские народные гуляния на масленичной и святой неделе (машинопись). 1982.
- [102] Копанева Н. П., Песенники для народа в XIX в.—В сб.: Русские библиотеки и их читатель. Л., 1983.
- [103] Копылова Н. И., Фольклоризм поэтики баллады и поэмы русской романтической литературы первой трети 19 века. Автореферат к. ф. и. Воронеж, 1975.
- [104] Кочетов В. Н., Шишков и устное народное поэтическое творчество. М., 1981.
- [105] Кошелев Я. Р., Русская фольклористика Сибири. Томск, 1962.
- [106] Кравицов Н. И., Лазутин С. Г., Русское устное народное творчество. Изд. 2-ое. М., 1983.
- [107] Красноречье русского торжка. Материалы из архива В. И. Симанова.—В [83].
- [108] Крестьянская община в Сибири XVII—начала XX в. Н., 1977.
- [109] Кручинная Н. А., Народные исторические песни начала XVII века. Л., 1974.
- [110] Ее же, О жанровой специфике преданий и принципах их систематизации.—РФ, 17, 1977.
- [111] Ее же, Предания об аборигенах края.—РФ, 20, 1981.
- [112] Круглов Ю. Г., Русские свадебные песни. М., 1978.
- [113] Его же, Фольклорная практика. М., 1979.

- [14] Его же, Русские обрядовые песни. М., 1982.
- [15] Круглов, Ю. Г., сост., Русское народное поэтическое творчество. Хрестоматия. Л., 1981.
- [16] Крулянская В. Ю., Полицук Н. С., Культура и быт рабочих горнозаводского Урала. М., 1971.
- [17] Крулянская В. Ю., и др., Культура и быт горняков и металлургов Нижнего Таттла. М., 1974.
- [18] Кузьмин А. И., Военная героика в русском народнопозитическом творчестве. М., 1981.
- [19] Кузьмина Л. П., сост., Народная поэзия рабочих Сибири. Улан-Удэ, 1974; Народное поэтическое творчество рабочих Сибири. Улан-Удэ, 1977.
- [20] Кулаковские Н. Н. и Л. В., За народной мудростью. М., 1975.
- [21] Куранты. Историко-краеведческий альманах. М., 1983.
- [22] Лаутин С. Г., Дневник А. Н. Афанасьева.—Подъем, 1973, No. 4.
- [23] Его же, Поэтика русского фольклора. М., 1981.
- [24] Лапин В. А., Русские свадебные песни поморов как музыкально-этнографическая система. Афгореферат к. иск. Л., 1976.
- [25] Ларин В. А., О лингвистическом изучении города.—В его кн.: История русского языка и общее языкознание. М., 1977.
- [26] Левин-Строс К., Структурная антропология. М., 1983.
- [27] Левин Ю. Д., Оснан в русской литературе. Л., 1980.
- [28] Левинсон А. Г., Развитие фольклорных традиций русского искусства на народных гуляниях. Диссертация на соискание ученой степени кандидата искусствоведения. М., 1980.
- [29] Линдер И. М., Шахматные реалии в былинах.—СЭ, 1984, No. 3.
- [30] Литвин Э. С., Песенные жанры русского детского фольклора.—СЭ, 1972, No. 1.

- [231] Его же, Русский фольклор в высшей школе.—СЭ, 1983, No. 6.
- [232] Лихачев Д. С., Несколько замечаний о составлении Свода русского фольклора.—РФ, 21, 1981.
- [233] Его же, Заметки о русском. Л., 1982.
- [234] Лихачев Д. С., Панченко А. М., «Смеховой мир» древней Руси. Л., 1976.
- [235] Лихачев Д. С., Панченко А. М., Понярко Н. В., Смех в древней Руси. Л., 1984.
- [236] Лобанов М. А., Чистов К. В., Запись от И. А. Федосовой на фонограф в 1896 г.—В [237].
- [237] Лотман Ю. М., Блок и народная культура города.—Блоковский сборник. IV, Тарту, 1981.
- [238] А. В. Луначарский о массовых празднествах, эстраде, цирке. М., 1981.
- [239] Дуланова И. П., «Смеховой мир» русской волшебной сказки.—РФ, 19, 1979.
- [240] Макашина Т. С., Фольклор и обряды русского населения Латгалии. М., 1979.
- [241] Его же, Ильин день и Ильин-пророк в народных представлениях и фольклоре восточных славян.—В [239]
- [242] Максимов С. В., Избранное. М., 1981.
- [243] Мальцев Г. И., Традиционные формулы русской необрядовой лирики.—РФ, 21, 1981.
- [244] Малюгина А. И., Сибирские рассказы В. Г. Короленко и их народнопоэтическая основа. Енисейск, 1962.
- [245] Мамсик Т. С., Община и быт алтайских беглецов-«каменщиков».—В кн.: Из истории семьи и быта сибирского крестьянства XVII—начала XX вв. Н., 1976.
- [246] Его же, Победы как социальное явление. Н., 1978.
- [247] Его же, Новые материалы об алтайских «каменщиках».—В [246].
- [248] Его же, Беловодцы и Беловодье. —В [247].
- [249] Маркарян Э. С., Теория культуры и современная наука. М., 1983.
- [250] Марьяненко О. П., Фольклор пензенской области. Рязань, 1977.

- [13] Мартынова А. Н., Опыт классификации русских колыбельных песен.—СЭ, 1974, No. 4.
- [14] Ее же, Отражение действительности в крестьянской колыбельной песне.—РФ, 15, 1975.
- [15] Ее же, Русская народная колыбельная песня и крестьянский быт. Автореферат к. и. н. Д., 1977.
- [16] Маслова Г. С., Орнамент русской народной вышивки как историко-этнографический источник. М., 1978.
- [17] Ее же, Народная одежда в восточнославянских традиционных обычаях и обрядах XIX—начала XX в. М., 1984.
- [18] Мапиевский И. В., Народный музыкальный инструмент.—В [1].
- [19] Мачинский Д. А., «Дунай» русского фольклора на фоне восточнославянской истории и мифологии.—В [2].
- [20] Мелриш Д. Н., Литература и фольклорная традиция. Саратов, 1980.
- [21] Мегетинский Е. М., Неклюдов С. Ю., Новик Е. С., Сетал Д. М., Проблемы структурного описания волшебной сказки.—Труды по знаковым системам, т. 4, Тарту, 1969.
- [22] Мельгунов Б. В., Некрасов и крестьянская утопия.—РД, 1980, No. 1.
- [23] Мельников М. Н., Русский-легский фольклор Сибири. Н., 1970.
- [24] Мехнецов А. М., Свадебные песни Томского Приобья. Л., 1977.
- [25] Миклухо-Маклай Н. Н., Человек с Луны. Л., 1982.
- [26] Мигловский А. С., Скачи, добрый единорог. М., 1982.
- [27] Миненко Н. А., Северо-западная Сибирь в XVIII-первой половине XIX в. Н., 1975.
- [28] Ее же, Досуг и развлечения у русских крестьян Западной Сибири.—СЭ, 1979, No. 6.
- [29] Ее же, Русская крестьянская семья в Западной Сибири. Н., 1979.
- [30] Ее же, Традиционные формы исследования и суда у русских крестьян Западной Сибири.—СЭ, 1980, No. 5.

- [269] Ее же, Ссылыные крестьяне—“поляки” на Алтае в XVIII—половине XIX в.—В кн.: Политические ссылки в Сибири. Н., 1983.
- [270] Миролюев Н. И., Художественная литература как исторический источник.—История СССР, 1976, No. 1.
- [271] Митрофанова В. В., Русские народные загадки. Л., 1978.
- [272] Ее же, Статьи и публикации по русскому фольклору в изданиях сибирских педагогических институтов в последнее десятилетие.—СЭ, 1980, No. 6.
- [273] Миф-фольклор-литература. Л., 1978.
- [274] Мифы народов мира. Т. 1, 2, М., 1980, 1982.
- [275] Мокнянко В. М., Советские библиографические указатели паремнологоической и фразеологической литературы.—СЭ, 1983, No. 3.
- [276] Молдавский Д. М., И песни, и стих. М., 1983.
- [277] Моголова Л. Н., Пенккурские свадебные головные уборы.—В [282].
- [278] Ее же, К вопросу о функциях девичьих головных уборов в севернорусском свадебном обряде XVIII—XIX вв.—СЭ, 1979, No. 1.
- [279] Морозов А. А., К вопросу об исторической роли и значении скоморохов.—РФ, 16, 1976.
- [280] Морохин В. Н., Прозаические жанры русского фольклора. Хрестоматия. М., 1977; Изд. 2-ое, М., 1983.
- [281] Морохин В. Н./сост., Малея жанры русского фольклора. Пословицы, поговорки, загадки. М., 1979.
- [282] Москвина А., „Москва Пинегу сполбила...”—Север, 1975, No. 8.
- [283] Народная гравюра и фольклор в России XVIII—XIX вв. М., 1976.
- [284] Народный театр. Сб. ст. Л., 1974.
- [285] Науменко Г. М., Русские народные сказки, скороговорки и загадки с напевами. М., 1977.

- [286] Невская Л. Г., Семантика дома и смежных представлений в погребальном фольклоре.—В сб.: Балто-славянские исследования 1981. М., 1982.
- [287] Некрасова М. А., Современное народное искусство. Л., 1983.
- [288] Некрылова А. Ф., Русский народный кукольный театр „Петрушка“ в записях XIX—XX в. Автореферат к и. Л., 1973.
- [289] Ее же, Сценические особенности русского народного кукольного театра «Петрушки».—В [28].
- [290] Ее же, Некоторые особенности стиля городского зрелищного фольклора.—В кн.: Поэтика искусства слова. Воронеж, 1978.
- [291] Ее же, Об изучении русского ярмарочного фольклора.—В [21].
- [292] Ее же, Русские народные городские праздники, увеселения и зрелища. Конец XVIII—начало XX в. Л., 1984.
- [293] Некрылова А. Ф., Гусев В. Е., Русский народный кукольный театр. Л., 1983.
- [294] Новгородские Былины. М., 1978.
- [295] Новикова А. М., Русская поэзия XVIII—первой половины XIX века и народная песня. М., 1982.
- [296] Новикова А. М., Александрова Е. А., Фольклор и литература. М., 1978.
- [297] Новикова А. М., Пушкина С. И., Сладкие песни Тульской области, 1981.
- [298] Новикова А. М./ред., Русское народное поэтическое творчество. Изд. 2-ое. М., 1978.
- [299] Новичкова Т. А., Традиционные числа в былинах.—Известия АН серия Л и Я, т. 43, No. 2, 1984.
- [300] Обрядовая поэзия Пинежья. М., 1980.
- [301] Обрядовые песни русской свадьбы Сибири. Н., 1981.
- [302] Обряды и обрядовый фольклор. М., 1982.
- [303] Озерова Г. Н., Петрова Т. М., О картографировании групп русского народа на начало XX века.—СЭ, 1979,

№. 4.

- [30] Онежские былинны, записанные А. Ф. Гильфердингом летом 1881 г. Архангельск, 1983.
- [30] Огловников А. В., Русское деревянное зодчество. М., 1983.
- [30] Огловников А. В. Островский Г. С., Русь деревянная. М., 1981.
- [30] Орфинский В. П., К методике исследования деревянного зодчества.—СЭ, 1983, №. 4.
- [30] Осорина М. В., Современный детский фольклор как предмет междисциплинарных исследований.—СЭ, 1983, №. 3.
- [30] Оссовецкий И. А., Язык современной русской поэзии и традиционный фольклор.—В кн.: Языковые процессы современной русской художественной литературы. М., 1977.
- [30] Его же, Некоторые наблюдения над языком стихотворного фольклора.—В кн.: Очерки по стилистике художественной речи. М., 1979.
- [31] Его же, Лексика современных русских народных говоров. М., 1982.
- [31] Островский Г. С., О природе русского изобразительного фольклора.—СЭ, 1974, №. 1.
- [31] Его же, Сценография фольклорного театра.—СЭ, 1977, №. 2.
- [31] Его же, Русская вывеска.—В сб.: Панорама искусств. 78. М., 1979.
- [31] Очерки истории русской этнографии, фольклористики и антропологии (ОИРЭФА). Вып. 1, 1956+
- [31] Очерки русской культуры. XIII—XV веков, ч. 1, 1968; ч. 2, 1970; XVI века, ч. 1, ч. 2, 1977; XVII века, ч. 1, ч. 2, 1979.
- [31] Павлова В. А./ред., фольклор Воронежского края. Воронеж, 1965.
- [31] Паликова А. К., Песни желанной свободы. Н., 1978.
- [31] Памяти К. Квятки (1890—1953). М., 1983.

- [320] Панченко А. М., Авакум как новатор.—РД, 1982, No. 4.
- [321] Его же, «Потемкинские деревни» как культурный миф.—XVIII век, сб. 14, Л., 1983.
- [322] Панченко А. М., Успенский Б. А., Иван Грозный и Петр Великий: концепции первого монарха.—ТОДРЛ, 37, Л., 1983.
- [323] Пареминологический сборник. М., 1978.
- [324] Пареминологические исследования. М., 1984.
- [325] Першид А. И., Чебоксаров Н. Н., 50 лет журнала «СЭ».—СЭ, 1976, No. 4.
- [326] Песни и сказки пушкинских мест. фольклор Горьковской области. Вып. 1, Л., 1979.
- [327] Песни, рожденные в огне. Волгоград, 1983.
- [328] Петровская И. Ф., Театр и зритель провинциальной России. Л., 1979.
- [329] Печорские былины и песни. Архангельск, 1979.
- [330] Пинежские сказки. Архангельск, 1975.
- [331] Покровский Н. Н., Антифеодалный протест урало-сибирских крестьян-старообрядцев в 18 в. Н., 1974.
- [332] Его же, Документы XVIII в. об отношении Синода к народным календарным обрядам.—СЭ, 1981, No. 5.
- [333] Полевые исследования ИЭ. 1974. М., 1975+
- [334] Полевский этнолингвистический сборник. М., 1983.
- [335] Погевье. М., 1968.
- [336] Подицук Н. С., Рабочий фольклор как источник изучения условий труда и быта русских рабочих.—РФ, 15, 1975.
- [337] Померанцева Э. В., Мифологические персонажи в русском фольклоре. М., 1975.
- [338] Ее же, О русском фольклоре. М., 1977.

- [339] Померанцева Э. В./сост., Русские сказочники. М., 1976.
- [340] Поньрко Н. В., Русские святки XVII века.—ТОДРЛ, 37, Л., 1977.
- [341] Пословицы народные, собранные по алфавиту.—В [83].
- [342] Потанина Р. П., Свадебная поэзия семейских Забайкалья. Автореферат к. ф. н. Минск, 1977.
- [343] Потебня А. А., Эстетика и поэтика. М., 1976.
- [344] Поэтика литературы и фольклора. Воронеж, 1979, 1980.
- [345] Проблемы изучения материальной культуры русского населения Сибири. М., 1974.
- [346] Проблемы картографирования в языкознании и этнографии. Л., 1974.
- [347] Проблемы славянской этнографии. Л., 1979.
- [348] Прозанческие жанры фольклора народов СССР. Минск, 1974.
- [349] Прозвицкая Л. И. и др., Смоленские свадебные традиции в Сибири.—В сб.: Сибирский фольклор, вып. 3, Н., 1976.
- [350] Пропп В. Я., Морфология сказки. Л., 1928; Изд. 2-ое, М., 1969.
- [351] Его же, Исторические корни волшебной сказки. Л., 1946.
- [352] Его же, Русская сказка. Л., 1984.
- [353] Пулькин В., Добрая поверья. Повесть о сказочнике.—Север, 1983, No. 8 и 9.
- [354] Путилов Б. Н., Методология сравнительно-исторического изучения фольклора. Л., 1976.
- [355] Его же, Н. Н. Миклухо-Маклай. М., 1981.
- [356] Пушкирев Л. Н., Сказка о Еруслане Лазаревиче. М., 1980.
- [357] Его же, Общественно-политическая мысль России. М., 1982.
- [358] Пушкинский дом. Статьи. Документы. Библиография. Л., 1982.

- [35] Пылин А. Н., История русской этнографии. Т. 1-4. СПб., 1890-1892.
- [36] Рабинович М. Г., Очерки этнографии русского феодального города. М., 1978.
- [37] Его же, Русские письменные источники эпохи феодализма как материал для изучения этнографии города. — ОИРЭФ, вып. 9, 1982.
- [38] Рабинович М. Г., Шмелева М. Н., Город и этнические процессы. — СЭ, 1984, No. 2.
- [39] Радумова А. П., Об изучении современного состояния традиционного фольклора Карельского Поморья. — В кн.: Фольклористика Карелии. Петрозаводск, 1978.
- [40] Ролина жар-птицы. М., 1983.
- [41] Рождественская С. Б., Русская народная художественная традиция в современном обществе. М., 1981.
- [42] Розов А. Н., К сравнительному изучению поэтики календарных песен. — РФ, 21, 1981.
- [43] Росовецкий С. К., Устная проза XVI-XVII вв. об Иване Грозном-правителе. — РФ, 20, 1981.
- [44] Рукописная традиция XVI-XIX вв. на Востоке России. Н., 1983.
- [45] Русская литература (РЛ). Л., 1958-+
- [46] Русская литература и фольклор (Вторая половина XIX в.). Л., 1982.
- [47] Русская сагирическая сказка: сборник. Сост. Д. М. Молдавский. Л., 1979.
- [48] Русская свадебная поэзия Сибири. Н., 1984.
- [49] Русская свадьба: свадебный обряд на верхней и средней Кокшетье и на Уфотге. М., 1984.
- [50] Русская свадьба Карельского Поморья. Петрозаводск, 1980.
- [51] Русские волшебные сказки Сибири. Н., 1981.
- [52] Русские героические сказки Сибири. Н., 1980.
- [53] Русские народные баллады. М., 1983.

- [378] Русские народные сказки Карельского Поморья. Петрозаводск, 1974.
- [379] Русские народные сказки Пудожского края. Петрозаводск, 1982.
- [380] Русские народные сказки Сибири о богатствах. Н., 1979.
- [381] Русские народные сказки Сибири о чудесном коне. Н., 1984.
- [382] Русские письменные и устные традиции и духовная культура. М., 1982.
- [383] Русские свадебные песни Сибири. Н., 1979.
- [384] Русские эпические песни Карелии. Петрозаводск, 1981.
- [385] Русский народный свадебный обряд. Исследования и материалы. Л., 1978.
- [386] Русский народный театр (учебный фильм). Режиссер Л. Купершидт. Оператор В. Кобрин. Производство Центрнаучфильм. М., 1976.
- [387] Русский север. Проблемы этнографии и фольклора. Л., 1981.
- [388] Русский фольклор (РФ). Л., 1956+
- [389] Русский фольклор. Библиографический указатель. 1901-1916 гг. Л., 1981.
- [390] Русский фольклор в Латвии. Рига, 1972.
- [391] Русский фольклор в Латвии. Сказки. Рига, 1980.
- [392] Русский фольклор в Литве. Вильнюс, 1975.
- [393] Русский фольклор Великой Отечественной Войны. М.-Л., 1964.
- [394] Русский фольклор Сибири. Улан-Удэ, 1974.
- [395] Русский фольклор Сибири. Н., 1981.
- [396] Рыбаков Б. А., Язычество древних славян. М., 1981.
- [397] Рыбакова Л. В., К проблеме мифологических традиций в русской народной лирике.—В сб.: Фольклор на-

- родов РСФСР, вып. 7, 1980.
- [38] Рыбникова М. А., Избранные труды. М., 1983.
- [39] Сабитова И. В., О современном состоянии игровых жанров детского фольклора.—В сб.: Фольклор народов РСФСР, вып. 9, 1982.
- [40] Савоскул С. С., Н. К. Рерих и легенда о Беловодье.—СЭ, 1983, No. 6.
- [41] Савушкина Н. И., О собирании фольклора. М., 1974.
- [42] Ее же, Русская устная народная драма. Вып. 1, 2, М., 1978, 1979.
- [43] Ее же, Русская народная драма XIX-начала XX века как явление фольклорного искусства. Диссертация на соискание ученой степени доктора филологических наук. М., 1982.
- [44] Савушкина Н. И. Кулагина А. В., Экспедиционная работа кафедры русского народного творчества.—Вестник МУ, серия филология. 1977, No. 5.
- [45] Садоков Р. Л., Веселые скomorохи.—СЭ, 1976, No. 5.
- [46] Самышкина А. В., К проблеме гоголевского фольклоризма.—РЛ, 1979, No. 3.
- [47] Сборник Музея антропологии и этнографии (СМАЭ). т. 1, 1900+
- [48] Северные предания (Беломорско-Обонежский регион). Л., 1978.
- [49] Седякова О. А., Материалы к описанию полевского погребального обряда.—В [33].
- [40] Селиванов Ф. М., К вопросу об изучении историзма русского эпоса.—РЛ, 1984, No. 1.
- [41] Семенова Л. Н., Рабочие Петербурга в первой половине XVIII в. Л., 1974.
- [42] Ее же, Очерки истории быта и культурной жизни России. Л., 1982.
- [43] Сибирская археология и источниковедение. Н., 1979.
- [44] Сибирские частушки. Н., 1977.

- [415] Сибирское источниковедение и археография. Н., 1980.
- [416] Сидельников В. М., Русская народная песня. Библиографический указатель 1735-1945 гг. М., 1962.
- [417] Его же, Писатель и народная поэзия. М., 1980.
- [418] В. И. Симakov и народное творчество. Калинин, 1977.
- [419] Смигина Г. Я., Народные приметы и поверья Пинежья.—РФ, 21, 1981.
- [420] Сказки Белозерского края. Архангельск, 1981.
- [421] Сказки и легенды пушкинских мест. М.-Л., 1950.
- [422] Сказки Пудожья (1932-1978). Каталог русского рукописного фонда научного архива Карельского филиала АН СССР. Петрозаводск, 1979.
- [423] Скатов Н. Н., Кольцов М., 1983.
- [424] Славяноведение в дореволюционной России. Библиографический словарь. М., 1979.
- [425] Славянский и балканский фольклор. М., 1971.
- [426] Славянский и балканский фольклор. М., 1978.
- [427] Славянский и балканский фольклор. М., 1981.
- [428] Словник русских фольклористических терминов. Л., 1978.
- [429] Слово гнева народного. Львов, 1981.
- [430] Смирнов В. А., Обряд «крещения» и «похорон кукушки» и купальская обрядовая поэзия восточных славян.—РФ, 20, 1981.
- [431] Смирнов И. П., Древнерусский смех и логика комического.—ТОДРЛ, 32, 1977.
- [432] Его же, Эпическая метонимия.—ТОДРЛ, 33, 1979.
- [433] Смирнов С. В., Федор Иванович Буслаев. М., 1978.

- [43] Соболев А. И./сост., Русские пословицы и поговорки. М., 1983.
- [43] Собрание народных песен П. В. Киреевского. Записи Лыковых в Симбирской и Оренбургской губерниях, т. 1, Л., 1977.
- [43] Собрание народных песен П. В. Киреевского. Записи П. И. Якушкина, т. 1, Л., 1983.
- [43] Советская этнография (СЭ). М., 1931+
- [43] Советское источниковедение Киевской Руси. Л., 1979.
- [43] Советское славноведение. М., 1965+
- [40] Современный русский фольклор Сибири. Н., 1979.
- [41] Соколов Ю. М., Русский фольклор. М., 1938, 1940.
- [42] Соколова В. К., Русские исторические предания. М., 1970.
- [43] Ее же, Весенне-летние календарные обряды русских, украинцев и белорусов. М., 1979.
- [44] Ее же, К исследованию обрядового фольклора.—СЭ, 1981, No. 4.
- [45] Соломоник И. Н., Проблемы анализа народного театра кукол.—СЭ, 1978, No. 6.
- [46] Сылка и каторга в Сибири. Н., 1975.
- [44] Станюкович Т. В., Кусткамера Петербургской Академии наук. М.-Л., 1953.
- [48] Ее же, Этнографическая наука и музеи. Л., 1978.
- [49] Станюкович Т. В., Цистов К. В., Этнография и актуальные проблемы развития этнографических музеев.—СЭ, 1981, No. 1.
- [45] Старикова тайна. Сказки Прикамья в записи И. В. Зырянова. Пермь, 1981.
- [45] Старинная севская свадьба. М., 1978.
- [45] Старый Петербург. Историко-этнографические исследования. Л., 1982.

- [53] Степанова А. С., Коски Т. А., Карельские причитания. Петрозаводск, 1976.
- [54] Страхов А. Б., Из истории и географии русского обрядового пения. — В [80].
- [55] Структура текста-81. Тезисы симпозиума. М., 1981.
- [56] Сурхаско Ю. Ю., Карельская свадебная обрядность. Л., 1977.
- [57] Тарланов З. К., Очерки по синтаксису русских пословиц. Л., 1982.
- [58] Театральное пространство. М., 1979.
- [59] Терновская О. А., О некоторых сходствах и различиях в жатвенной обрядности славян. — В кн.: Формирование раннефеодалных славянских народностей. М., 1981.
- [60] Таме Г. А., Русские писатели и проблема народного театра в 1880-х—начале 1890-х годов. — РД, 1977, No. 4.
- [61] Типология и взаимосвязи фольклора народов СССР. М., 1980.
- [62] Титова З. Д., Этнографическая библиография в изданиях РГО (1845–1917). — ОИРЭФА, вып. 9, 1982.
- [63] Токарев С. А., История русской этнографии. М., 1966.
- [64] Еро же, Истоки этнографической науки. М., 1978.
- [65] Еро же, История зарубежной этнографии. М., 1978.
- [66] Еро же, Обычай и обряды как объект этнографического исследования. — СЭ, 1980, No. 3.
- [67] Толстой Н. И., Из заметок по славянской демонологии. 1. Октуда дьяволы разные? В кн.: Материалы Всесоюзного симпозиума по вторичным моделирующим системам. 1 (5), Тарту, 1974; 2. Каков облик дьявольский. — В [82].
- [68] Толстые Н. И. и С. М., Заметки по славянскому язычеству. 1. Вызывание дождя у колотца. — Рф, 21, 1981; 2. Вызывание дождя в Полесье. — В [87]; 3. Первый гром в Полесье. 4. Защита от града в Полесье. — В [88];

5. Защита от града в Драгачеве и других сербских зонах.—В [56].
- [469] Их же. О задачах этнолингвистического изучения Полесья.—В [55].
- [470] Традиционный фольклор владимирской деревни. М., 1972.
- [471] Традиционный фольклор новгородской области. Л., 1979.
- [472] Труды Института этнографии. Новая серия (ТНЭ). М., 1947+
- [473] Труды Отдела древнерусской литературы Института русской литературы (ТОДРЛ). М.-Л., 1934+
- [474] Тудоровская Е. А., О структуре волшебной сказки.—Рф, 13, 1972.
- [475] Ее же, Задачи работы над волшебной сказкой для Свода русского фольклора. —Рф, 17, 1977.
- [476] Тулицева Л. А., Религиозные верования и обряды русских крестьян на рубеже XIX и XX веков.—СЭ, 1978, No. 3.
- [477] Ее же, Символика воробья в обрядах и обрядовом фольклоре.—В [55].
- [478] Тэрнер В., Символы и ритуал. М., 1983.
- [479] Угличские народные песни. Из новых записей русских народных песен. Л.-М., 1974.
- [480] Уральские частушки. Свердловск, 1979.
- [481] Успенский В. А., Филологические разыскания в области славянских древностей. М., 1982.
- [482] Устная поэзия рабочих России. М.-Л., 1965.
- [483] Федеев Л. А., Этнографическая тематика в «Современнике» А. С. Пушкина.—ОИРЭФА, выпл. 9, 1982.
- [484] Федосова И. А., Избранное. Петрозаводск, 1981.
- [485] Физиология Петербурга. М., 1984.
- [486] Фольклор. Издание эпоса. М., 1977.
- [487] Фольклор. Поэтика и традиция. М., 1982.

- [48] фольклор. Поэтическая система. М., 1977.
- [49] фольклор и литература Урала. Свердловск, 1971+
- [50] фольклор и этнография. Связи фольклора с древними представлениями и обрядами. Л., 1977.
- [51] фольклор и этнография. У этнографических истоков фольклорных сюжетов и образов. Л., 1984.
- [52] фольклор как искусство слова. М., 1966+
- [53] фольклор народов РСФСР. Уфа, 1974+
- [54] фольклор русского населения Прибалтики. М., 1976.
- [55] фольклор семиреченских казаков. Ч. 1, 2, Алма-Ата, 1977, 1979.
- [56] фольклор Урала. Свердловск, 1976, 1978.
- [57] Формозов А. А., Историк Москвы. И. Е. Забелин. М., 1984.
- [58] Фроянов И. Я. Юдин Ю. И., Исторические реальности и былинная фантазия.—В кн.: Духовная культура славянских народов. Л., 1983.
- [59] Фрезер Дж. Дж., Золотая ветвь. М., 1980.
- [60] Хайченко Г. А., Русский народный театр конца XIX-начала XX века. М., 1975.
- [61] Хозяйство и быт западносибирского крестьянства XVII-начала XX в. М., 1979.
- [62] Хренов Н. А., Социально-психологические аспекты взаимодействия искусства и публики. 1981.
- [63] Хроленко А. Т., Поэтическая фразеология русской народной лирической песни. Воронеж, 1981.
- [64] Частишки западной Сибири. Н., 1982.
- [65] Частишки северного края. Архангельск, 1983.
- [66] Чеботарева В. Г., К проблеме мифотворчества в русской советской прозе двадцатых годов.—РФ, 21, 1981.
- [67] Черепанова О. А., Мифологическая лексика русского севера. Л., 1983.

- [38] Черная Л. А., Пародия на церковные тексты в русской литературе XVII в.—Вестник МГУ, серия история, 1980, No. 2.
- [39] Чернышева Н. Г., Опыт изучения эпической памяти.—В [39].
- [40] Чижикова Л. Н., Изучение сельского жилища восточных славян. Итоги и задачи классификации.—СЭ, 1976, No. 4.
- [41] Чистов К. В., Русские народные социально-утопические легенды XVII-XIX вв. М., 1967.
- [42] Его же, Фольклор и этнография.—СЭ, 1968, No. 5.
- [43] Его же, Проблемы картографирования обрядов и обрядового фольклора. Свадебный обряд.—В [39].
- [44] Его же, Севернорусские причитания как источник для изучения крестьянской семьи XIX века.—В [39].
- [45] Его же, Поэтика славянского фольклорного текста. Коммуникативный аспект.—В кн.: История, культура, этнография и фольклор славянских народов. М., 1978.
- [46] Его же, Русские сказители Карелии. Петрозаводск, 1980.
- [47] Его же, Традиция, «традиционные общества» и проблема варьирования.—СЭ, 1981, No. 2.
- [48] Его же, В. Я. Пропп: легенды и факты.—СЭ, 1981, No. 6.
- [49] Его же, Традиция и вариативность.—СЭ, 1983, No. 6.
- [50] Его же, Сотрудничество этнографов-славистов.—В кн.: Славяноведение и балканистика в зарубежных странах. М., 1983.
- [51] Его же, Из истории советской этнографии 30-80 гг. XX века.—СЭ, 1983, No. 3.
- [52] Его же, Вариативность и поэтика фольклорного текста.—В кн.: История, культура, этнография и фольклор славянских народов. М., 1983.
- [53] Чистяков В. А., Представление о дороге в заоблачный мир в русских похоронных причитаниях XIX-XX вв.

—В [24].

- [24] Его же, Из котомки офени.—В сб.: Альманах Библиофила, вып. 14, М., 1983.
- [25] Чичеров В. И., Зимний период русского земледельческого календаря XVI—XIX веков. М., 1957.
- [26] Его же, Школы сказителей Заонежья. М., 1982.
- [27] Шаповалова Г. Г., Изучение детского фольклора О. И. Капицей.—ОИРЭФА, вып. 4, 1968.
- [28] Его же, Диалог в русском свадебном обряде.—СЭ, 1978, No. 1.
- [29] Шафрановская Т. С., Музей антропологии и этнографии АН СССР. Л., 1979.
- [30] Шмелева М. Н. Рабинович М. Г., К этнографическому изучению города.—СЭ, 1981, No. 3.
- [31] Щербанов Н. М., Фольклорные и этнографические интересы И. И. Железнова.—ОИРЭФА, вып. 8, 1978.
- [32] Этнографические исследования северо-запада СССР. Традиции и культура сельского населения. Этнография Петербурга. Л., 1977.
- [33] Этнография детства. Традиционные формы воспитания детей и подростков. Т. 1, 2, М., 1983.
- [34] Этнография русского крестьянства Сибири XVIII—середина XIX в. М., 1981.
- [35] Юдин Ю. И., Типология героев бытовой сказки.—РФ, 19, 1979.
- [36] Его же, Историческое и диалогическое в русских бытовых сказках о супругах.—РФ, 20, 1981.
- [37] Юхнева Н. В., Изучение города как этнографическая проблема.—В [38].
- [38] Его же, Этнический состав населения Петербурга в конце XIX—начале XX в.—В [39].
- [39] Его же, Об этнических аспектах изучения населения дореволюционного Петербурга.—СЭ, 1980, No. 1.
- [40] Его же, Петербург—многонациональная столица.—В [41].
- [41] Язык жанров русского фольклора. Петрозаводск, 1979.
- [42] Ялунок Е. Н., Современное состояние хороводной традиции.—Вестник МУ, 1974, No. 4.

- [543] Billington J. H., *The Icon and the Axe*. N. Y., 1966.
- [544] Blinov G., *Russian Folk-Style Figurines*. M., 1983.
- [545] *The Family in Imperial Russia*. Ed. by D. L. Ransel. Univ. of Illinois Press, 1978.
- [546] *The Lubok, Russian Folk Pictures 17th to 19th Century*. L., 1984.
- [547] Miklouho-Maclay N., *Travels to New Guinea*. M., 1982.
- [548] Putilov B. N., Nikolai Miklouho-Maclay. *Traveler, Scientist and Humanist*. M., 1982.
- [549] Stanyukovich T. V., *The Museum of Anthropology and Ethnography*. L., 1970.
- [550] Warner E. A., *The Russian Folk Theatre*. Hague-Paris, 1977.
- [551] Zelenin D., *Russische (Ostslavische) Volkskunde*. Berlin-Leipzig, 1927.
- [552] Zguta R., *Russian Minstrels: A History of the Skomorokhi*. Philadelphia, 1979.
- [553] 高田和夫「民衆・伝統・共同体」『ロシア史研究』二七、一九七八年
- [554] 土肥恒之「ロシア近世農民闘争とイデオロギーの問題——ソヴェト史学の現況について——」『人文研究』（小樽商科大学）六一、一九八〇年
- [555] 中村喜和「書評B・A・ルィバコフ『古代ロシア、説話・フィリーナ・年代記』」『一橋論叢』五二—六、一九六四年
- [556] 同「日本国白水境探求——ロシア農民の「ユートピア」について」『ロシアの思想と文学』恒文社、一九七七年
- [557] 林基「ソ連邦における階級闘争史研究」『階級闘争の歴史と理論』第一冊、青木書店、一九八一年
- [558] 同訳、ヴェ・ア・フォードロフ「革命情勢初期（一八六一年二月一九日まで）の農民運動の諸要求」『専修人文論集』二六、一九八一年
- [559] 坂内徳明「ソ連民俗学の現在」『民族学研究』四二—四、一九七八年
- [560] 同「ある泣き女の生涯」『窓』三九、一九八一年
- [561] 同「モスクワの五ヶ月」『なろうど』六、一九八二年

- 〔562〕 同「ソビエト民俗学における婚礼研究の動向」『なるうと』七、一九八三年
- 〔563〕 同「ソビエトにおけるナロードノエ・グリャーニエ（民衆遊歩）研究の現段階と今後の方向」『一橋論叢』八九五、一九八三年
- 〔564〕 同「住まいの民俗学の新たな展望——A・K・バイブーリン『東スラヴ人の儀礼と観念における住居』」『一橋論叢』九一—六、一九八四年
- 〔565〕 和田春樹『農民革命の世界』東京大学出版会、一九七八年

本稿は昭和五九年度科学研究費補助金（奨励研究（A）課題番号五九七二〇一七七）による研究成果の一部である。